



映画に
宛てた
ラブ
レター

2008~2009年版

天見谷行人

ご挨拶

ようこそ、レッドカーペットへ。これから映画の魅力をご一緒に探ってゆきましょう。

私事ですが、2008年、私は17年間住み慣れた名古屋を引き払い、故郷、神戸に帰ってきました。しかし、わたしにとって懐かしいはずの神戸は、まるでタイムマシンから降り立ったような場所でした。何もかもが変わってしまったように感じられたのです。

「自分の懐かしい故郷は、もうどこにもない」

そんなとまどいの中で、私は自分の居場所を求めて、神戸の映画館での映画鑑賞を始めるのでした。それは私にとって、いちから自分の新たな故郷、新たな居場所をつくるような作業に思えました。

この本は、2008年1月1日から2009年12月31日までに私が映画館、およびDVDで鑑賞した、洋画64本、邦画28本を収めた映画のレビュー集です。各作品私の独断と偏見による5点満点の採点をつけてみました。レンタルビデオ店でDVDを借りるときのご参考にでもして頂ければ嬉しいです。

あなたのお好きなように、どこからでもお読み頂けるように、一作品一ページにレイアウトしてみました。

また、予告編のアドレスも掲載致しました。コピーしてお使い下さいませ。

巻末には、2008年～2009年の映画マイベスト10も選んでみました。

ご案内役はわたくし、天見谷行人が務めさせていただきます。

ではごゆっくり、映画の森をご散策下さい。また、映画館でお会いしましょう。

再会の街で

2008年1月19日鑑賞

赤丸急上昇！ドン・チードル

この作品は僕が名古屋を引き払う直前に鑑賞した。感傷的な想いで観た印象的な作品だった。そもそも、ドン・チードルがみたくてこの映画を選んだけれど、オープニングのシーンから、「この映画は当たりだぜ！！」とおもわせた。

なにげないニューヨークの街角を遠景で撮っている。

そこに現れるモータースケート（っていうのかな？これでいい？）に乗ったアダム・サンドラー。フラ～とスクリーンの左から右端へ走って消えてゆく。カメラは固定だ。実にさりげない導入部。

やはり、いい映画はオープニングのシーンの入り方が印象的だ。

アダム・サンドラーは良く知らなかった俳優さんだけど、このひとの演技はすごかった。

見た目は、イカれた兄ちゃん風である。眼の集点も合っていない。

どこか、あさっての方向を向いているし、俺の人生どうでもいいや、てなかんじなのだ。

心配した周囲の人たちが、彼の心の中に介入しようとする。

とたんに激しい感情を剥き出しにする。実は彼、あの9・11テロで家族すべてと愛するペットまでも失っていたのだ。

彼の学生時代の友人で、黒人歯科医をドン・チードルが演じている。

やはり彼には誠実な役柄がよく似合う。

「ホテル・ルワンダ」での演技もすばらしかった。

一人の等身大の人間。ヒーロでもなんでもない。

自分の与えられている仕事を、誠実につとめようとする。

そんな、一市民をやらせるとほんとうにうまい。

最近は黒人俳優がすばらしい。

偉大なモーガン・フリーマン、大好きなデンゼル・ワシントン、エディー・マフィー、新境地を開く、フォレスト・ウィテッカー、そして赤丸急上昇なのが、ドン・チードルだ。

この映画、あの9・11テロ以後、その一被害者たちがその後、どう生きているのかを、おそらく初めて真正面から捉えたアメリカ映画だと思う。

9・11テロそのものを描く、または、あの事件の真相を暴こうとする視点での映画は、既に終わった様に感じるのだ。

ようやく、アメリカ市民は「アフター9・11」と真正面から取り組もうとしている。

それを象徴する映画だ。意義深い映画である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 マイク・バインダー

主演 ドン・チードル、アダム・サンドラー

製作 2007年 アメリカ

上映時間 124分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

https://www.youtube.com/watch?v=sRiqz_WnYxc

迷子の警察音楽隊

2008年2月9日鑑賞

まだ迷子の国もある

イスラエルに招かれたエジプトの警察音楽隊が

迷子になってしまうお話である。

オープニングからして、何となくおかしさがこみ上げてくる。

公式なご招待なら、役所から出迎えの人が来るべきだ。

ところが誰ひとりやっこない。

朝から何にも食べていないし、どこへどう行ったらいいかもわからない。

困り果てた警察隊は、近くの食堂に助けを求める。

この映画は、その食堂の美しい女主人や出入りの人々と、警察音楽隊との交流を描いていく。

やはり、イスラエルとエジプトとの政治的な関係を把握していないと、面白さはよくわからないところが多い。

それでもだ。

どの国でも、若者は若者であり、男女は恋愛をするのである。

特にダンスホールで、若い隊員が恋の手助けをしようとするくだりは、何とも絶妙な可笑しさである。

不器用で、真剣な恋愛だからよけい面白いのだ。

彼ら音楽隊は映画の前半、時々クラリネットを鳴らしてみたりするシーンがあるけれど、はっきり言ってそのレベルはお粗末。

これでだいじょうぶなの？

日本の高校生以下じゃないの？

とおもってしまうが、そこは最後につじつまが合う。

彼らはエジプトの民族音楽を専門とする楽団なのだ。

ラストシーンでは、とてもエキゾチックで楽しい音楽を奏でてくれる。

わかりにくい両国の、微妙な関係を背景に描いたこの映画。

お互いをつなげているのは、音楽と言う「手段」であり、それは意外にもアメリカナイズされた、ジャズ調のアラブ音楽であったりする。

もっと意外なのは、お互いのコミュニケーションに英語を使っている事なのだ。

日常的にいくつもの言語を使い分けないと生活できない。

そんな状況は、かつての日本の沖縄であり、アイヌの人々を思わせる。

政治的な傷跡を、少しでも音楽が癒してくれる事を願いたい。

時折背景に、荒涼としたイスラエルの大地がうつしだされたり、

食堂の壁にかかっている写真は、かつての戦時中のものだったりする。

音楽隊も迷子になってしまったが、イスラエルそのものも、いつまで迷子を続けるのか、という強烈な皮肉をも込められた、

上質の人情劇だとおもう。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 エラン・コリリン

主演 サッソン・ガーベイ、ロニ・エルカゲッツ

製作 2007年 イスラエル／フランス

上映時間 87分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=bz_FB4B763Q

2008年2月11日鑑賞

カムバックだ！！

(この作品はDVDで鑑賞)

この作品、もっと評価されていいと思う。

マーティン・スコセッシ監督のカメラワークを含めた演出はすばらしい。

映像作家としてのマーティン・スコセッシ監督の語り口は抜群だ。

トム・クルーズと、ビリヤードを大ブレイクさせた作品としても有名だ。

今更何を語る必要があるのかと思わせる傑作だと思う。

ポール・ニューマン演じる、エディーの人生は、そのものがギャンブルである。

プロゴルファー、プロテニスプレイヤー、なんであれ極論してしまえばギャンブルだ。賞金稼ぎだ。

自分の才能と技量で金を稼ぐ。

それが何が悪い？

僕は以前、パチプロを目指した。

毎日その日のリターンや、パチンコのデータを分析した。

結果、パチプロはあきらめた。

そして株を始めた。

結果を残せた。

更には株取引をマニュアル化する事に成功した。

年間リターン86%の好成績だった。

ただ、元本が47万円しかなかった。

それだけの問題で、僕は市場から撤退した。

僕の友人は1000万円の元本で500万円の損失を出した。

しかし結果的に彼は市場に残った。僕は市場から撤退を余儀なくされた。

金がなかったからだ。僕は負けた。

それがギャンブルの世界だ。強いものが勝つ。それだけだ。

この映画、フォレスト・ウィテッカーの演技も見逃せない。

まだ坊やと言えるような、トム・クルーズ、

そして円熟の境地を見せるポール・ニューマン。

お互いの才能を認め合った上での演技バトルを堪能できる。

更に音楽面でもその選曲はしびれる。

エリック・クラプトン、フィル・コリンズなど、実に効果的な曲をチョイスしているのだ。

どこから切ってもその断面がキラキラ輝いている、しかも味わい深い作品である。

個人的な思い出もあって再び鑑賞した映画だ。

僕は今年、再び生まれ故郷である神戸に戻った。

神戸人でありながら、阪神大震災を体験しなかった、卑怯者の神戸人だ。
エディーがギャンブラーとしてカムバックしたように、
僕は神戸人としてカムバックする。

あなたはこの作品に何を読み込むだろうか？

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 マーティン・スコッセッシ

声優 ポール・ニューマン、トム・クルーズ

製作 1986年

上映時間 119分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=Ct6c9XuPZCQ>

2008年2月13日鑑賞

ワインディングはまだ続く

(本作はDVDで鑑賞)

気ままな放浪の旅に出てみたい、と、
思わせてしまう映画だ。

だけどよく考えると、自分でもまだ旅の途中なのだ、と言う事に気がつく。

誰もみんな、人生と言うロング・アンド・ワインディングロードに行く者なのである。
若きチェ・ゲバラの放浪の旅を綴ったこの映画。

彼の後の行動を決定づける旅となる意義深いものである。

そこにあったのは、まぎれもなく圧倒的な現実だった。

彼はそこに弱い者たちへの共感を体に刻み込んだ。

知識というかたちで頭では分かっているつもりでも、

否応なく旅は、体に厳しい現実を刻み込んでしまう。

だが、旅をした事がないような人でさえ、

実は感受性と、疑問を持てば、どこにいても

旅に出ているのと同じことなのである。

同じ旅を続ける二人にも関わらず、

相方のアルベルトは享樂的で

どこに行っても女を漁る事にしか興味がない。

二人は旅の途中はひどい格好はしているが、

医者と言う社会的には高い地位を約束されている身である。

また、医者になるための学校へも通える、生活環境なのである。

だが、ゲバラは現実を観てしまった。

そして疑問を持ってしまった。

弱い者が弱いままにされ続けている事を。

彼はこの後、革命と言う新たな旅を目指す事になる。

ちょうど、NHKで、ゲバラを取り上げた番組があって、

以前から気になっていたこの作品をようやく観た。

観終わってもまだ人生に迷い続け、ワインディングを続ける僕がいる。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ウォルター・サレス

主演 ガエル・ガルシア・ベルナル、
ロドリゴ・デラ・セルナ

製作 2003年 イギリス／アメリカ

上映時間 127分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=_k67hkAyrE

2008年2月17日鑑賞

笑顔の合図、ハイ！ウィスキー！

(DVDにて鑑賞)

朝、工場のシャッターを開け、いつものように縫製機械の電源を入れる。

もう何年同じことをやったら気が済むのか？

というぐらい同じ作業を、来る日も来る日もやっている。

工場経営者の男、ハコボと工場の主任である中年女マチルダ。

そこにちょっと刺激的なことが起こるわけです。

ハコボの母の葬儀のため、しばらく会ってない弟がブラジルからやってくる。

弟も同じ靴下工場の経営をやっていて、仕事はそこそこうまくいっているよう。

それなりに羽振りもよさそうです。

経営の才能の違いといってしまうとそれまでですが.....

面白くもない兄としては、カッコをつけるために、工場の女主任と夫婦を演じることに。

いつもと同じことの繰り返しの場面の中に、中年女のトキメキの部分が、、少しずつ画面に入り込んでいく。

これは絶妙な演出でした。

それに兄と弟とのボケと突っ込み。そして会話の間。

よく出来た漫才あるいは、落語の世界ですよ、これは。

ラストシーンなどは、まさに漫才で言う「考え落ち」です。

えっ、これでおわりなの？っていうやつ。

感想としては悪くない。としか言いようがありません。

他の方のレビューなどを見ると相当な高評価。

ちょっと期待しすぎました。

もう少し笑わせてくれる部分があれば最高なんです。

人生にほんのちょっと刺激を与えること。

そこにいて当たり前という人が、そこにいないとき、実はとても重要な人だったのだ、という事にふと気がつくのです。

そんな時立ちどまって記念写真でも撮りましょうか。

人生の節目に、普段は見せない、とびきりの笑顔で。

もちろん合図はハイ、チーズ！ではなく、

ハイ、ウィスキー！で。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 フアン・パブロ・レベージャ、パブロ・ストール

主演 アンドレス・パソス、ミレージャ・バスクアル

製作 2004年 ウルグアイ／アルゼンチン
ドイツ／スペイン

上映時間 94分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=FYuPjUQiQLs>

ヒトラーの贗札

2008年2月24日鑑賞

カメラ以外はすべていいのだが

大変骨太なドラマを見せてくれる作品である。

ナチスの偽札つくりを史実に基づいて製作した映画である。

ストーリーはノンフィクションなのだから

はっきり言ってしまえば面白くて当たり前なのである。

物語のセオリーと言うのがある。

「事実は小説より奇なり」がそれである。

そもそもユダヤ人を根絶やしにしようと言うドイツ第三帝国、

ヒトラーの野望を実現しようとした行為自体が『小説より奇なり』なのだ。

ほんとに信じられない。

それが当時、ドイツだけではなく米国でも一部の人々に支持されていたのである。

ほんまかいな?! である。

それが動かせない事実なのだ。

当然のことながら、その異常な時代の雰囲気、克明に記録する事自体、とても興味深い事だし、意義のある事だ。

それが映画作品となる。

さて、あくまで映画なのである。

これは僕の個人的な感覚である。

この作品はあまり好きになれない。

カメラが大嫌いだ。

事実をもとにした貴重なストーリーと、渋い役者さんの見事な演技がみられるのに、なんでこんなカメラワークを選択したのか?

そこに監督の趣味があるのだろう。

全編、手持ちカメラで、絶えずふらふら動く画面は、はっきり言って気持ち悪くなる。

僕はめまいの持病を持っているのでよけいである。

その手持ちカメラが見事に破綻したショットがある。

それもなぜか監督は編集で採用してしまった。

小競り合いの中、画面右側の人倒れるシーンで、中央に向いていたカメラはすかさず、右に振って（これを撮影用語でパンと言う）映そうとするのだが、人が倒れるタイミングを見事にはずしてしまった。

そのすぐ後、今度は左に急激にパンする。

つまりはこの左へのパンの準備のために、右側の人倒れる瞬間を逃してしまったのである。

よくまあ、こんなバカなショットをOKしたものである。

観客もなめられたもんだ。

ストーリーとキャストイング、それに舞台装置、圧倒的なリアリズム。

これだけ素晴らしいものを持っている作品だけに、あまりにも悔しい。

これでは作品中、あっけなくバンバンぶっ殺されていくユダヤ人役のエキストラも浮かばれないだろう。

何より、本当に収容所で亡くなられた人たちに、失礼であると思う。もう少し襟を正して、作品と向き合ってほしいと思った。

先日亡くなられた熊井啓監督の「海と毒薬」をぜひみてほしいと思う。戦時中、軍部と結託した日本人医師が、米兵捕虜を生体解剖した事件である。戦時中の不幸な出来事をどの視点で捉えたらいいのか？ 一つのヒントを与えてくれる、秀作である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ステファン・ルツォヴィスキー

主演 カール・マルコヴィスク、アウグスト・ディール

製作 2007年 ドイツ／オーストリア

上映時間 96分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=qwr9nCurEEQ>

2008年3月5日鑑賞

黒きバベルの塔にエーメン

これよかったなあ、観に行ったら正解でした。
デンゼル・ワシントンが出ていたので、観てみたかったです。
ようやく観ることができました。
この映画、いいショットがいっぱいありますね。
ギャング世界の頂点に上り詰めた主人公。
白い白い大邸宅を買った。
貧乏な、貧乏な、田舎で暮らしてる兄弟のため、
親戚のため、そして何より大事な、老いた母親のため。
みんな一緒に住もうと、親類縁者みんなを彼は呼びよせます。
その白い、白い、真っ白な大豪邸を見た母親の、何とも言えない感激の顔。
ええ女優さんですなあ～、この母親役の人。
でもこの家は黒い、黒い、真っ黒な、汚いお金で買ったもの。
その家を目指してみんなで小高い丘を登っていく。
いいショットでした。
更に後半からはアクションシーンがかなりあります。
やっぱり、リドリー・スコット監督はアクション、うまいですね。
そして、そして、待ってました。
(と声をかけたくなったんですよ、ほんとに。)
デンゼル・ワシントンと、ラッセル・クロウの二人芝居。
いいですよ～。
一杯の紙コップのコーヒーのやり取り。
小道具の使い方がうまい。心憎い！！
これだけでお互いの気持ちを表現しますね。
最高の芝居を見せてくれました。

主人公は闇の世界で頂点に上り詰めました。
それは彼のすばらしい手腕と、いい師匠に出会えたからでした。
なによりかれは「ビジネス」として「事業」として
闇の仕事に真摯な態度で取り組みます。
そして築いた地位と名誉。そして「マネー」
しかし、黒い巨塔はやはりバベルの塔だったのです。
彼は足下から崩れていく黒いバベルの塔の頂上で
どんな心境だったのでしょうか？

愚かな人間と言うものに、"エーメン"と祈りを捧げたいです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

作品データ

監督 リドリー・スコット

主演 デンゼル・ワシントン、ラッセル・クロウ

製作 2007年 アメリカ

上映時間 157分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=bTWuHoy3JMQ>

スタンドアアップ

2008年3月13日鑑賞

こんな勇気を持ちたかった

(DVDにて鑑賞)

なぜ女性達はこれほどまでにタフで強いのだろう。

史上初のセクハラ集団訴訟を勝ち取った女性達の物語である。

これは事実に基づいてつくられた映画だ。

主人公の女性はティーンエイジャーだった頃、それなりに遊んでいた人だ。

訴訟になれば、その詳細が白日の下にさらされる。

あまりに過酷で恥辱的な表現も法廷で証言される。

しかし、彼女には生きていくために職場が必要だった。

守るべき愛すべき子供達もいた。

たとえその子供が、望まない妊娠で生まれた子供であったとしても。

守るべき自分だけの子供なのだ。

なにより、法廷でどんな恥辱を受けようが、それは職場で受けるセクハラの方が数百倍も恥辱的だったのだ。

僕には彼女達のような勇気はとてなかつた。

臆病者だった。

僕は職場でパワーハラスメントというヤツを受けた事がある。

営業マンだった僕は成績不信に落ち込んだ。

「てめえ、この成績でいいのかよ！！」

営業部長は目の前でスチール机を蹴り飛ばした。

ドーンという大きな音がした。

スチール机はベコベコにへこんだ。

すぐ廃棄処分しなければいけないほどに。

ある日、同僚の売れない営業マンが会社を去った。

営業部長から

「俺の股の下をくぐれ！！」

といわれたそうだ。唇を噛み締めて僕に話してくれた。

悔しかっただろうと思う。

これ以外にも思い出したくない屈辱的な出来事がいくつもある。数え上げたらきりが無い。

心の傷が癒えるまで何年もかかった。

仕事を得る、収入を得るために、なぜ人間の尊厳まで

奪われねばならないのだろう。

根本的な問いかけを世の中に立ち上がって訴えた、作品自体がまさに「スタンドアアップ」した、

「声を発した」意義ある映画だと思う。

なお、演出についてどうしても書いておきたい。

演技もそうなのだが、なにより、ニキ・カー口監督の絵作りがあまりにもすばらしい出来だったので、驚嘆した。

編集が見事だ。

鉄鉱石の採掘現場や、雪深い街、

広大な荒れ野を走る、主人公家族を乗せた小さなクルマ。

その存在のなんと小さい事か。

これらがまるで風景画を描くように撮影されている。

そしてカットの繋げ方に変な作為がないのだ。こういう風に見せてやろう、アッとさせてやろうという安直な作為は、観客にそれこそアツという間に見透かされる。

本作では、セリフもない淡々とした絵のつながり、それ自体が見事なストーリーとなっているのである。

映像を見るだけでもう、主人公達の背負っているバックグラウンドが分かるのだ。

こういう絵を撮ってほしいよね。他の監督も。

それこそが、正に映画というものなんだから。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ニキ・カー口

主演 シャーリーズ・セロン、フランシス・マクドナーンド

製作 2005年 アメリカ

上映時間 124分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=jXkVQm0QPyY>

エリザベス:ゴールデン・エイジ

2008年3月26日鑑賞

人生いろいろ、立場もいろいろ

ケイト・ブランシェットの演技はもう十分すぎるくらい魅力的。

女王を演じるその気品の高さと、傲慢さと、そして一女性であること。やはり魅力的な男性には、恋心を持ってしまうひとりの女性。

淡い乙女のような恋心を抱いた男性は、侍女に寝取られてしまい、激しく感情を爆発させるエリザベス。

それもまた人生。ひとりの女性。

そんな複雑な役柄を的確に演じ分ける力量には、改めてすごい女優さんだなあと感激します。

なんと言ってもこの映画の見所は、その美術にある訳です。

絢爛豪華、きらびやかな衣装の数々、そして王朝時代の建築物
室内調度品、どれもすばらしい質感と美しさで、まさに時代絵巻。

後半になってスペイン軍が大英帝国に攻め込んでくる。

その大船団。これは当然CG,VFX,で構成される訳ですが、その質感などもとても優れております。

やがて彼女は取り巻き連中から裏切り、陰謀にはまります。

怒り狂う女王としての自分。

自分のアイデンティティとは一体なんなのか？

自分は民とともにある。

「自分がすなわち大英帝国である」ということに、彼女は気づいてゆくのです。

攻め入るスペイン無敵艦隊に対抗すべく、光り輝く甲冑に身を固め、白馬にまたがり、自ら先頭に立って軍を鼓舞するエリザベス。

彼女の心中はどのようなものだったのでしょうか？

人生いろいろ、恋もいろいろ、立場もいろいろなんですね。

作品全体を通してストーリーを追いかける事に終始した感じが否めませんが。

とはいえ、これだけの膨大な内容を、たった114分の中に埋め込むという作業は、とてつもない種々選択を選ばれる訳です。監督の心中お察し申し上げます。お疲れさまでした、と申し上げたくなる作品でした。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 シェカール・カブール

主演 ケイト・ブランシェット、ジェフリー・ラッシュ

製作 2007年 イギリス／フランス

上映時間 114分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=XcUrXtg0AW8>

2008年4月2日鑑賞

時にはこういう映画もある

僕にこの映画を理解したり、共感したりする感性がなかった
としかいえません。

たまたまヤバイ金を奪った男を、殺人マシーンのような男が
追いつめていくという話です。

そこに保安官役のトミーリージョーンズなどが絡んでくる。

かつて僕は映画レビューで、B級監督はエキストラを簡単にバンバンぶっ殺す、と書いた事があります。

この映画がそれにかかなり近くて、殺人マシーンのような男は、とにかく殺しまくる。
容赦なしに。

ところが、なぜか、これから殺そうとする相手に、いいがかりをつけて絡もうとする。

屁理屈をいい、自分の傲慢さに優越感を感じたあげく、そして最後には殺す。

理知的かと思える部分もあるのですが、ほとんど人間としての感情を持っていないような、そんな男です。

また、ヤバイ金を持って逃げまくる男の人物像についても、例えばベトナム帰りである、などという断片は作品中語られるものの、で、それでどうなの？ と問いかけたくなるような中途半端な掘り下げ方。

別にこの人物は、他の人でもよかったのではないか？と思えてしまうのです。

自分を狙っている男が徐々に迫ってくる。その恐怖。

この映画の見所は、まさにその恐怖、スリル、の表現手法にあります。

ここだけはほんとに分かりやすい。

ならば、映画をその部分でのみ作るというやり方もあったのではないか？とおもえてきます。

スティーブン・スピルバーグ監督の出世作「激突」がまさにそうです。

乗用車が悪魔のようなトラックにただ、ひたすら追いかける映画。

そこには訳もわからず、執拗に追いかける境遇に陥った男の不条理さがあります。

恐怖があります。

ただ、ひたすら集点をそこにしぼったスピルバーグ監督。

本作をみながらやたら「激突」を思い出していました。

さて、本作はどこにテーマを集約したのか？

それが僕の理解力と感性では、全くつかめませんでした。

時にはこういう映画もあるということですね。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ジョエル・コーエン、イーサン・コーエン

主演 トミー・リー・ジョーンズ、バビエル・バルデム

製作 2007年 アメリカ

上映時間 122分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=qhG81HNy67k>

ダーズリン急行

2008年4月14日鑑賞

ユル〜い急行があってもいいじゃないか

ちょっと癖のあるユーモアが漂う。

それでいて、後味のよさがとても印象的な映画だ。

ダーズリン”急行”なんて言っときながら、

ゆるく、ゆる〜くお話は進む。

そのゆるさは、もちろんアメリカのお話ではなく、ヨーロッパでもない。

ゆるさを追求するとインドに行き着いてしまうのである。

物語に登場する三兄弟。

それぞれおかしなキャラクターを持っていて、その性格はまるで共通点がない。

やたらと仕切りたがり、規律を作ろうとする長男。

弟役のエイドリアン・ブロディーの雰囲気はこれまたいいなあ〜。

「戦場のピアニスト」では、戦場の廃墟の中、極限で生きる、ひとりのピアニストをシリアスに演じて世界中の絶賛を浴びた人だけど、この人、こんなとぼけた役も引き受けちゃう訳ね。

そういう役者としてのスタンスがとても気持ちいい。

もうひとりの弟は、歩く生殖器！！のような人物。

この三兄弟、それぞれに思惑があり、当初は全く相容れない感じ。

この三人がともにインドを旅する。

彼らはインドで何を感じ何を得たのか？

結局彼らは、今までのこだわりや執着を、この旅で「捨てる」という行為に行き着く。

こういった内容の作品を作ってみようとする監督。

そこにしなやかな感性と静かな熱意を感じる。

とてもユニークな作品だ。

好感が持てる。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ウェス・アンダーソン

主演 オーソン・ウィルソン、エイドリアン・ブロディ

製作 2007年 アメリカ

上映時間 91分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=CbhRlzqjcSc>

大いなる陰謀

2008年4月22日鑑賞

アメリカの魂はどこへいくのか?

Yahoo映画レビューではかなりの低評価。
どうしてこんなに評価が低いんだろう？
僕としてはとても好きなタイプの映画だ。
一言で言えば気骨のある映画とでも言おうか
アメリカ映画の良心と言うべきものが、まだ残っている気がするのだ。
ロバートレッドフォード監督の手腕は確かなものがある。
複雑に入り組んだ3つのストーリーが展開していき、ラストシーンでは、淡々と問題提起がなされる。
あなたはどうか判断するのか？と。
これはあなたの判断を促す映画だ。
また、一アメリカ市民ならば、どういう態度を取るのか？ という選択を、迫っている映画でもある。
若い二人の兵士が登場する。
この役者さんの事は何も知らない。
だけど、ロバート・レッドフォード監督は、この二人に重要な役廻をあたえている。
その辺りも好感が持てるんだよね。
監督自身も、この二人の兵士が学生だったときの担当教師役で出演している。
二人の学生はメキシコ系と黒人の学生である。
はっきり言ってアメリカ社会では本流ではなく、いわゆるマイノリティーである。
しかし彼らには将来性を感じる才能があった。
彼ら二人の才能を開花させよう、背中を押してやろうとする教師。
だが、二人の選んだ選択は、兵士だった。
それも二人の固い信念で。
その二人を巻き込んでいくのが、次期大統領候補と目される、やり手議員が立案した作戦だった。
議員はマスコミ対策も当然考える。
そこで登場するのが、ベテラン記者役のメリル・ストリープである。
やり手議員役のトム・クルーズとメリル・ストリープの絡みは、
はっきり言ってウザッタイ。
これでは討論番組みたいだ。
全く映画表現としては成立しない感じである。
いかに最小限のセリフで、かつ、映像で理解できるストーリーを作るのか？
その事に監督は思いを馳せるべきではなかったか？

それが、いかにも残念。

ただ、メリル・ストリープの、セリフなし、表情だけの演技は見逃せない。

若い才能を無駄に死なせてしまうアメリカ社会に、一体どんな未来があるというのだろう。

若い二人の若者は、アメリカ人として誇り高く生きようと志す人達の代弁者に見えた。

彼らはマイノリティーであるがゆえに、より強くアメリカ人でありたいと願った。

その志は、今の若いワスパ（WASP、ホワイト・アングロサクソン・プロテスタントの略）はどう受け止めるのだろうか？

まぎれもないアメリカ人の主流として。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ロバート・レッドフォード

主演 トム・クルーズ、メリル・ストリープ

製作 2007年 アメリカ

上映時間 92分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=jvuYE4Lg5jc>

2008年5月12日鑑賞

あどけない天使の残酷な証言

ジョー・ライト監督の前作「プライドと偏見」があまりにも衝撃的に素晴らしい作品だったので、今回もかなりの期待を持って観に行きました。

確かに光と陰の使い方や、時間軸をずらしたりする編集技術の見事さはあります。

ただ、一番大事な物語の核と言える部分、キモの部分の掘り下げ方、描き方がいまいち、僕には伝わってきませんでした。

女の子はあまりにも夢見がちで、小説ばかり書いている文学少女。

彼女は夢の中で生活をしていると言ってもいいのかもしれませんが。

そんな彼女が見てしまった、姉と、下流階級の青年との密会.....

多感な少女が、それに罪の意識を抱いたとしても、不思議はありません。

ただ、それを告発するまでに至る過程がすべて吹っ飛ばされているのです。

彼女が勇気を出して証言するためには、ある程度の覚悟は必要でしょう。

その後の姉と、青年の身の上に降り掛かる非難や中傷も、この年頃なら予想できるでしょう。

ならば、ある程度迷い、自分で問題を抱え込み、悩み苦しむでしょう。

そう言った描写がほとんどないのです。

彼女の純粹で天使のような残酷な一言が、その後の二人の運命を、悲劇の中に引きずり込んでしまう。

やがて年老いた少女は、一冊の書物を書きます。

この場面でも、わざわざドキュメンタリータッチで演出をしなくても、他にやり方は合ったのではないのか？ という気がしてきます。

いずれにしてもあまりにも残念な作品と言えます。

ただ、今後もこの監督には注目していきたい、と思わせる何かがある人です。

それは今の映画界にあって、数少ない、真に、

”映像で感情描写に挑んでいる”人であり、それに真摯な態度で挑んでいる監督だからなのです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ジョー・ライト
主演 キーラ・ナイトレイ、ジェームズ・マカヴォイ
製作 2007年 アメリカ
上映時間 123分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=cHYRpcXJj9Y>

ゼア・ウィル・ビー・ブラッド

2008年5月29日鑑賞

オイルとマネーに神の祝福を

主人公は大変な努力家である。

石油採掘のノウハウを、我が身で体験したものが持つ、力強さがある。

また、野心と欲望の固まりでもある。

映画を観ながら、僕はなぜか名作「道」をおもいだしていた。

「道」では人間の欲望の固まりのような男、ザンパノが、天使のような知恵おくれの女性、ジェルソミーナを喪うことによって、

自分の罪深さを、生まれて初めて感じるところで映画が終わる。

ところが本作には、そのようなキリスト教的道徳感がまるでない。

センチメンタリズムとか、ヒューマニズムとか言う、人間としての潤滑油がないように思える。

絶えず頭の中には、ひと山当ててやろう、という欲望しかない。

欲望と野望の歯車が組合わさり、油もささずにギシギシと音を立てているのだ。

そんな人間が油を掘っているのだから何とも皮肉である。

彼は神を信じていないようだ。彼が絶対的に信じているのは、油堀りとしての自分の才能とマネーだけだ。

しかし彼は単純な欲望の固まりとして描かれてはいない。

その自分の内なる欲望の声に、彼は素直にしたがっているように見えるのだ。

その面において彼は実に従順なのである。だから彼は姑息には見えない。むしろ従順な羊飼いに見える部分さえある。

自分の内なる欲望の声こそ「神の声」なのであろう。

やがて成功した彼は、人間性など、実は何の役にも立たないと、悟ったのだろうか？

僕には彼が人間である事をやめてしまったような衝撃的なラストシーンだった。

作品そのものの作り方は、とても骨太であり、映画らしい表現に満ちている。

作品の冒頭20分程度、全くセリフなしでストーリーが進んでいく様は圧巻である。

また、以外と言っては失礼だが、音楽がいいのだ。

これは好き嫌いが真っ二つに分れるだろう。

不協和音を多用したストリングスの効果が大変いいと思った。

作品全体を通しての緊張感がラストまで途切れない。

寸分の隙もなく作られた、見応えのある秀作である事は間違いない。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ポール・トーマス・アンダーソン

主演 ダニエル・ディールイス、ポール・ダノ

製作 2007年 アメリカ

上映時間 158分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=f3THVbr4hIY>

最高の人生の見つけ方

2008年6月3日鑑賞

一生に値する一瞬のために

もう少しコッテリした味に仕上がっているかと思ったら、

これが以外に薄味でびっくりした。

何せ、モーガン・フリーマンと、ジャック・ニコルソン、堂々たるアカデミー俳優の2枚看板である。

演技ガチンコ勝負を期待して観に行くのは当然と言える。

余命わずかな2人のじいさまが好きな事をしてみよう、と

スカイダイビングを含めて、とてもアクティブな事にチャレンジしていく。

撮影はきっと楽しかっただろうなあ、と思う。

だけど、やはり作品としては物足りない面もある。

それはお互いの家族の問題を、あまり掘り下げていないからである。

家族といずれ別れるのだという、さみしさと恐怖が表現不足なのだ。

故に、観客は二人に感情移入しにくくなってしまっている。

この作品に消化不良を覚える部分だ。

二人のじい様のキャラクター設定は、地位も立場も全く違う。

その二人が病室という密室を通して、同じ病気を戦う戦友となる。二人の心が通じ合ってゆく、友情を育んで様はととてもいい。

これは脚本や監督の演出よりも、名優2人のキャリアに負うところが大きい。

このあたりが最大の見所である。

自分がこの1年体験した事、いや、自分がこの10年体験した事、それよりもっと質の高い一瞬を感じる事がある。

大げさに言えば、自分はこの瞬間のために10年待たされたのだ、そう思う価値ある「一瞬」

中には数十年待たされた人さえいるかもしれない。

そう、人生を肯定的に捉える事の出来る人なら、楽しめる映画だと思う。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ロブ・ライナー

主演 ジャック・ニコルソン、モーガン・フリーマン

製作 2007年 アメリカ

上映時間 97分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=4uew0NQ1YVg>

2008年9月29日鑑賞

これもアメリカの自己批判かも？

実は全く観る予定もなかった映画だったが、お目当ての「セックス・アンド・ザ・シティ」が、満員で観られない。しょうがなくこちらを観た。いわゆるVFXなどの視覚効果を見せるアクション映画というジャンル。

観客としては「まあ、こんな映像はもう見飽きてるしな」という感じなのだ。3次元の映像、ホログラムなどが出現しないともう無理だろうなと思う。その技術に偏りすぎたハリウッド映画界はアイデアを熱望している。だから最近では日本の漫画界から原作を取り寄せている有様だ。こういった、すでに誰もが分かりきっている状況の中での「ハンコック」である。しかも主人公はかつてのスーパーヒーローだと言う。

それって以前僕が観たアニメの「Mr・インクレディブル」ですでに扱った題材である。しかもあのアニメは実にひねりの利いたアニメであった。

あえて自己を目立たぬよう日常生活に埋没させようとする、一般社会でけなげに生き抜いていく、かつてのスーパーヒーロー達の姿だった。

その日常生活は、家庭生活や、会社での勤務状況など実にリアルで、笑いを誘いつつ、製作者達が意図せぬ、切なささえ感じさせるヒーロー達に仕上がっていた。

ところが本作の主人公、ハンコックは酒浸りで素行がよろしくない。しかも、超人という設定なので、力を持て余している。自分の能力のコントロールが自分で出来ない事がある。やり過ぎで一般市民からは、ブーイングを受ける有様。

これってまるでイラク戦争に介入したアメリカの姿、ブッシュ政権そのものではないか！！

核保有国であり、国連本部があり、超大国であり、そのくせ経済ボロボロのアメリカ。

そう思うと、アメリカもハンコックに見習った方がいい。力は見せつけるものではない、もう少し謙虚になって他の国からも「グッジョブ！！」と言われる国に生まれ変わらなければいけない。「ハンコック」もいろいろな反省のもとに製作されたアクション映画だろうと思う。

ストーリーの中で墮落したハンコックが更生していく有様は、ある意味、かつての栄光も、自信も失い、経済すらも世界に対して迷惑をかけまくっているアメリカへの強烈な皮肉にもみえる。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

監督 ピーター・バーグ
主演 ウィル・スミス、シャーリーズ・セロン
製作 2008年 アメリカ
上映時間 92分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=eoDtvhQRxaI>

宮廷画家ゴヤは見た

2008年10月22日鑑賞

毒さえも魅力的な悪役

スペイン王室のお抱え画家であったゴヤ。

いわゆるパトロンのために肖像画などを描いた訳です。

その人が否応無しに時代の波にもまれていく。

ナポレオンの侵略により王家は失脚。

一時はフランスの傀儡政権となってしまうスペイン。

さらに今度はイギリス軍に攻め込まれていく。

国の歴史が大きく動いたとき、一番被害を被るのは最も弱い民衆達です。

ゴヤは彼ら民衆を描くようになります。

画家の使命として、自分の的確な描写力は、時代を写し取る事が出来るのだ、と気がつきます。

このような動乱の時代背景を描かねばならないため、どうしても

やや、ストーリーを追いかけているなあ、という感じを持ちます。

それを人間ドラマとしてじっくり見せてくれるのが、ハビエル・バルデム演じるロレンソという人物。

教会の実力者として異端審問を復活させたり、神父でありながら囚人とのスキャンダルで失脚すると、さっと、姿をくらましたり、と変幻自在。

やがてフランス軍の進出とともに、今度はフランス側での実力者として復活。再び尊大な態度を取っていきます。

このような複雑な人物像をよく演じられるものですね。

「ノーカントリー」で見せた、不気味な暗殺者役。

ここまで毒を含む悪役を演じられる役者は早々いないでしょう。

この映画は、ある程度歴史に詳しい人であればより楽しめるでしょう。

ただ、異端審問であるとか、スペインの歴史を、特に知らなくても充分楽しめます。

それは、ハビエル・バルデムと言う、実に魅力的な悪役が登場しているからです。

ゴヤの視点で描くのか？ ロレンソの視点で描くのか？

それとも、異端審問で検挙された弱い民衆の視点で描くのか？

あまりにも選択肢の多い、巨大な時代のうねりが舞台背景ですので、このあたりの絞り込みがやや甘いかな？と感じるのが残念なところ。

もちろん壮大な時代絵巻として鑑賞する事も出来る注目作と言えます。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ミロス・フォアマン

主演 バビエル・バルデム、ナタリー・ポートマン

製作 2006年 アメリカ／スペイン

上映時間 114分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=aMapeqYGBNQ>

わが教え子、ヒトラー

2008年10月26日鑑賞

コメディーが解け合わないもどかしさ

実はこの作品、ヒトラーを笑い飛ばそうという、紛れもない「コメディ映画」なのである。実際にヒトラー生存時に、その存在自体を笑い飛ばした勇気ある映画は、あのチャップリンの「独裁者」だ。

製作当時、アメリカにもヒトラー崇拜者、ナチ党支持者は多く存在したのである。

チャップリンは命の危険も顧みず、興行的な成功も考えていなかったようだ。

本作はどうであろうか？

もちろん現在でもネオナチなどの連中は存在する。

しかし、ヒトラー、ナチズム批判の映画を今作っても、命の危険は感じない。

興行的にはどうであろう。

生真面目な戦争映画を作ってきたドイツ映画界。

今でも圧倒的なリアリティで迫ってくる「Uボート」

近年では「ヒトラー最後の12日間」「ドレスデン最後の日」「ヒトラーの贖札」などの秀作が思い浮かぶ。

観客としては当然ドイツ映画の生真面目さや、リアリティーや、ある程度、歴史の重みを感じたいと期待して観に行くわけである。

ドイツ映画はそれに応じてきた。そして興行成績を上げてきた。

しかし、本作だけは全く毛色の違う、トンデモ映画に仕上がってしまった。

ただし、予告編や、宣伝ポスターでは、これがコメディ要素を含む映画である事はさっぱり分からない。

この辺は明らかに興行的な配慮だと感じられる。

あくまでまじめな戦争映画で「力作である」と感じさせようという配給側の意図が見え見えだ。

観客としては映画本編を見始めると、とたんに違和感を感じる。

なんか、調子狂っちゃう、はっきり言って「嘘っぽい」という感じなのだ。

ヒトラーはやや似ている役者さんが演じているが、ヒトラーお気に入りの側近である、シュペーアなどは、全く似ていない。

演出面にしても、不必要なハイルヒトラーという敬礼の連発で、笑わせようとする場面がある。

これは、「独裁者」ですでにチャップリンが皮肉った題材だ。

どう理解していいのだろうか？ 何を意図して作ったのだろうか？

僕にはあまり理解できない。

生真面目さを表面に出し、装ったのは、あまりにも興行面を意識したせいではなかろうか？

どうせヒトラーを笑い飛ばす映画なら、ど派手に、アナーキーに、無礼千万にやって欲しかった。

たとえば「空飛ぶモンティ・パイソン」みたいな。あるいはアメリカンヒーローをおちょくり倒

した、アホバカ人形劇「チーム★アメリカ/ワールドポリス」のように。
ドイツだってこんなアホバカ映画作るんだぜ、みたいな意気込みと痛快さが欲しかった。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ダニー・レヴィー

主演 ウルリッヒ・ミューエ、ヘルゲ・シュナイダー

製作 2007年 ドイツ

上映時間 95分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=9NFcBw1EoFE>

私がクマにキレた理由(わけ)

2008年10月29日鑑賞

スカーレットの普通の女の子

勝手な想像で申し訳ない。

子守りになった主人公が、最初から熊のぬいぐるみに監視されるものだとばかり思っていました。

実は物語のかなり終盤になってから、この監視は始まんですね。

主人公の名前はアニー。

子守りは「ナニー」と呼ばれる、とは知らなかった。

何せ高校生のおときは英語なんて赤点だらけだったから。

アニーは僕と違って結構成績優秀。ただし、人類学専攻。

これじゃ、稼げそうもないね。案の定、就職活動に失敗。先が思いやられる。

で、始めたアルバイトが、いわゆるセレブなご家庭のナニー（子守り）

出来ればこの子供を、もっと癖のある悪ガキにキャストイングする手もあったかもね。

初期トラブルをさっさと済ますと、あっけなく二人は仲良くなっています。

セレブの演出面が、ちょっといまいちかなあ〜。

「プラダを着た悪魔」だとか、ウディ・アレンの「世界中がアイラブユー」なんかは、とてもセレブな感じがします。

スカーレット・ヨハンソンはウディ・アレンの「マッチポイント」にも出演してるから、その上流階級の演出の違いなんかも見比べると面白いかも。

ストーリーの方はもう読めてるといってごとき、このセレブ一家は家庭内離婚状態。そこに放り込まれた、アニー（スカーレット・ヨハンソン）の奮闘ぶりがドタバタ劇のように進んでいきます。

この映画の最大の魅力は、スカーレット・ヨハンソンが、大卒女子の、ごく普通の女の子を演じていること。親近感わきますよ。

どうせナニーとアニーの違いなら、熊のぬいぐるみじゃなくて、

セサミストリートのアニーとバートに見張らせたらもっと笑えたかもね。

あっ、それじゃ「私がクマにキレた理由」というしゃれたタイトルが使えないか？

エンディングにも、もうひと捻りあってもよかったかも。

たとえば彼氏とめでたくゴールインしたアニー。

その10年後の姿でエンディングにするとかね。

もちろん二人は子持ちで離婚調停中ということで.....

その子供が持っているぬいぐるみがアニーとバートということでいかがでしょう？

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 シャリ・スプリンガー・バーマン、
ロバート・ブルチャーニ

主演 スカーレット・ヨハンソン、ローラ・リニー

製作 2007年 アメリカ

上映時間 108分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=0pyj6wh6Dw0>

落下の王国

2008年10月30日鑑賞

映像の世界旅行へようこそ

ターセム監督作品は始めて見ました。

映像がすごいとの前評判でしたが、ポスターを観ただけで、これはどうしても観ておきたいと思ったのです。

本編の映像にも大満足の作品でした。

この作品は世界規模のあらゆる場所でロケーションが行われている事も注目です。

ただし、珍しい風景を撮っただけで作品になる訳ではなく、そこは当然、監督がどのようなアイデアに基づいて映画の画面として切り取ったか？という事が大事なのです。

例えばオープニングには、意外にもモノクロ画面が現れますし、

砂漠での撮影では、様々に工夫された構図で風景を切り取っています。

映像センスの固まりと言っていい作品に仕上がってます。

もう一つすばらしいのは、少女のキャラ設定。

この子、前歯がありません。多分虫歯でしょうね。

ルックスもちょっと個性的。ぶすつとした無愛想な顔の雰囲気もとてもいい。

映画のストーリーが進んでいく中で徐々にこの少女自身が持つ純粹無垢な部分が滲み出てくるんです。

相手役の青年が語るファンタジーのなかに、やがて少女自身も入り込んでしまうのですが、処理の仕方がとても自然で違和感がないのです。

衣装デザインも注目です。

線の美しさ、デザイン性に溢れた衣装をまとった大勢の人たちが登場するシーンでは、ハッと息をのむ美しさです。

主要なキャラクターたちの場面では、斬新で、ややこってり系の、衣装。

このあたりの使い分けもうまいです。映像作品になったとき

群れのためのデザイン、個のデザインを使い分けているのです。

ストーリー的にはやや、食い足りない感じは受けますが

その分、極めて贅沢な映像を存分に楽しめる作品ではないでしょうか。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ターセム

主演 リー・ベイス、カティンカ・ウンタール

製作 2008年 インド／イギリス／アメリカ

上映時間 118分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=53ldeMxih9k>

その土曜日、7時58分

2008年11月12日鑑賞

本当のドラマは映画が終わった後？かもね

脚本がいまいちの出来だったような気がする。

フィリップ・シーモア・ホフマンの演技でなんとか画面に緊張感を持たされているものの、これでは、テレビで毎週やっているサスペンスドラマと大して変わらない。

わざわざ映画館まで足を運ぶ価値があるだろうか？と疑問に思う。

ストーリーは、兄弟が計画した宝石店強盗事件によって、兄弟とその家族が崩壊していくというものである。

実はこの宝石店強盗、失敗してしまう。

見所は、失敗した後の処理で、兄弟がどんどん悪い方向へ転がり込んでいく様子。その転落の有様だ。

ある程度社会的な地位も築いていたはずの兄。

その身が破滅していく様子は、技巧派フィリップ・シーモア・ホフマンが見事に演じている。

弟は「もうだめだ」と、それこそ映画のスクリーンから逃げ出すように、どこかに消えていくし、犯罪に気がついた父親は、この兄弟を追いかける。

実は、この父母と彼ら兄弟が、どのような関係性であったのか？あまり語られていないのだ。

息子が犯罪を犯した、という事に関して、父親は当然、後悔や兄弟への憎しみ、親としての自分のあり方は正しかったのだろうか？という反省も合っていると思う。

しかし、それらはほとんど表現されていない。

このあたり、もっと詳しく描き込めば更に深い人間ドラマになっただろうに。

最後は兄が精神的に暴発してしまっただけで終わり、という何とも味気ない終わり方だ。

なお、それぞれの登場人物の立場から時間軸が組まれ、編集されている。そのため、時間軸は行きつ戻りつという形態を取る。

一つの場面を兄から見た映像、弟から見た映像、被害者から見た映像などの多面的な時間軸を取るのだ。

実はこの手法、日本の内田けんじ監督が「運命じゃない人」で、大成功した手法なのだ。

以前僕は彼を「映画にキュビズムを持ち込んだ映画界のピカソである」と書いた事がある。

本作は内田けんじ監督の手法ほど、うまく処理できていない印象である。

あの、逃げてしまった弟はその後どうなるのだろうか？

常軌を逸したような父親の行動はこのあとどうなるのか？

実は、面白いストーリーは、この作品が終わった後に待っているような気がする。

でも、続編が作られても見る気になるかは疑問だなあ～。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 シドニー・ルメット

主演 フィリップ・シーモア・ホフマン、イーサン・ホーク

製作 2007年 アメリカ／イギリス

上映時間 117分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=nPr2Aychrx8>

モンテーニュ通りのカフェ

2008年12月5日鑑賞

フランス式人生はやっぱり深いのです

予告編がとても魅力的だったので観に行ったのだが
まさかここまで難解でよくわからない映画だとは思わなかった。

ピアニストがインタビューされるシーン

「就きたくない職業は？」

「ホロヴィッツ」

僕はこれで笑ってしまったが、99%の人は何の意味か分からない。

難解というコトバは不適當かもしれない。

つまり、フランス人の生活パターンとか、人生哲学とか、
フランスの歴史だとか、それに現地での慣用句であるとか、
あるいはクラシック音楽、アートの素養。

そんなものがすべて予備知識として必要になってくる映画なのだ。

これは手に負えないと思った。

大ヒットした「アメリ」のように”クリームブリュレを割る”ような楽しさはない。

それこそ会話の内容が何の暗喩なのか、と言う事がさっぱり分からない。

それだけフランスで生きていくためには、それなりの哲学に近い、処世術が必要なのだろうし、
一人一人の生きた人間の血液の中に、フランスの歴史がDNAとして入っているみたいなのだ。
重苦しくはないけれど、やはりヨーロッパの文化や歴史と言うプラットホームの上で、いやでも
生きていかねばならない、と言う事も了解できた。

この映画で描かれるのは芸術家達が集まる、こじんまりしたカフェでの日常生活である。

ならばフランス版「かもめ食堂」なのかというと、それほどおいしいような料理も出てこないし、
決してハッピーでもない。

むしろ日常の倦怠感や芸術家達の葛藤や、ビジネスとしての舞台俳優の裏側などが描かれる。

それぞれの登場人物はそれぞれに悩みを抱え、重荷を背負って生きている。

映画の最後で登場人物達はその背負ってきた「こだわり」を投げ出し、解放される。

ようやく映画としての快感がここで得られる構成となっている。

このあたり後味がよく、救われた気分になる映画である。

.....以下余談

ちなみにホロヴィッツはユダヤ系の歴史的に著名なピアニストである。

1989年没。

彼のドキュメンタリー番組を見た事がある。

コンサートホールの控え室で、付き添いの若者に上着を預けるとき、

「気を付けておいてね。服のポケットにはお金が入っているのね」と微笑んで言ったのが、いかにもユダヤ系らしく、微笑ましかったのを覚えている。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ダニエル・トンプソン

主演 セシル・ドゥ・フランス、ヴァレリー・ルメルシュ

製作 2006年

上映時間 106分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=hAF5RGL-VeA>

2008年12月6日鑑賞

愛という名のプレゼントが待っている

(DVDにて鑑賞)

ロベルト・ベニーニ監督の作品を一度でも観た事がある人は、
きっとあの超ポジティブで、楽天的なその姿勢に唖然とする。
そして彼の世界観にいつの間にか引き込まれてしまう。
それは彼がイタリアという魅力的な国で仕事をしているからかもしれない。
とにかくイタリアである。
男に産まれたからには女を追いかけなければいけない。
うまいものを食べて、ワインを傾け、愛を語らなければならない。人生を謳歌しなければならない。
イタリア人に産まれなかった事を悔しいと思う。
特にこの映画を観てからは.....。

本作は第二次大戦の前後を生き、ユダヤ系イタリア人一家族の物語である。
主人公は一目惚れした上流階級の女性をひたすら追い求め、
何度もわざとらしい偶然を作って会おうとする。
一歩間違えば、単なるストーカーと思われる一面も見せるのだが、それはイタリアに産まれた男の宿命なのかもしれない。
そのうち彼女の方もその気になってくる。
彼女には、別に婚約者がいた。
しかし、脱走するように二人は駆け落ちする。
やがて二人にはかわいらしい男の子が生まれた。
このあたりの時間移動の見せ方が実に鮮やか。
ベニーニ監督の手腕が冴える。
さて後半部分、この作品は趣をがらりと変える。
ユダヤ系であったために家族は強制収容所送りとなる。
ここでの主人公とその息子との会話に注目だ。
大人の優しさとはこういうものなのか？
子供への愛情表現というのはこういう形もあるのだ！
父親は息子にあえて嘘を使うのである。
「これはゲームなんだよ。自分が生きる環境、そのものがゲームなんだ。」
と子供に言い聞かせる。
「ゲームでトップになれば、すてきなプレゼントが待っているんだよ！！」

強制収容所という場所、汚い縦縞の囚人服を着た父親。

毎日、殺されるか？というぐらいの過酷な強制労働。

粗末な食事。

ガス室送りになる順番を待っている状況。

この状況の中で、主人公はニコニコして息子に話すのである。

繰り返し、繰り返し、

「これはゲームなんだよ。今日はもう**点とれだぞ！！」

なんと勇気ある父親像だろう。

自分は重労働でフラフラになりながら、子供にだけは夢を与え続ける父親。

観客として観ているこちらがハッとさせられる。

自分が生きている人生そのものが舞台なのだと。

ヨーロッパ人、特にイタリア人やフランス人は人生を舞台、自分をその役者のひとり、という意識を持っていると言う。

ベニーニ監督はスクリーンの中で、子役にそのセリフをいいながら、実は観客に向かって喋っている事に気がつく。

「人生はゲームなんだ」

「どんなに苦しい時でもゲームに勝てば、すてきなプレゼントが待ってるさ！」

いつか人生が終わるとき、最後の審判を受けるとする。

きっとベニーニ監督なら神様に向かって

「人間ってこんなにいいところもあるんですよ、たまには地上に降りて私と映画ごっこをしませんか？」

などと、あの早口でまくしたてるに違いない。

ロベルト・ベニーニ監督の人間を見つめる姿勢、人生を生きてゆく姿勢に心打たれる。

衝撃と感動のラストシーンをあなたの眼に焼き付けてほしい。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

作品データ

監督 ロベルト・ベニーニ

主演 ロベルト・ベニーニ、ニコレッタ・ブラスキ

製作 1998年

上映時間 117分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=lh44dl5YHdo>

俺たちフィギュアスケーター

2008年12月8日鑑賞

華麗なる氷上のおバカグランプリ！！

(DVDにて鑑賞)

いいねえ～、タマにはこういうおバカ映画をガハハ！と笑いながら観てみるというのは。男同士がフィギュアスケートでペアを組むという発想自体が笑える。

どんな演技になるんだろう？

どんな映画になるんだろう？

という期待を裏切りませんよ、この映画は。

意外にも、と言ったら失礼になるが、オープニングのシーンが実にいい。

寒い冬の日、氷の上を子供達がスケートで遊んでいる。

傍らには修道院のシスター達の姿、彼女達も楽しそうにスケートをしている。

このオープニングシーンだけで、やがてフィギュアスケーターとなる子供の育った環境や、その天才的な才能や、大人達の愛情に恵まれた人だ、ということも分かる。しっとりとした情感が漂う、落ち着いた味わいを見せてくれる。

このオープニングシーンだけは、ぜひじっくり観ていただきたいと思う。

こういう映像が撮れる監督、カメラマンは、よく映画を知っているなあ、と思ったら、なんと監督はCM専門の人だったそうで、長編映画は初めてとのこと。

主人公のペアの二人は徹底的に対照的。

ひとはマッチョな男の中の男、精力と性欲の固まりという無粋な男。

もうひとは優雅で女性的な金髪のハンサムボーイ。

まずゲイ男性から100%お声がかかること間違いなし、という二人がペアを組むのだ。

確かにかなりお下劣な笑いもあるのだが、でも主役二人のフィギュアスケート部分は必見。相当なスケートの特訓をやったに違いない。

そして決して本当の競技会では観られない、くだらなくてバカバカしい演技、演出の数々を楽しめる。

カメラワークもとてもいいし、単なるCGでごまかそうという映像ではないことに好感を持った。

思っきり、役者が体を張った、久々に出会った痛快、おバカ、コメディ映画。お勧めです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ウィル・スペック、ジョシュ・ゴードン

主演 ウィル・フェレル、ジョン・ヘダー

製作 2007年 アメリカ

上映時間 93分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=bCg1HO4UbTA>

ヘアスプレー

2008年12月12日鑑賞

おデブでも”アイ ハブ ア ドリーム”

(DVDにて鑑賞)

とても上質のミュージカル映画だ。いろいろ噂のエグイ映画を作るジョン・ウォーターズ原案を”マニアックでない”一般人でも楽しめる作品にリメイクされている。

キャスティングがいいねえ。主人公の女の子はチビでおデブ。

明らかにダンス向きではない体型だ。

ところが踊らせるといいんだねえ。弾けてますよ。

その母親役に特殊メイクで女装したジョン・トラボルタ。

まさかダンス映画「サタデーナイトフィーバー」の主役が、やがてこんな巨漢のおばさん役をやるとは、当時誰が予想しただろう。

僕のような五十代には、映画の舞台となった1960年代の雰囲気だよみがえってきて何とも懐かしかった。

僕はまだその頃子供で何も分からなかったけれど、アメリカでは公民権運動が起こり、ケネディーが暗殺され、日本ではダッコちゃん人形が、大ブームだった。

ダッコちゃん人形は黒人をモデルにしていた。

音楽の世界でも黒人音楽がメジャーになりつつあった時だ。

やがて、71年には画期的なダンス番組「ソウルトレイン」がテレビ放送される。

当時、僕は兄貴達と夢中になってソウルトレインを見た。

そこでの主役は、なんといっても黒人達のかっこいいダンスだった。

黒人達にスポットライトがあたるまでにどんなにつらい時代があったことだろう。

それはジェイミー・フォックス主演の「Ray」を合わせて観るとよく理解できる。

主人公の彼女は、白人である。しかし、黒人達のステップはやっぱりかっこいいのだ！！

一緒に踊りたい彼女は、やがて笑顔とステップで時代を乗り越えていく。

ポジティブなアメリカンドリームの原型のひとつをそこに観ることが出来る。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 アダム・ジャックマン

主演 ジョント・ラヴォルタ、ニッキー・ブロンスキー

製作 2007年 アメリカ

上映時間 116分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=W_CFcRAumZc

2008年12月25日鑑賞

歌のうねり、生きる”うねり”

あのじいちゃん、ばあちゃん達にもう一度会いたい

そう思わせる映画だ。

コーラスグループのドキュメンタリー映画であるが、そのメンバーは、失礼ながら、もうそろそろお迎えが.....というような、高齢者ばかり。

しかし、その元気な事。ポジティブな事。

彼らに教えられる事、もうそれはいっぱいある。

というより、彼らを見るだけで生きている教科書みたいなものである。

彼らのそばには、死が常につきまとっている。

しかし唄う事によって自分がまだ、生きる事に、何らかの価値を見いだしているのだ。

そして彼らの歌を聴いた人はまさか！とだれもおもう。

曲目がびっくり。ロックにパンクまであるのだ。

皆、高齢のため、歌詞を覚えるのさえやはり大変な事だ。

でも、観客からもらう拍手は、やっぱり気持ちいいのだ。

これがステージの魔力という奴だ。

観客だって気持ちいい。

だから彼らの奇跡の歌声をわざわざ聴きにいく。

そこには歌を楽しむという事だけではなく、何か人生の奇跡を目の前で体験してしまうような驚きと、ある種のショックを受けるのだ。

「なんでこんな、じいさん、ばあさん達からこんなパワーが出てくるのだ？」と。

やがてそれは感動ではなく、観客の生身の細胞まで揺り動かす。

そして賞賛の拍手はうねりとなる。

彼らの生きる魂、そして生きる”うねり”を感じる映画だ。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 スティーヴン・ウォーカー

主演 ヤング@ハート

製作 2007年 イギリス

上映時間 108分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=eFACG-TEvcA>

ラースと、その彼女

2009年1月13日鑑賞

もしも、こんな村があったなら

僕はこの物語になじめない部分があった。

もしも、こんな村があったなら、世の中から、あらゆる争いや誤解はもうとっくの昔になくなって
いるだろう。

人間や、世間は、そう簡単ではない。

もっと複雑で、ドロドロなんじゃないか？

そう思ったのだ。

主人公ラースは受け答えも正常であり、日常生活や会社での仕事も普通にこなしている。

ただ、彼の恋人がリアルドールであるという1点を除ては。

ラースの兄夫婦は、ラースがリアルドールを「ぼくの彼女だ」と笑顔で紹介したとき、弟のあま
りの突飛な行動に動揺し混乱する。

”弟がイカれちゃった”と嘆く。

それは表面的な表現にとどまっている感じがして残念だ。

彼に対して憎悪や嫌悪感、そして攻撃があって当然だろう。

更にもっとひどいのは無関心、関わりを持たないという事である。

しかし村の人は彼に関わっていこうとする。

そして村人全体が、ピアンカと名付けられたリアルドールを

ある意味認め、一緒に生活していく事で、村人たちが精神的な成長をしていく。

物語はそんな風に進んでいく。

これはしかし、綺麗事すぎるのではないだろうか？

そんな風に感じたのだ。

映画に出てくる村人はみんな、彼に親切だ。

それは彼を、すでに「あちらのセカイ」へ行ってしまった、という、あきらめと哀れみを伴った
親切である。

人は宗教でも偶像崇拜をする。

イエスキリストの彫像をまえに祈り、仏像に手を合わせる。

しかしそれは日常の習慣に近いものだ。

ラースは、偶像に恋をしている。

やがてラースも偶像である「ピアンカ」との別れをするのだが、

それは心理的な「通過儀礼」と呼ぶ種類のものだ。

人は思春期に親に反抗する。それはまさに親離れの通過儀礼だ。

例えば親が物わかりが良すぎると、逆に、いつまでたっても子供は親離れできないとも言われる
。

僕は個人的な体験で神経症を患った時に、カウンセラーの指導のもと、箱庭療法をやった事がある。

いい年をした大人が、箱庭で砂遊びをやるのだ。

砂を山にもりあげたり，人形を置いたり，家の模型を置いたりして、自分の心の中のある心象風景を投影させる訳である。

これは心理学のユング派の遊戯療法の一つで、実は僕はとても気に入っている。

全く抵抗感なくその世界に入っていたから不思議である。

しかし、僕の友人たちはこの行為に大いに違和感を持ったらしい。後に僕は友人たちと一切の交際を避けるようになった。

ラスも村のドクターに診察を受ける。

田舎のドクターはメンタルヘルスも受け持つ。

彼は一体どのような幼少期を過ごしたのか？

そこでの心の傷はどのようなものだったのか？

それはこの映画ではほとんど語られる事がない。

それゆえラスの持つ心の痛みは観客と共有されない。

映画として説明的すぎるのはよくない。

しかし必要最小限の説明をしていないのはもっとよくない。

何がなんだか分けの分からない映画になってしまうのだ。

心の暖かな村人達と住むラスのシアワセと成長を描いた、

と言えば人は感動する、とでも言うのだろうか？

僕のようなひねくれ者には、とてもそのような余裕はなかった。

それは僕自身が今、うつ病との戦いの真っ最中であるからであり、兄弟からも理解されず、社会的にも孤立し、無能力者として蔑まれ、それでも社会の中で戦っていかねばならない宿命を背負ったからだ。

僕だけではなく、誰もが本作のような村に住みたいと思うだろう。

それは現実のセカイがあまりに無慈悲で、救いがない事の裏返しだからではないだろうか？

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 クレイグ・ギレスビー

主演 ライアン・ゴズリング、エミリー・モーティマー

製作 2007年 アメリカ

上映時間 106分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=naMEvDbPazA>

ザ・ローリング・ストーンズ シャイン・ア・ライト

2009年1月17日鑑賞

転がされるのか、転がすのか？

ローリング・ストーンズとマーティン・スコセッシ監督の組み合わせ。

もう、それだけで、これは見る価値ありと判断してしまう。

ストーンズの舞台を、過去のインタビュー映像や、舞台裏を交えて構成したドキュメンタリー映画である。

ロックはもともと不良がやる音楽というイメージがあったし、実際ストーンズもかなりダーティな事をやってきているバンドである。

こんな巨大な伝説を持つバンドで、なおかつスキャンダラスなバンドは、その舞台裏も相当アナーキーな状態なんじゃないかと想像したのだが.....。

意外だったのはミック・ジャガーが、アーティストというより、ビジネスマンに近い感覚の人であったこと。

とても観客の受けを気にするひとなのだ。

演奏する曲や、曲の順序、そして舞台装置の打ち合わせなど、裏方仕事である、舞台の構成演出を彼はとても丹念にこなしていく。

観客を楽しませる演出に、実に真摯な態度で向き合うのだ。

やはりロックもショービジネスなのだ、と当たり前な事を今更ながら認識させられた。

彼らはすでに名士となった。

ミックに至っては英国王室から「ナイト」の称号まで得ている。

ステージが始まる前には、どっかの国の元大統領夫妻や、各界の著名人達からの挨拶攻めに合ったりする。

ここまでは、メンバーそれぞれ実に紳士的だ。大人なのである。

最も皆、還暦をすぎているオジサン達なのだから、あたりまえかもしれないが.....

ところが、いざステージが始まると、いきなり「永遠の悪ガキ」に変貌する。

とても60代とは思えない、シャープで切れのいいミックの体の動き。

そして楽曲自体がとてもパワフル。

特に「シャンパン&リーファー」はこのドキュメントの圧巻と言えるだろう。

ゲスト出演のバディ・ガイが、ギター&ボーカルですばらしい演奏を見せ、こちらの心を揺さぶってくる。

ロックという音楽が単なるビジネスの一手段だとしても、たとえ政治的な力学で意図的に転がされていようと、いったんステージが始まってしまうと、それこそストーンズはストーンズなのだ。

音楽は彼らのやり方で、彼ら自身が転がしていくのだ。

ギターのキース・リチャーズのコトバ

「音楽をやっている時は何も考えてないんだ」

陳腐な表現しか思い浮かばないが「全身全霊」「一心不乱」に音楽に取り組む。
それが彼らのステージでの姿である。

ストーンズはアルバムアーティスト指向ではない。

ストーンズはあくまでもライブでのパフォーマンスを見せてこそ
ストーンズであり、転がり続ける巨石であり続けるのだ。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

作品データ

監督 マーティン・スコセッシ

主演 ザ・ローリング・ストーンズ

製作 2008年 アメリカ

上映時間 122分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=zCHtlYLzGZQ>

2009年1月18日鑑賞

気持ちを楽しんで、すぐ終わるから

(DVDにて鑑賞)

「気持ちを楽しんで、すぐ終わるから」

そう言って働き者の母親は、望まれなかった命の処分を闇で行ってきたのです。もう、何十年とやってきた、いつもの手順。

まるで隣の畑から野菜を穫ってくるみたいな自然さ。

事務的に作業を進める、母親（イメルダ・スタウトン）の表情をよく見てほしい。

女性同士、

「アンタもつらい目に遭ったんだね」

「だいじょうぶだよ、あたしにまかせなさい」

表情だけでそう語るこの女性。

物悲しい、人間というものの罪深さといったものが、じ~んと

心に染み渡ってきます。

興行成績なんて考えていたらこの作品は作れないでしょう。

この作品に対していろんな意見があると思います。

なんでこんな終わり方なんだ、とか、結局、単なる犯罪者の物語じゃないか、とか。

ストーリーとして訴えかける部分が、舌足らずで終わっているのではないか？とか。

僕は違う側面からこの映画を観てみたいと思います。

映画としての表現が素晴らしいのです。

主役のイメルダ・スタウトンの演技。

あまりのすばらしさに見ほれてしまうのです。

もう、神懸かり的な演技なのです。

イギリスの労働者階級である中年女性。

美人でもなく、ただ家族を守るために黙々と働いてきた女性を演じています。

子供が二人います。

息子は洋服店で立派な仕事ぶりを発揮するまでに成長しました。

娘は器量がいまいち。

自分でも気にしているのか、とても内気で、ボーイフレンドもなかなか作れない。

でも心根の優しい女性に育ちました。

そんな彼女にとっても誠実な男性が現れます。

家族一同大喜び。なんとと言うハッピーな映画なのでしょう。

雪の降るホワイトクリスマス。

家族一同が、娘のボーイフレンドとともに、ささやかな夕食の席に着いています。

何と幸せそうなホームドラマなのでしょう。

ただ、窓の下に警察の車が到着するまでは……。

母親は逮捕され、家族は動揺します。

しかし、父親はあくまでも自分の妻を、家族を守ろうとします。

この父親の描き方がすばらしく、いいですね。

妻は罪を犯している犯罪者です。これはもう疑いようのない事実でした。

その罪も含めて、この夫である父親は、犯罪者の夫である事を引き受けるのです。

ただし、そんなセリフはどこにもありません。

どこにもありませんが、彼の表情がすべてを物語るのです。

彼の妻への愛情、そして家族への愛情。

こんな微妙な役者の表情をカメラは捉えています。

映画にとって脚本とキャスティングは、車の両輪と言えます。

脚本もいいのですが、なんと言っても、キャスティングがすばらしい。

父親役、内気な娘役、そのボーイフレンド役。

また、母親を逮捕する警部役の、とても紳士的で押さえた演技が、最高にいい。

このような緻密なキャスティングと、隙のない脚本がめざしたもの。

この作品は舞台演劇の雰囲気がありますが、決して演劇では表現できないものを目指していると思います。

それは役者の微妙な表情です。

カメラのフィルムに人物像の微妙な心の揺れ動きを焼き付ける事。

ただ、その一点に凝縮することに成功した、希有な作品と言えるのです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

作品データ

監督 マイク・リー

主演 イメルダ・スタウトン、フィル・デイヴィス

製作 2004年 イギリス／フランス／ニュージーランド

上映時間 125分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=_5L3hGxHumY

ある子供

2009年1月20日鑑賞

泣きながら大人は産まれてくる

(DVD)にて鑑賞

蒼井優がこの作品が好き、と言っていたので、試しにDVDで鑑賞。

映画を鑑賞するには、動機が不純だ。

この作品中に出てくる若いカップルはもっと不純な関係。

若い女はただ、男を愛している、という理由だけで子供を出産する。

男は毎日その日暮らして職業はない。

時々中古品のブローカーをやったり、場合によっては盗みもやる。

子供が出来てしまったのはしょうがない。

元より愛情などない。

自分にとってはただの商売用の「ブツ」にしか見えない。

だから、子供も売り飛ばす。

彼女にその事がバレてしまい、二人はいったん別れてしまうのだが.....。

この作品、何の予備知識もなく観たので、新人監督さんの習作かな、とぼんやりみていた。

ぼんやりながらも、かつてのヌーベルバーグの代表作「勝手にしやがれ」とか、イタリア映画の名作「道」なんかをおもいだす。

若いカップルの映画としては日本のマイナーな作品で「ある朝スープは」と、トーンが近い感じがした。

きっと映画を作っている人達が観ると、面白いと思うのだろうなあ、と感じた。

作り手側が「これは面白い映画の作り方だ」と喜ぶのは、観る側にとって退屈きわまりないものになる恐れもある。

本作はそのきわどい、ぎりぎりのラインで踏みとどまっている。

ワンカットワンシーン、手持ちカメラ1台のみ。

もちろんカメラは長回しを多用する。

しかも音楽全くなし。だが、録音がすごい。

紙幣を数えるシュツ、シュツという鋭い音までも、ドラマの要素として使う。

ここまで書けば、この映画が、玄人受けを狙っているのは歴然。

相当な映画マニアでないと、この手の映画は受け付けないだろう。

作品を見た後で、この監督がドキュメンタリー出身の兄弟監督であること、パルムドールを2回受賞している事を知る。

若いカップルを演じた役者さんにはとても光るものを感じる。

特に女性の方は全くの新人だそうだ。これからが楽しみな逸材。

ラストシーンの二人の涙。これがとてもいい。

セリフが何もないのがとてもいいのだ。

男と女の涙には謝罪、贖罪、後悔、あきらめ、許容、あらゆる感情がないまぜになっている。

二人はまだ大人とは言いがたい。

大人への階段を上るたびに、この男女はまた、きっと涙を流すだろう。

だが、ともに涙を流すパートナーがいるという事は、それだけでひとつの幸せと言えるかもしれない。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ジャン＝ピエール・ダルデンヌ、
リュック・ダルデンヌ

主演 ジョレミー・レニエ、デボラ・フランソワ

製作 2005年

上映時間 95分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=0_Kr6bTtETE

2009年2月6日鑑賞

美を求める手段、彼の場合

とても切ない映画だ。

ベン・キングスレーは、老いてはいるが、セックスにしか熱意を感じていない主人公を演じる。仕事で、演劇の評論を書き、時々は大学で講義も受け持つ。

一人暮らしの生活にとっては十分な収入を得ているようだ。

もう、世間に対して自分をエラそうに見せる必要もない立場だし、もっと金をもうける必要もない。そんな事は全くの無関心に近い。

そう言えば食事のシーンが一度もこの映画には出てこない。

この人はおそらく、何か特別においしいものを食べたい、などと言う欲求もないのだろう。

ひとり、酒と孤独を楽しむ生活なのだ。

だが、唯一激しい欲求を持っているもの。

それが、女だ。そしてセックスだ。

ただただ、女性の美しさを追求する男であり、女性とのセックスによって精神的な充足感を得ているのだ。

ヴィスコンティ監督の「ベニスに死す」に出てくる主人公の作曲家は、少年の中に永遠の美しさを見いだしてしまう。

本作の主人公は自分の講義に出席した、美しい女性に一目惚れする。

普通の彼なら一目惚れなどしない。

単にセックスの対象者として女性を見るだけだ。

その彼が女性のあまりの美しさに我を忘れた。

当然体が欲しくなる。どうしてもその美しさの手応えが欲しいと彼は思う。

彼は美しさを眺めるだけでは満足しない人である。

美しさに自分が関わる手段として、彼はセックスを選んだ。

美そのものと同一化するのだ。

「ベニスに死す」の作曲家が少年の美しさを、美術工芸品のように眺め続けるのとは大違いだ。

本作はとてもアメリカの都市を舞台にした映画とは思えない。

まるでフランス映画である。

そのトーンや雰囲気を持っているのだ。

音楽も古典のバッハから現代音楽の先駆けである、エリック・サティのピアノ曲が、とても自然に画面と調和する。しっとり、深く、深く、こちらの心に染み入ってくるピアノの音色。こんな雰囲気が好きな人にはハマってしまう映画ではなかろうか。

ベン・キングスレーはとても知的な風貌で、彼が演じるベッドシーンも少しも嫌みがない。

大人の味わいだ。

主人公はセックスを通してのみ女性と関わってきた。

しかし、生徒である女性の美しさについて心を奪われた。

自分がひとりである事がさみしいと思うようになった。

ベッドの上以外でも、彼女をそばに置いておきたいと願った。

そんな初老男性の意外な程ピュアな恋心を見事に描写していて

僕にとっては好きなタイプの映画なのだった。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 イザベル・コイシエ

主演 ペネロペ・クルス、ベン・キングズレー

製作 2008年 アメリカ

上映時間 112分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=2N0hFjgpiLM>

2009年2月8日鑑賞

砂粒としての瑠璃色の地球

「宇宙にとって地球とは、例えば、海岸の砂の一粒にしかすぎない」
これは「コスモス」と言うテレビ番組でカール・セーガン博士が行ったコトバ。
月に行った飛行士達は、まさにこの言葉通りの事を感じた。
そしてこの映画を見る僕たちも同じような貴重な体験が出来るのだ。
本作はアポロ計画で月に降り立った、宇宙飛行士達の側面から見る、ドキュメンタリーとして構成されている。
宇宙開発の映画では「ライトスタッフ」「アポロ13」は、見た事がある。
「ライトスタッフ」は、多くの失敗を重ねたアメリカの有人宇宙飛行が軌道に乗るまでを描いているし、「アポロ13」は、奇跡の生還劇をトム・ハンクス主演で描いた、感動的な映画だ。
この2作品を時間軸的につなぐ映画が、今までなかったのである。（ただし、トム・ハンクス氏製作で「人類、月に立つ」というシリーズのDVDはすでにある。）
月に降り立つというのはどんな体験なのだろう。
どんな神聖な体験なのだろう。
宇宙から地球を見るというのはどんな体験なのだろう。
それをこの映画では、実写映像で疑似体験が出来る。
地球は小さかった。
あまりに小さかった。
そしてはかないものだった。
そして何より愛おしく美しい
漆黒の闇に輝く様な、青い、青い、水惑星である地球。
宇宙スケールから見れば、月へ行くというのは、砂粒から砂粒への移動なのかもしれない。
しかし、その砂粒の中に60億と言う人間が住み、隣の砂粒である月へ初めて移動する事に成功した。
「ひとりの人間にとって、小さな一歩かもしれないが、人類にとっては大きな飛躍だ」
人類初の月着陸を果たした、アポロ11号の阿姆斯特朗船長の有名な言葉である。
どうか、宇宙の創造主よ、このはかなくも小さな人類の挑戦を
宇宙の日記帳に忘れぬよう記録しておいてほしい。
ただし、宇宙との平和的な共存を人類が望む限りにおいてだ。
僕の想像は膨らむ。
例えば、将来、他の知的生命体と接触し交流を持ったとしよう。
当然の事ながら、そのうち、どこかの富豪とか、どこかの超大国が、他の星との間で貿易を始めるだろう。

自己の利益のためには、地球をも切り売りするだろう。

ちょうどケーキをナイフで切り分けるごとくに。

その時はどうか宇宙の創造主よ。

容赦なく地球を消し去っていただいかまわない。

タダの砂粒のひとつである事を、人類はそのとき思い知るだろうから。

以上、僕の”単なる妄想”であってほしいと願う。

この作品を見る時、なぜか、そんな地球を超越した視点に立つ事が出来るのだ。

宇宙は地球中心に回っているはずもなく、さらには地球上の一生物である人間が、わがまま勝手に地球を食い物に出来る存在ではないはずだ。

そんな宇宙的な視点を与えてくれる秀作ドキュメントである。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

作品データ

監督 デヴィット・シントン

主演 バズ・オルドリン、アラン・ビーン、
ジム・ラベル

製作 2007年 アメリカ

上映時間 100分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=GL4bvi2_BQs

チェ 28歳の革命

2009年2月10日鑑賞

臆病者の感想を言えば

この映画のまえに「ザ・ムーン」を見た。

月から見た小さな青い地球が、小指の先の砂粒ぐらいに見えた。

それぐらい小さな星だった。

その小さな砂粒の下、キューバという地域で革命が起こった。

キューバ革命について、僕に個人的関わりは、何もあるはずもなく、一切語る必要性も感じない

。

何より、革命は武力と言う名の人を殺すと言う「手段」によって成立した。

人の命が革命と言う「目的」の為に「手段」として「消費」されたのだ。

命を消費するという事を、今一度考えるべきだ。

キューバ革命は50年前の事であり、歴史的にまだまだ新しい出来事である。

当時直接に関わったキューバの人達も、まだ多くの方々が存命中である。

チェ・ゲバラは革命を率いた国民的英雄である。

日本で言えば坂本龍馬や、西郷隆盛クラスの歴史上の人物という事になる。

だが、カストロの指導のもとに行われたその手法については僕はどうしても好きにはなれない。

あくまで僕のスタンスとして、映画作品としての印象のみについてゴタクを述べたい。

僕としてはカメラの構図がとても好きだ。

市街戦のシーンなのもあるのだが、建物と人物を写す、そのアングルがとてもいいなあと思った

。

音楽面でもラテンパーカッションが効果的に使われていたりする。

映像のつながりもとてもうまい。

モノクロとカラーの部分との使い分けなんかも、とても好きなのだ。

そんなわけで、映画作品として、とてもよく出来ていると思いますよ、私は。

作品中で、逃げ出す革命兵士がいますが、間違いなく僕はその中のひとりだと思うんで。

この映画の中のようなセカイとは関わりになりたくないなあ、というのが率直なところです。

すいませんねえ臆病者で……。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 スティーヴン・ソダーバーグ

主演 ベニチオ・デル・トロ、デミアン・ビチル

製作 2008年

上映時間 132分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=TMGTnKrpF6A>

P.S. アイラヴユー

2009年2月16日鑑賞

アイランドは恋の妖精がよく似合う

アイランドには古くから妖精伝説がある。この作品の主人公の夫。

彼こそまさに妖精として天国に旅立ってしまった人なのかもしれない。

彼は愛する妻へ手紙を書いた。いろんな場所へ、いろんな手段で。その手紙は彼が亡くなった後、妻へ届く。

作品中いくつか、印象深いシーンがあった。

オープニングの夫婦喧嘩のエピソード。これは映画のプロローグである。その後、タイトルロールが続く。一転して、亡き夫の追悼集会の場面となる。この構成は見事だ、と思った。

妻の女友達の会話、そしてその行動。女ってこういう本音を隠し持ってる訳ね。う～ん、怖い、怖い。

湖でのボートのシーンも最高だった。

あわや、遭難しかけて呆然となる女3人。

その3人がぼつり、ぼつりと、問わず語りに自分の近況を告白し始める。

湖の上、くすんだアイランドの空。悲劇的な状況。

にもかかわらず、女性3人は喜びを分かち合う。

悲劇の中の、喜劇的状況。ここは監督のセンスの良さが光る。

これらのシーンを魅力的に見せているのが、登場人物を優しく包み込むアイランドの風景である。

小さな国ながら、雄大で、優しい風景。

まさに妖精が出てくるにはふさわしいではないか。

近年はアイランドを舞台にした映画がめちゃくちゃいいねえ。

本作でも、よく聞くと、アイランドなまりの英語が聞けたりして、何とも気分がほっこりする。だから、洋画は、やっぱり字幕で観るのが僕は好きだ。

主演のヒラリー・スワンクの魅力が一杯詰まった本作。

永遠、理想の男性像を追い求める女性達に捧げたい映画である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 リチャード・ラグラヴェネーズ

主演 ヒラリー・スワンク、ジェラルド・バトラー

製作 2007年 アメリカ

上映時間 126分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=IYxz2g0g8IM>

ベンジャミン・バトン 数奇な人生

2009年2月18日鑑賞

交錯しあう、人生のライン

絵画で言えば印象派のような映画だとも思う。映画を構成する各エピソードがとても印象的なのだ。

ハチドリに入れ墨船長とベンジャミンのエピソードもいい。決まった時間にアリアを歌う老いたオペラ歌手だとか、7回雷に撃たれた老人、それぞれの人生のライン。それぞれのエピソード。彼らは皆、老いるという一方向に向かう。しかしベンジャミンの人生のラインは、全くそれに逆行するという設定になっている。

ブラッド・ピットが若返ってく撮影は、特殊メイクのスタッフがすばらしい仕事をしている。それよりも更に素晴らしいのは、やはりケイト・ブランシェットの演技である。

この作品ではバレエのピルエットまで披露したり、時には、恋人との奔放で、弾けまくった演技をしてみたり、時には老け込んでいく中年女性を淡々と表現したり。その化けっぷりは、さながら魔性の女なのである。彼女と対等に渡り合える男優は、そうザラにいないのだ。

この映画はベンジャミン・バトンの一生が、ケイト・ブランシェット演じる、恋人デイジーの目を通して語られていくという構成になっている。

他にもいくつもの印象深いシーンがある。

ヨットを操るブラッド・ピットは、さながらアラン・ドロンの「太陽がいっぱい」を思わせるし、若返った時のベンジャミンの面影は、まるで永遠の青春スター、ジェームス・ディーンを彷彿とさせる。

バレエスタジオでのデイジーとベンジャミンのショットもよかった。

全面鏡ばりになっているバレエスタジオ。

そこに映るベンジャミンとデイジー。

目の前に映る姿は本物なのか？ 仮の姿なのではないのか？

これから若返ってしまうベンジャミン。

女としての盛りを過ぎていくデイジー。

二人の人生のラインが交差しあう。

この時間を閉じ込めておきたいと思う、二人の気持ちが交差しあう。

とても見事なショットだ。

そう言う詩的な映像表現がいくつも見られるのがこの映画だ。

ひとりの人間の人生を概観するというタイプの映画なので、やや冗長な感じは否めないが、印象的な映画ではある。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 デヴィット・フィンチャー

主演 ブラッド・ピット、ケイト・ブランシェット

製作 2008年 アメリカ

上映時間 167分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=EvW22ldA3_8

ホルテンさんのはじめての冒険

2009年2月22日鑑賞

人生のレールから降りた時

もう、何年も使ってきたであろう古びたポットにお茶を入れて、仕事場に出かけるホルテンさん。そのリアリティがとてもいい。

彼は定年まで立派に列車の運転士を勤め上げた。運転士仲間が記念にお祝いパーティーを開いてくれた。

ホルテンさんとしては、こんな晴れがましい席で、注目を浴びる事など考えた事もなかった。シャイな彼は内心うれしく、少しは誇らしく思う。

「自分の職務に忠実にやっただけだ」という微妙な表情が印象的だ。

彼としては、厳しい寒さの中、二本のレールの上、その上を列車をつかって忠実になぞって来ただけのことなのだ。

この作品、いわゆるオффビート系とでも言おうか？ わざと笑いのツボをはずして、それを面白がれる人には、楽しい映画なのだろう。ジム・ジャームッシュ監督の「ブロークン・フラワーズ」などが面白い、という人などがその典型だろう。

ホルテンさんは、定年を迎え、レールの上から人生をオフした。はずした。

そのとき今まで見えなかった、日常のきわどい別のレールが人生で初めて見えて来たのだ。

それは扉一枚、間仕切りひとつ向こう側にあるレールだった。

レストランで食事をしていれば、扉ひとつ向こうで、コックが逮捕され、夜更けに街を歩いていると、路面電車のレールの数センチ手前で寝ている老人に出会う。

自分の人生を初めて他人の目線、他人のレールの上をなぞってみる、内的な体験に彼は旅立つのだ。

それは自分を見つめ直す、精神的な大冒険なのかもしれない。

とても哲学的な映画なので、観客の方から何かを積極的に感じようとしないと、映画の方からは何も語りかけてはくれない。そういうタイプの分かりにくい映画ではある。

しかしながら、ホルテンさん同様、ちょっと無口でシャイな映画もあっていいと思うのである。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ベント・ハーメル

主演 ボード・オーヴェ、ギタ・ナービユ

製作 2007年 ノルウェー

上映時間 90分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=x6wUByaHHOc>

チャーリー・チャップリン ライフ・アンド・アート

2009年3月13日鑑賞

うれしい楽しい大好きチャップリン

このドキュメンタリーを映画館で観るという貴重な体験をした。上映してくれた神戸のパルシネマさんに大、大、大、感謝したい。

ジョニー・デップのインタビューが興味深かった。彼は「チャップリンの黄金狂時代」で演じられた、ロールパンの踊りを実際に真似してみたそうだ。

「まさか、こんなに難しいものだったとは思わなかったよ」と話すジョニー・デップ。

彼もチャーリーをととても意識している映画人のひとりなのだ。

そう言えば、彼の当り役である、ジャック・スパロウ船長の、あの手の動きや、身のこなし方、どこかチャップリンを思い起こさせるものがある。

チャップリンが最初にミュージックホールで大受けしたのが酔っぱらいの演技。ジャックスパロウ船長も、そう言えば、四六時中酔っぱらっているような動きである。

ウディ・アレンも、実に彼らしく、好きな作品、嫌いな作品をはっきりコメントしている。

マーティン・スコセッシ監督は、やはり監督としてのチャップリンを評価する。その優れた編集技法、ストーリーの展開。チャップリンがはじめて監督に専念した「巴里の女性」を再評価してみせる。

他にも、チャップリンの伝記映画である「チャーリー」の監督リチャード・アッテンボロー（どうしても「大脱走」の将校役がイメージから離れないなあ〜）や、主役のロバート・ダウニーjrの話も興味深い。

また、近年発見された「独裁者」撮影中の様子を撮った、カラーでのホームムービー、更には「街の灯」撮影中のホームムービーなど、資料的価値の高い映像がぎっしり詰まっている。

チャップリンについては、映画人としてだけではなく、それこそ、人類史に残る人物なので、どうしても彼を祭り上げてしまいたくなる自分がいる。

だが、当のチャップリンはそんな事は望んでいないのだろう。彼は、人を笑わせるために映画を作ったのだ。観客をただ、楽しませたかったのだ。

そんな彼もやはり人間だ。老いが訪れる。やがて、彼の笑いは古くさいと思われるようになってしまった。離れていく観客、老いる自分。

孤独と向き合い、映画人としての集大成ともいえる、晩年の傑作「ライムライト」がうまれた。

主演のグレア・ブルームは「撮影中は、まるで夢を見ているようでした」とのこと。

チャップリンファンにとって、このドキュメンタリー作品を鑑賞すること自体「まるで夢を見ているかのような」体験なのである。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆
配役 ☆☆☆☆☆
演出 ☆☆☆☆
映像 ☆☆☆☆
音楽 ☆☆☆☆
総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 リチャード・シッケル
主演 チャールズ・チャップリン、ウディ・アレン
マーティン・スコセッシ、ジョニー・デップ
製作 2003年 アメリカ
上映時間 131分

ごめんなさい、予告編映像が見当たりませんでした。代わりにチャップリンの伝記映画、アッテンボロー監督作品「チャーリー」をこちらからどうぞ

http://www.youtube.com/watch?v=xBh_5F3aXTI

チェンジリング

2009年3月28日鑑賞

感情の手触り

感情を手触りで表現できるとしたらどのようになるのだろうか？

まさにこの映画は、感情の手触りまで感じられる秀作だった。

クリント・イーストウッド監督は以前から子役を使うのがとてもうまい監督さんである。

「パーフェクト・ワールド」での子役の演技は注目だ。今回の作品でも、ティーンエイジャーの少年達の演技が実にいいのだ。

アンジョリーナ・ジョリーについてはこの映画で、女優としてのある一線を越えた感がある。役者という技能職はその仕事を通じて、時に精神的な、ある一線を越える必要に迫られる事がある。

それは、いままでの役者人生としての、キャリア蓄積という準備がなければならぬ。

そして、よい監督、スタッフ、共演者、よい脚本との出会い、役柄とのマッチング、これらの要素がすべて融合しないと奇跡は起きない。

本作ではそのすべてがそろった。

きわめてまれな奇跡の演技がここに産まれた。

そういえば「エディット・ピアフ～愛の讃歌」では、マリオン・コティヤールが、たったひとりでこの偉業を成し遂げた。

今でも僕は怒っている。彼女の「奇跡の演技」を監督のいらぬ演出が最後まで邪魔し続けた。カメラさえじっとしていれば、あの映画は10年後も20年後も伝説になったはずなのに……。

その点クリント・イーストウッド監督は実に抑制が利いている。彼は意外にも多作な監督であるが、どの作品も、ある一定水準以上につくってみせる力を持っている。

「硫黄島からの手紙」で、その圧倒的な力量を見せつけた後も、まさか、ここまで完成度の高い映画を仕上げている熱意と、パワーが残っていようとは思わなかった。

そのエネルギーの源泉はどこにあるのだろうか？

ひとつのヒントは、権力への反発である。

虐げられる弱い者への視点を、常に持ち続けている監督なのだ。

本作では精神病棟へ無理矢理主人公が放り込まれ、虐待を受けたり、子供殺しの犯人の死刑執行シーンなど、ショッキングなシーンもあるので、あまり心臓の弱い方にはお勧めしない。

フィリップ・シーモア・ホフマン主演の「カポータ」でも死刑執行シーンがあるが、あれ以来のリアルさであった。ただし、トム・ハンクス主演の「グリーンマイル」程の残虐なシーンではない。（あそこまでいくと単なる悪趣味にしか過ぎない）

いつも思うけど、悪役のキャラクターを演じられる役者さんて、すごいなあ～、と素直に感心する。

何しろ映画を見ている最中、本当に

「こいつらを告訴しろ！！」だとか、「こいつらクタブレ！！」とか、「こいつを死刑にしろ」などと、握りこぶしを握ってしまうほどの迫真の演技なのだ。

これも作品の完成度の高さに大きく貢献する、役者としての素晴らしい仕事である。

本作は音楽面でも実に興味深い。なんと音楽担当、クリント・イーストウッドというクレジットが流れる。作曲まで手がけているのだ。

映画には音楽を入れてもいいシーンと、音楽を必要としないシーンがある。

彼はその使い分けが実にうまい監督さんなのである。

映画の教科書的な考え方では、モンタージュ技法や時間変化、役者の動きだけで見せるシーンなど、セリフのない場面で音楽が使われる事が多い。

しかしクリント・イーストウッド監督は、音楽面でも更に一步踏み込んだ考えを持ち込んだ。

「無音」と言う考えだ。

セリフも「ない」

音楽もまた「ない」のである。

そこでは役者の微妙な表情と動きだけに、観客の意識が集中する。彼はそれを狙ったのだ。

「無音」という選択肢を持つ監督はザラにはいない。余程の確信と度胸がなければ出来ない演出方法なのだ。

最後に映像について。

やや色調を押さえた（セピア色とまではいわない）トーンである。

ちょっとメタリックな感じがして「プライベート・ライアン」などの映像タッチとよく似ている。本作が1920～1930年代にかけてのストーリーなので、とてもよくこなれた絵作りだと思う。

ここまで思わず熱く語ってしまったが、まだまだ語り尽くせないほど、この作品は魅力的だ。そう言う作品に出会えたことをうれしく思う。

久々の重厚かつ、魅力的な作品に出会った。

2009年に入って、はじめての超お勧め作品！！

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 クリント・イーストウッド

主演 アンジェリーナ・ジョリー、ジョン・マルコヴィッチ

製作 2008年 アメリカ

上映時間 142分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=MmMusb51gWs>

2009年4月20日鑑賞

これがコメディ映画の傑作です

(DVDにて鑑賞)

ダスティン・ホフマンって身長低いなあ〜、と改めてびっくりした。

だから女装しても、身長が釣り合っただけであんまり違和感ないんだ、と妙になつとく。

ジャシカ・ラングって、若い頃（失礼！！）こんなにチャーミングだった訳ね。

これも再確認しました。

でも、ダスティン・ホフマン演じるドロシー役は、もっとチャーミング。

この映画、今見ても、何とも楽しい。

ダスティン・ホフマンの演劇塾での熱血授業風景。彼は演劇塾の指導的立場の人なのだ。

ところがエージェントからは、仕事の依頼なし。

本格派、演技派と呼ばれる俳優さんには、意外にも、あまり仕事が回ってこないことが多いらしい。

そう言えば、売れなかった頃のトム・ハンクスも、アクターズスクールインタビューという番組で

「仕事のないNYでの1年は、3年ぐらいに思えるぐらい辛くて長いんだ。何度もくじけそうになったよ」

この映画の主人公ダーシーも、今仕事がないのだ。実力は十分なのに。

ところが、女装してオーディションを受けたら合格してしまった。

テレビドラマに出演、人気は上がる。今まで売れなかった俳優とは思えない程、次から次へと出演オファーが殺到。

スタジオを出ればファンからサインを求められる。一躍彼は人気者の仲間入り。

中年男達が隙あらばアプローチをかけてくる。

おまけに、今までは冷たかったエージェントも、手のひらを返したように、

「この役をもっと続けろ！！」

本人早くやめたいのに……。

そのやり取りが何ともおもしろい。

映画「卒業」で、一躍青春スターの仲間入りを果たしたダスティン・ホフマン。

シリアスな演技だけじゃなく、こんなコミカルなキャラクターも演じられる。やはり実力派なんですね。

今やハリウッドの大御所だけど、名作「クレイマー・クレイマー」をやったあとで、あえてこの作品にチャレンジ。

この映画でさらに一皮むけた感じもする。

いつも思うけど、喜劇は必ずと言っていいほど、悲劇的な状況の中から産まれる。

主人公の境遇も仕事がなく、止む終えずやった女性役が大当たりしてしまったという、喜んでいいのか、よくわからない現実が背景にある。

その辺りのペースもちらりと見せながら、上質の喜劇に仕立て上げてます。今観ても笑えます。これぞコメディ映画の傑作。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

作品データ

監督 シドニー・ポラック

主演 ダスティン・ホフマン、ジェシカ・ラング

製作 1982年 アメリカ

上映時間 116分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=smTXkhM6v-Y>

フロスト×ニクソン

2009年4月20日鑑賞

役者は”元”大統領を、どう演じたか？

正直この映画を観る前かなり不安だった。これって映画になり得るのかなぁ～とおもったのだ。二人のトークバトルを、ただ映すだけでは映画になるはずもない。

座って2人が話をするだけではまるで小津映画だ。それに挑戦するのか？

以前トム・クルーズ、メリル・ストリープが共演した「大いなる陰謀」では、そのトークバトルシーンの演出が見事に破綻してしまっているのだ。

あの作品は「こころざし」というものを感じさせてくれる。僕としてはとても好きなタイプの映画なのだが、お世辞にも映画的とはいえない手法だった。

そのトークバトル映画を「アポロ13」や「ダビンチコード」を手がけたロン・ハワード監督がどのように料理するのか？ とても興味があったのだ。

結果としては成功だったと思う。

キャスティングがまず的確だった。

冷静沈着で、憎たらしいほど大物ぶりを見せるニクソン大統領、方や、ちょっと浮いた感じすらある、バラエティーショーの司会者。両者の対照的な雰囲気がとても良く出ている。

権力を持ったものはその権力を振りかざしたがる。かつて権力を持っていたニクソン。地位と名誉と権力のすべてをスキャンダルで滑り落としてしまった”元”大統領だ。

今でもまだ自分の威光を見せたいと願う。

そこに人間ニクソンとしての弱さがでてしまう。

そういったところをととてもよく演じていたと思う。

また、ニクソン大統領の側近役のケビン・ベーコン。彼がまた、切れ者らしくて渋いねえ～。「アポロ13」での宇宙飛行士役もよかったなぁ～。

この映画、登場人物も少なく、派手なアクションシーンは、もちろんなく、特殊効果もほとんど使われず、かなり制作側としては勇気のいる映画だったのではないかと思う。

なぜ、今ニクソンを取り上げるのか？ など、制作意図など詳しいことはよく分からないけれど、役者本来の演技バトルの醍醐味を味あわせてくれる作品ではある。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ロン・ハワード

主演 フランク・ランジェラ、マイケル・シーン

製作 2008年 アメリカ

上映時間 122分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=dzyEBsnpWqc>

ぜんぶ、フィデルのせい

2009年4月21日鑑賞

コドモ目線のキョーさん主義

(DVDにて鑑賞)

少女は、比較的裕福な家庭に育った。部屋数の多い、ステキな庭付きの家にすんでいる。学校のクラスメートも、割といい生活を送っている、良家の子供達ばかりだ。

習い事にも行かせてもらえる。

スイミングスクールで、先生からほめられるとうれしい。

友達より早くゴールインするのも快感。

ある日のこと。家の雰囲気なんかおかしい。

ひげ面の変なおじさん達が集まって話をしている。

1日だけなら、まっ、いいか……。

なんておもってたら、いつの間にか、毎日ひげ面おじさんに囲まれるようになった。

家も引っ越した。

庭はない。

新しいお手伝いさんにもなじめない。

だって、料理が変な味するもん。

こんな料理、どこの国の？

見たことないんだもん。

いやだ！ もうがまんできない。絶対パパに言ってやる。

こんな生活、嫌だああああ！！

パパもママも、よく分かんないキョーさん主義ってものが好きらしい。

それって、プーさんよりかわいくないもん。いやだ。

友達だって仲良くしてくれないし。

なんであたしがこんな目にあう訳？

もしかして、これって、パパ達がよく言ってるフィデルって人のせいなの？

☆☆☆☆☆☆

この映画、徹底的に子供の目線で大人達の社会を観察している。

何ともけなげな少女は、小さな体で、すでに、“生き様”とでも言えるものさえ観客に見せつけている。

少女の低〜い目線。なんか大人達がよく分かんないことをやってる。

子供達は、環境の変化に敏感に反応する。

笑顔なんてほとんど見せない、ぶすっ、としたヒロインが何ともかわいい。

共産主義に関わらず、大人達の方向転換で、子供の暮らしぶりがどう変わっていくのか？

ほんとに5歳の子供にも分かるその変化ぶり。

子供にも分かる、と言う事は、実は映画だけにかかわらずとても難しいことだ。

あえてそれに挑戦したこの映画に拍手を送りたい。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ジュリー・カヴラス

主演 ニナ・ケルヴェル、ジュリー・ドバルデュー

製作 2006年 アメリカ

上映時間 99分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=cXYR_0VC56o

ダイアナの選択

2009年4月23日鑑賞

観客としての選択は？

これは難しい映画ですねえ。編集はとても優れていると思うのですが、映画作品として、充分こなれていないような気がします。

というのも、ラストシーンの解釈次第では、トンでもストーリーに変身してしまう訳です。そうすると、これは、ミステリー？

もちろん原作は読んでことがないので、あくまで映画作品としての感想なのですが。

例えば、この映画に銃社会アメリカの悲劇を見たり、あるいは教育の荒廃を見たり、あるいはPTSDの問題でもあり、若さと無軌道な生活を見てみたり、いろんな見方が出来る訳です。

ところがラストシーンの解釈一発で、それらシリアスで複雑な問題を全部ご破算！！ 吹っ飛ばしてしまった感じがあります。

じゃあ、今まで延々語られて来たこの物語は何だったんだ？

この主人公はそもそも生きてるの？ 死んでるの？ という疑問が浮かぶ訳です。

どうにでも解釈してくれと、突き放すようなストーリー展開。こういう映画の作り方は、ちょっと舌足らずな感じがして、いかがなものか？ と疑問に思います。もちろん、役者さん達の演技や、監督の演出はとても素晴らしいものがあるのですが、ちょっと僕には肌が合わない映画であったということでしょう。

なお、冒頭の綺麗な画像は、まるで蜷川実花監督の「さくらん」や、一連の蜷川実花写真集を思わせます。また、森の中で子供を捜すシーンでは、河瀬直美監督の「もがりの森」のいちシーンをおもわせたりします。日本映画は最近とても上質な作品が多いですので、日本国内での評価より、むしろ海外から注目され、真似されているのかもしれないね。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ヴァデイム・パールマン

主演 ユマ・サーマン、エヴィン・レイチェル・ウッド

製作 2008年 アメリカ

上映時間 90分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=sPN1IR8R6JY>

いのちの戦場 -アルジェリア1959-

2009年4月24日鑑賞

リアルさのバブルが弾けるとき

最近の戦争映画はどんどんリアリズムが、加速している。

リアリズムに突き進んでいくとどうなるか？

結局、戦場のドキュメンタリー映像に近くなってしまう。

映画作品としてのドラマ性がどんどん失われていく。

迫真の映像を目指す先にあるものは、過激なまでの悲惨なリアルさである。

結局、行きすぎたリアルさは、例えばハリウッド製アクション映画と同じ運命を辿る。

SFXなどの特殊効果の多用で、より刺激的で、見たことのないアクションを追い求めたハリウッド。

そのバブル現象はすでに弾けてしまったことは、もう誰でも気がついていることだ。

今更、マトリックス的な映画を作っても「もう、そんなの見飽きたよ」と言われてしまう。興行収入を見れば分かることだ。

「クレヨンしんちゃん」や「ドラえもん」にはかなわないだろう。

さて、本作はフランス政府が長く認めなかったアルジェリアでの“戦争”の物語である。戦地に新しく赴任した中尉。彼はまだ人間としての理性を持って戦地にやって来た。

彼は人間として、まともでありたいと常に願う人である。たとえ戦闘中でも、人間らしい理性を失いたくないと願う人なのである。

対照的に戦地で心と体を鍛えられた軍曹。

彼はいくつもの死線をかいくぐって来た者が持つ、生き残るための手段を知っている人である。

どのような悲惨な殺戮の現場に居合わせようと、自分が生き延びるためには、自分で心のシャッターを閉じることが出来る。そのためには単細胞動物になりきれぬ人物なのだ。

他の兵士達もそれなりにタフな連中だ。

なお作品中はかなり悲惨な戦闘シーンがある。

これはすでに「プラトーン」や「プライベート・ライアン」を超えた水準の、リアルで悲惨な戦場シーンだ。これを正視してしまうと観客としても耐えられない感覚に教われる。

酒の一杯もひっかけて、裸にでもならなければやってられないのだ。実際、作品中でも、兵士達はたまに最前線から基地に帰ってくると、やることは酒に酔っぱらうことだけだ。でなければ不安で耐えきれないのだ。

僕も映画を見ている最中、これはグイっと一杯、ウイスキーを腹に放り込みたい衝動に駆られた。

ここまで戦闘シーンを見せてしまうことは、すでに戦争映画という作り物の領域から、はみ出

してしまう行為である。

この先、戦争映画はどこへ行くのだろうか？

先日観た「ワルキューレ」は戦争アクション映画として楽しめる映画といえる。

まあよ、もしかするとそっちの方が平和的でいいのかもしれない。

なんだかとても逆説的に、子供だましの「ワルキューレ」の方がよく思えて来た。

確かに観客は、平和を、のうのうと謳歌し、ポップコーンをほおぼりながら

「あっ、キューベルワーゲンがでて来た！！」などと、ミリタリーファン丸出しで楽しめるのだ。

平和的エンターテインメント映画「ワルキューレ」の対極にある、今、現実に行き始めている9・11以降のイラン、イラクでの戦争。その現実を目の前で見せられているようリアルさだった。

もうこれはシャレにならない。

やっぱりウィスキーを一杯ひっかけよう。

今日はぐでぐでんに酔っぱらおう。

でなければ明日からの現実に、僕は立ち向かえない気がするのだ。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 フローラン＝エミリオ・シリ

主演 ブノワ・マジメル、アルベール・デュポンティル

製作 2007年 フランス

上映時間 112分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=ENKa4yikf4o>

ある公爵夫人の生涯

2009年4月27日鑑賞

しなやかでたくましい女性の美学

お目当てはもちろんキーラ・ナイトレイだ。彼女は18世紀のドレスなど、やはり時代物がよく似合う。

そう言えば「パイレーツ・オブ・カリビアン」でも、やはりきついコルセット姿のドレスがよく似合っていたし、「プライドと偏見」での衣装も、そしてイギリスの田園風景も実に彼女に似合っていた。

「パイレーツ・オブ・カリビアン」は、アクション娯楽映画だが、本作では、もうおてんばなだけではないキーラナイトレイが観られるのだ。今回彼女はなんと、母親役にまで挑戦するし、禁断のラブシーンさえあるのだ。これを観なければ、彼女のファンとして男がすたると言うもんだ。

。

いつの世でも、どの国でも、嫁というのは、世継ぎである息子を産むまでは、肩身の狭い思いをするらしい。21世紀の現代日本でもその風潮は完全になくなった訳ではない。

ましてや、この物語は18世紀のイギリスの公爵家である。

公爵その人は、公爵家を守ることに、そのために世継ぎである男子出産を願い、そして愛犬2匹をかわいがる。それだけが関心のすべてという人物なのだ。そう言う、愛のかけらもないところへ、婦人は嫁ぐのである。当然のことながら不毛な形式だけの結婚であり、当初から家庭内離婚状態だ。だが、表向き彼女はあくまでも公爵夫人である。

更には彼女には服飾デザイナーとしての才能もあった。

自分でデザインしたドレスを着てパーティーに出席すると、他のご婦人方から注目の的になる。

。

やがてファッションセンス抜群の彼女は、社交界のスターにのし上がる。

そこに現れたのが政治家を目指す若い青年である。

この映画の見所は、キーラがどこまで演技者として成長しているか？ であり、そしてなんと言っても、その絢爛豪華な衣装をじっくり楽しみたい。

また、公爵家などの、時代を経た建築物の美しさや、造り込まれたイギリスの庭園の美しさも見逃せない。

やはり18世紀のこういったセレブ達の衣装や、活躍する舞台装置そのものが、とても映画的魅力に満ちあふれている。

日本の時代劇、たとえば大ヒットした「篤姫」で大奥の衣装やその建築様式の美しさに眼を奪われるのと同じである。

とにかく絵になるのだ。

ストーリーそのものはごくごくありふれたものなのだが「篤姫」同様、時代劇としてのトータ

ルな魅力に満ちあふれている。物語の結末もそれなりにソフトランディングしている。

それにしても、いつの時代でも、女性はしなやかでいて、たくましく生きるのだなあ〜と、男としてうらやましく思うと同時に、とても男じゃ耐えられないよなあ〜と、感心する次第である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ソウル・ディップ

主演 キーラ・ナイトレイ、レイフ・ファインズ

製作 2008年 イギリス／イタリア／フランス

上映時間 110分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=D-AZFdlqsYw>

スラムドッグ\$ミリオネア

2009年5月21日鑑賞

インドパワーのファーストアンサー

ストーリーそのものはとてもシンプルだ。インドのスラム街で育った青年が、クイズ番組に出演し、次々と正解を出し億万長者になる、という、いわばシンデレラストーリーである。そのシンプルなストーリーの中に彼の生い立ちや、過酷なほどの運命、そして現在のインドのリアルな状況などが垣間みられる作品になっている。

映像そのものにとっても印象的なカットが多い。

少年二人を下から上へ見上げているカットがある。少年達の頭上には抜けるような空が広がっている。それは自由と希望の象徴のように見える。

だが現実の幼い兄弟は親を亡くし、住むべきところもなく明日の食べ物もない。

一体、どこに自由と希望があるのだろうか、という状況なのだ。

彼らは今日一日を生存していくために、様々な機転を利かせ生きていく術を学んでいく。

なぜ、彼がクイズで次々と回答できたのか、実は彼の今までの生活そのものに秘密が合った訳だ。

作品全体を通して、とてもバランスのいい映画作品であると思う。

社会派映画に偏るでもなく、単なるエンターテインメントやアクション映画でもない。それらの要素をすべて持ちながらも、とても絶妙なブレンドで仕上げている。邦画でいえば「フラガール」を観た後の充実感に近いものがあると思った。

先日DVDで「ガンジー」をみて、ガンジー本人やその思想、そしてインドにとっても興味を引かれる思いがしたのだが、あの作品は、ただいま現在のリアルな状況は描写していない。本作はストーリー展開の中で、作品のリズムを壊す事なく、インドのありのままの姿を映し出す。

子供はゴミの山の上で食べ物を探す。ある人はゴミだけのドブ川に胸までつかり、まだ使えそうなものを探している。観ているこちらが嫌になるような映像なのだが、これらはあくまでも作品のアクセントとして使われている。これらのカットが決して作品の魅力を削いでしまうことがないのだ。とても巧みな編集といえるだろう。

ミリオネアになった主人公の青年、彼の兄、更には恋人のジェシカ、クイズ番組の司会者役の俳優。どの役者さんも、与えられた人物像を見事に表現している。

何より、これほど完成度の高い作品に仕上げた監督の力量に驚かされる。

インド映画界の底辺の広さを物語っているのだろうか？

経済の発展とともに映画界にもインドパワーが台頭してくると思うが、世界の映画勢力図はこの先どのような展開になっていくのだろうか？

この映画がその将来を予言しているかのようだ。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ダニー・бойル

主演 デヴ・バテル、マドゥル・ミッター

製作 2008年 イギリス／アメリカ

上映時間 120分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=-KBxb9sl6al>

グラン・トリノ

2009年5月23日鑑賞

アメリカがアメリカである理由

どうしてこんな分かりやすい映画を作ったのだろう？

確かにこの映画は分かりやすい。

テーマは「継承」だと僕はおもった。

それは、自分の魂であり、アメリカの誇りであり、プライドでもある。

何より、男の生き様（陳腐な表現しか出来ないなあ〜）の継承だ。

ただ、主人公の頑固な老人が継承を望んだ相手は、隣の家に住む少数民族「モン族」の青年であったということだ。

この作品、久々にクリント・イーストウッド監督自身が主人公を演じている。

主人公の老人は一人暮らし。長年連添った奥さんは先日亡くなったばかり。以前から気難しくて、息子達も彼の家には寄り付かない。息子達や、孫達は、今どきのファッションや、はやりものにしか興味がない。孫達は主人公の奥さん、つまりおばあちゃんの葬式に、へそだしファッションで現れ、司祭の説教中も携帯電話の方にしか興味がない。

おじいちゃんには宝物にしている車がある。フォード車である。名前を「グラントリノ」という。それは自分が長年勤めた会社の車でもある。

あるちょっとした事件をきっかけに、隣のモン族の青年と交流を持つようになる。彼の家族からホームパーティーにも招かれる。

人付き合いの悪い彼、最初は渋っていた。

違う国のビールを飲み、意外にうまい料理を口にする。

「これもいいもんだな」ふと、彼は思う。

こんな演技をする俳優、クリント・イーストウッドが、これまた、いい味を出しているのだ。彼の愛車「グラントリノ」は、いつもピカピカに磨き上げられている。まるで新車のような。とても30年以上前の車とは思えない。後に彼はこの車のある人物に譲ることになる。

きっと新しい持ち主も、この車をピカピカに磨き上げることだろう。

自分の愛する仕事、自分の愛する魂、それを磨くことをしなかった合衆国、そしてアメリカ企業。ひとつの時代はすでに終わった。アメリカンドリームも地に落ちた。

アメリカの魂を引き継いでくれるのであれば、たとえそれが少数民族であってもいい。あらゆる人種を受け入れて来たアメリカ。いいものは何でも飲み込んでいく。

それが唯一残された「アメリカが、アメリカである理由」いわば、アイデンティティーなのかもしれない。

クリント・イーストウッド監督作品としては小粒ながら、肩に力が入ってなく、とても上質な、キラリと光る小品と言える作品である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 クリント・イーストウッド

主演 クリント・イーストウッド、ビー・ヴァン

製作 2008年 アメリカ

上映時間 117分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=p_LtBoOBLDk

路上のソリスト

2009年6月3日鑑賞

期待が大きかっただけに

「プライドと偏見」「つぐない」のジョー・ライト監督と「レイ/Ray」のジェイミー・フォックスの強力タッグ！！これは必見だと思った。相当な期待を寄せて劇場に足を運んだ。劇場からの帰り、正直足が重かった。この程度の完成度で配給してしまうのかなあ～と残念でならない。

冒頭、コラムニストが、自転車事故を起こすのだが、これが何かの伏線なのかと知っているのと、物語には何の関係もない。なぜこんなシーンを入れたのだろうか？理解に苦しむ。

ジョイミー・フォックスは「レイ/Ray」でレイ・チャールズが乗り移ったかと思えるような、神懸かり的な演技を見せた。そして何より、彼自身のピアノプレイが素晴らしいのだ。その音楽の才能に恵まれた彼が、今度はチェロに挑戦すると言う。これは期待しない方が無理だ。

だが、本作で演奏されるのはほんの少しだけで、それもどうやら吹き替えの部分が多いようだ。

感動の音楽ドラマとしては「4分間のピアニスト」などの衝撃的な作品もある。あの圧倒的なプレイや、緊迫感を期待していたのだが、本作では、ずいぶんと肩すかしを食らった感じである。主人公は統合失調症に苦しんでいるが、彼には世界がどのように見えているのか？周囲がどのように自分を追いつめていくのか？という演出に興味があった。やはり、この程度で仕方ないのかなあ～、というのが率直な感想。映像にとっても工夫があり、彼の心象風景を表現しようと試みているのだが、彼の行動そのもので、表現してほしかった気がする。むしろ彼の心に感情移入しすぎた演出なのだ。

このあたりの表現、演出は「再会の街で」という作品が印象的である。9.11テロで、家族全員と愛するペットまで失ってしまい、心を閉ざした元医師を主人公にしている。そこには主人公の内面を描く手法ではなく、外から見える彼の奇異な行動から、その心の痛みを観客が想像出来るように演出している。あの描写の再現を期待していたのだが.....。

ただ、きっかけはなんでもいい。音楽を好きになってくれるファンが増えることはうれしいことである。上質な音楽を題材にした映画をもっと本腰で取り組んでほしいと願う、いちクラシック音楽ファンの感想である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆

音楽 ☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ジョー・ライト

主演 ジェイミー・フォックス、ロバート・ダウニーJr

製作 2009年 アメリカ

上映時間 117分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=BQ8DFSv50TM>

レスラー

2009年6月18日

それでも彼は戦い続ける

何より、ミッキー・ロークのマッチョな体に驚く。彼は役作りのため、映画の準備として、まずこの肉体を作り上げたのだ。その努力に値する作品に出来上がったのは彼にとって大きな喜びだろう。

過去に華々しいスポットライトと栄光を一身に浴びたレスラー。

その栄光もすでに過去のものだ。彼はもう若くもないし、体にも相当ガタがきている。

こんなことを書くと、まるで「ロッキー・ザ・ファイナル」のようなシチュエーションなのだが、あの作品と比べても、こちらにはまた、この作品ならではの魅力がある。

僕の大好きなシーンがある。

しばらく出会っていなかった自分の娘とダンスを踊るシーン。

海辺の廃墟と言えるような朽ち果てたダンスホールで踊る二人。

このシーンは本当に目に焼き付く。

中年男の彼はスーパーの総菜売り場でアルバイトをする。

客相手にポテトサラダをパックにつめる仕事だ。多すぎる、少なすぎると文句を言う客。彼は怒らずにサラダを減らしたり増やしたりする。何とも悲哀に満ちた光景だ。

しょせんプロレスは、興行である。プロモーターや出演者が金を稼ぐ手段である。しかし彼はやはり、プロレスを愛しているのだ。だから金銭的に苦しくなって来てアルバイトに精を出しても身に付かないし、これは自分のやる仕事じゃないと感じてしまう。

自分は本当はリングにいる人間だ。自分はやはり、リングでプレイしたいのだ。

観客にもう一度拍手を浴びたい、愛されたいと彼は思う。だから自分の体を傷つけても、薬漬けの体にむち打ってスポットライトをあびていたい。彼が彼でいられる場所。それがリングなのだ。だから今日も彼は戦い続けるのだ。

エンドロールに流れるブルース・スプリングスティーンの曲がずしりと心に響く。彼に捧げる挽歌である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ダーレン・アレノフスキー

主演 ミッキー・ローク、マリサ・トメイ

製作 2008年 アメリカ

上映時間 109分

予告編映像はこちら

https://www.youtube.com/watch?v=TD7hq_PpgtM

マルタのやさしい刺繍

2009年6月20日

いい歳して、なんて言わせないわよ

これはおばあちゃんがランジェリーショップを開くお話。

ただ、それだけの話に終わらないのは2つの背景があるから。

ひとつは物語の舞台がスイスの片田舎（悪く言えばド田舎です）

もうひとつはおばあちゃんの息子がその村の神父という聖職者の地位にあること。

そりゃあ、息子の神父にしてみたらたまったもんじゃない。もうおばあちゃんである自分の母親がセクシーな下着の店を開くなんて、これは村の笑い者になりかねない。なんとか彼は母親のショップを閉店に追い込もうと工作を始める。

おばあちゃんにはひとつの特技があった。

刺繍がうまいのだ。

亡くなったじいちゃんは雑貨屋を営んでいたので刺繍なんか全然関係ない。だからこの特技は今まで封印して来た。

ランジェリーショップを開いてみたい、と相談した友達から、

「せっかくの特技なんだからランジェリーに刺繍してみたら？」と勧められる。

村に古くから伝わる地元の紋章などの模様をランジェリーに刺繍してみよう、とおばあちゃんは思いついた。友達はネットショップ開設の手はずも整えてくれ、いよいよおばあちゃんのセクシーなランジェリーショップは本格的に動き出すのだが、

ずっと以前から観てみたいと思っていたのだが、たまたま上映してくれる映画館があり、スクリーンで鑑賞できた。もちろんスイスの美しい風景もふんだんに出てくる。でも、どちらかと言うと、そのスイスの片田舎に住む日常生活とはどんなものなのか、ということがよく分かっておもしろいところである。

どこも田舎は似たりよったり。村中がひとつの狭い共同体なのだ。だから少しでも変わったことを始めると、とたんに反対勢力が出現するのはどこの国も同じなのだ。村の実力者を自認する政党の支部長も反対勢力なのだが、この役者さんの演技がとてつよい味出してる。

キャストिंगもおじいちゃん、おばあちゃんがたくさん出て来て、華々しさはないのだが、老人パワーはまだまだ捨てたもんじゃなない。

若者に受けようとする娯楽映画が多い中、こういう熟年、お年寄りを元気づけてくれる映画ってとても貴重だと思う。何より若者が観ても、もちろんおもしろい。

このお話、大変さわやかで後味が良く、そして小気味のよい作品に仕上がっている。僕にとってはとても好きなタイプの、クスッと笑える、いろいろなユーモアが詰まった作品なのだ。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ベティナ・オブレリ

主演 シュテファニー・グラザー、ハイジ・マリア・グレスナー

製作 2006年

上映時間 89分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<https://www.youtube.com/watch?v=Uu5i6vrFxic>

天使と悪魔

2009年6月25日

シンプルなアクションとサスペンス劇

とてもゴージャスな映像が楽しめる作品である。

前作「ダヴィンチコード」の時はストーリーが複雑な割に印象が薄かった。思い返しても、どんなストーリーだったか忘れてしまっている。本作は一見とても複雑な歴史サスペンスを思わせるが、実はストーリーはいたってシンプル。

前作に比べてもラクチンで鑑賞できるのだ。

ヴァチカンの聖職者で最重要人物4人が誘拐される。物語はその誘拐された4人を救い出そうとする、トム・ハンクス演じる主人公とヴァチカン警察の活躍、そして犯人は誰なのか？を解き明かしていく。

ヴァチカンやローマのロケはとても美しい映像だ。何せ町並みそのものが、すでに美術館なのだから。こんなところでロケをやれるというのは邦画関係者ならうらやましい限りだろう。

さて、ヒロインの女性についてはやや印象が薄い。前回「ダヴィンチコード」のオドレイ・トトゥも、何しに出て来たのかよく分からなかい、お飾りの役だったように思うけど……。今回もその点がやや不満。トム・ハンクスの教授役は取り立ててその背景に、ドロドロした複雑な人間関係とか、人生においていろんなものを背負い込んでいるとか、そういう人間の奥行きは全く感じない。とてもドライで、まるでアクション映画の俳優のひとりとして「機能」しているトム・ハンクスがいる。この人を使うぐらいなら、「フォレストガンプ」での知的障害を持った主人公だとか、「プライベートライアン」で演じた、元国語教師の大尉だとか言う風に、その人物の背景の部分や奥行きを見せてほしかったなあと思う。作品全体としてはサスペンス劇であり、アクションもふんだんにあり、それなりに楽しめる作品には仕上がっている。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ロン・ハワード

主演 トム・ハンクス、アイレット・ゾラー

製作 2009年 アメリカ

上映時間 138分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=rbPbKeg3YXs>

ボルト

ボルト

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=ZdsCfkrvXfs>

2009年8月5日鑑賞

3Dのスーパーヒーローだ！ワン！！

増えてきつつある3D映画です。専用のメガネをかけて鑑賞します。夏休みということで子ども達に混じって、いい歳したおじさんが立体映像を初体験してきました。これからはこういったアニメ、及びアクション映画など、娯楽性の高いものはどんどん3Dになっていくんでしょうね。

犬のボルトはTV番組の動物スターです。だけど彼は、スタジオの中で育てられてきました。だから他の世界は全然知りません。おまけに飼い主の女の子も同じ番組でヒロインを演じています。いろんな悪役が仕掛ける魔の手から、毎回ふたりは協力しあって事件を解決します。この劇中劇のアクションシーンは迫力満点。もう、それこそハリウッドの作り物の「大嘘」ですから。嘘っぱちのアクションは思いっきり嘘っぱちの方がいい訳です。だけどボルトにしてみると、やはり彼は犬なのですね。これがまさか撮影だとは思っていないのです。彼は飼い主である女の子を守りたい。その一心で、わざとらしく作られた悪の魔の手から彼女を救います。

そんなボルトの気持ちを利用するマネージャーやスタッフ達のキャラクター達。いかにも業界の人という感じでおもしろいですね。

ボルトは自分にその力があるのだと、周りの人間スタッフから思い込まされてきました。そんな彼が、全くの偶然から撮影所の外に迷い出てしまうのです。撮影所の中では通用した自分のパワーが、現実の世界では全く通用しません。スーパーヒーローであった自分が何も出来ないなんて。まさか人間にだまされていたとは……。落ち込むボルト。飼い主の女の子を捜しての旅が始まります。

以前見た、「Mr・インクレディブル」や「レミーのおいしいレストラン」は充分大人の鑑賞に

堪えるものでしたが、この映画，やはり，お子様向けと言った感じが否めません。やはりこの映画の目玉とは，3D映像作品ということでしょうね。映像の質感はさすがです。人物の髪の毛にご注目ください。こんな自然な風合いは今まで見たことなかったですね。まだまだ進化を続けるアニメ作品なのでした。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 バイロン・ハワード、クリス・ウィリアムズ

主演 ジョン・トラボルタ、マイリー・サイラス

製作 2008年 アメリカ

上映時間 96分

HACHI 約束の犬

2009年8月18日

ハチには「静謐」と言う言葉がよく似合う

この映画には静謐というコトバがよく似合うとまず思った。

とても心が落ち着く穏やかな映画なのだ。ただ穏やかな映画だけなら、退屈になりかねない。この物語は日本人はハナから知っている訳で、ハチと呼ばれる犬が亡くなったご主人を待ち続けるお話である。

犬が待ち続けるだけなら特に面白みはないはずだ。けどこの物語ではハチと、教授との出会い、その奥さんや娘の結婚話など、それぞれのエピソードをわざとらしい演出などせずに、丹念に丁寧に描き出していく。

特に秀逸なのはカメラワークである。ハチ自身の目線的时候は、モノクロ画面にし、手持ちカメラを使用する。また、ハチと飼い主の教授のツーショットでは遠景の固定カメラを多用している。

この遠景のショットがさりげなく実にいい雰囲気なのだ。

自宅の庭で遊ぶ教授とハチ。その家と登場人物との距離感が何とも絶妙なのだ。温かな家庭の雰囲気をそのまま映画のフィルムに包み込んだ感じがするのだ。

監督はラッセ・ハルストレム。僕の大好きな「ショコラ」を撮った監督さんである。

あの映画はロケがフランスの片田舎で行われているので、とてもこれがアメリカ映画だとはおもえない。ヨーロッパの香りがする映画だった。

本作のハチでは、日本でのロケ以外はアメリカで撮影されているが、やはりどこかヨーロッパの映画のような雰囲気がある。このあたりがこの監督の持ち味なんだろうなあ、とうれしくなるのだ。

僕は、ほんとはネコ好きなんだけど、（ネコ観察が趣味である。）そんな僕でも犬と人間の関係って、なんかいいよね、と思わされる映画である。

カサカサした現代社会の中でペットと人間の関係って実にウエットだ。犬を飼っている人、（ネコを飼っている人もそうだけど）が一様におっしゃるのは、「家族の一員」というコトバである。犬と共に過ごすあたたかな家族の物語。その静謐さをぜひ味わってほしい映画である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ラッセ・ハルストレム

主演 リチャード・ギア、ジョーン・アレン

製作 2008年 アメリカ

上映時間 93分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=JSPkf7Crwug>

イントゥ・ザ・ワイルド

2009年9月4日 (DVDにて鑑賞)

彼の生き方にイエスと言おう

大変精神性の高い映画である。この映画の主人公は実在の人物だ。彼は大学を優秀な成績で卒業。しかし、俗なセカイでの出世や名誉、そして金さえも捨てる生き方を選んだ。彼はなんとたったひとりで、荒野へサバイバル旅行に出かけてしまうのだ。ヒッチハイクしながらアメリカの広い大地をてくてく歩く。彼はアラスカを観てみたいと思い、北へ向かう。その途中で出会う人々。ある人はトレーラーハウスで暮らしていたり、ある人はお固い元軍人であったりする。彼は社会人として栄達することを拒んだ。その根底にあるのはヘンリー・デビット・ソローなどの思想であったりする。

できることなら、僕もこのような放浪の旅にふらりと出てみたいと思ってしまう。リュックサックを担ぎ、野山の中で誰にも頼らず生きてみる。

そんな考えを抱くのも、僕が以前70年代のカウンターカルチャーに少なからず感化されたからだ。その時代の先頭を突っ走っていた雑誌「宝島」

そこに連載されていた、ヘンリー・デビット・ソローの「森の生活」は、正にボディブローのように身体に効いてきた。

僕はよく思うのだ。各個人がひとりで一日分のエネルギーを生産し食料を一人分だけ消費していれば、この世の中はもっと暮らしやすくなるんじゃないか？

だが、もちろん現実は厳しい。本作の主人公も厳しい自然のなかで狩りをしてみたり、食べられる植物を探してみたりするのだが、これが、後に彼の体に致命的な影響を与えてしまうことになる。自然の中で彼は短い生涯を終えることになるのだが、これが大自然の中で生物としての人間が生きていくことがいかに大変なことなのかを知らしめてくれる。そう言う生き方を選択した者は厳しい運命を受け入れるしかないのだろう。それは、時には自然の中で死に至る覚悟も必要とされるのだ。そのことも含めて僕は彼の生き方を肯定したいと思う。自然の中でひとつの生命体として生きること。死を含めて自然と言うシステムのとてつもない尊厳のようなものを感じさせてくれる。この映画は、その気高い精神性を色濃く反映した何物かがあると感じられた。

天見谷行人の独断と偏見による評価 (各項目☆5点満点です)

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ショーン・ペン

主演 エミール・ハーシュ、マーシャ・ゲイハーディン

製作 2007年

上映時間 148分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=eQyE0Mu97Ec>

幸せはシャンソニア劇場から

2009年9月12日鑑賞

思わず口ずさむ♪パリ～♪パリ～

まだ、映画でミュージカルを丁寧に作るとこんなに楽しくできるんだと感心した。

この映画の一部が劇中劇でミュージカル仕立てになっているのである。

舞台はパリの下町、シャンソニア劇場。そこの裏方ビゴワル（ジェラルール・ジュニョ）は、自分の半生をこの舞台に捧げて来た。

だが、劇場の経営は火の車。そこへ街の実力者が、劇場を買い取ってしまうところから物語は始まる。ビゴワルは仲間達と、なんとかもう一度シャンソニア劇場を立て直そうと自主公演に踏み切る。

だが、出演者は物まね”王子”などという、頭のねじが外れかけたような”おじさん”を筆頭に、冴えない連中ばかり。

この映画、そういうさえない中年おじさん達を実にチャーミングに描きながら物語を進めていく。

そういえばこの映画を作ったスタッフは「コーラス」の製作チームである。「コーラス」でも、教師役は何となく冴えない男だったのだが、これが親近感が合ってとてもいい味出していた。

本作ではまた、ずっと引きこもりだった元指揮者のおじいさん、通称「ラジオ男」（ピエール・リシャール）の活躍がおもしろい。

彼はシャンソニア劇場からデビューした、新人歌手ドゥース（ノラ・アルネゼデール）の歌を聴いて、俄然元気を出してしまい、何十年ぶりかにシャンソニア劇場の指揮者として復活するのだ。

このあたりのスピード感ある展開もとても楽しい。音楽の持つ夢や力というものを、久々に楽しくミュージカル仕立てで演出する映画に出会った感じだ。

僕の大好きな傑作ミュージカル「チキチキバンバン」、もうあんな映画は二度と作れないだろうと思っていた。確かに本作はスケールは小さいながらも、こういった小劇場を舞台に、ここまで完成度の高い劇中ミュージカルを見せてくれた。思わずブラボーと拍手を送りたくなった。

こういう映画製作チームがあれば、もしかすると第二のチキチキバンバンが出現しないとも限らない。そう思わせてくれるのだ。

劇場を出ると神戸の街に雨が降っていた。そう言えばこの映画は雨のシーンが多かった。

パリにはなぜか雨がよく似合う。こんな素敵な映画を観た後は、神戸の街も、まるで映画の風景のように思える。雨の中を帰るのが楽しいなんて久しぶりだ。傘をクルリと廻してみる。気がつけば僕は劇中歌のフレーズを口ずさんでいた。

「♪パリ～、パリ～♪」

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 クリストフ・バラティエ

主演 ジェラルール・ジュニョ、クロヴィス・コルニャック

製作 2008年 フランス、ドイツ、チェコ

上映時間 120分

予告編映像はこちら

https://www.youtube.com/watch?v=sD_cS-9U41c

キャデラック・レコード ～音楽でアメリカを変えた人々の物語～

キャデラック・レコード ～音楽でアメリカを変えた人々の物語～

2009年9月17日鑑賞

ご褒美はキャデラックさ

これは見る映画ではなく、聞く映画だと思った。音楽に関してはもう最高のパフォーマンスを聞かせてくれるのだ。映画前半に流れるマディ・ウォーターズ、リトル・ウォルター、チャック・ベリー、などのR&B、ロックンロールの原型ともなったこれらの音楽を存分に楽しめる構成だ。特にハーモニカとギターのセッションにはワクワクさせてくれる。まさに聴く人の魂を揺さぶる音楽なのだ。

後半に登場するビヨンセの歌声。これがまたいいんだよねえ。ビヨンセが演じるのは実在の女性歌手、エタ・ジェイムズ。

彼ら黒人ミュージシャンの多くは貧しい中から、歌やギター、ハーモニカなど、たったひとつの取り柄だけをたよりに世の中に打って出た。そして名声をつかんだ。

貧困の中、夢も希望も亡くしそうな中から、彼らはスターにのし上がっていった。ただ残念なことに、この映画に登場する人物のほとんどが、ドラッグや酒に溺れ、身を破滅させていく。

偉大なミュージシャン、レイ・チャールズを描いた「Ray」でも、彼の陰の部分が描かれていた

また、黒人音楽大好き人間には、ドキュメンタリー映画「永遠のモータウン」もオススメだ。興味があればこれらの映画も是非チェックしてほしい。

本作はレコード会社の設立からアーティストのサクセスストーリーを概観する語りになっている。そのため、「Ray」などに比べ、登場人物の掘り下げ方が、やや浅いと感じられるのは致し方ないところだろう。

白人から差別され、食事では一緒のテーブルにも付けず、コンサート会場では、ロープで白人と分けられ、そう言った黒人達がやがて成功の証、キャデラックを乗り回す姿は、ある意味痛快でもあった。50年代のアメリカの黒人ミュージシャンが夢見たサクセスストーリーの典型がここにある。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ダーネル・マーティン

主演 エイドリアン・ブロディ、ジェフリー・ライト
ビヨンセ・ノウルズ

製作 2008年 アメリカ

上映時間 108分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=l48KGSxnOqo>

ATOM

ATOM

2009年10月20日鑑賞

22世紀へ伝えられるアトム像か？

アトムに関して言えば、ロボットマンガの原点だし、今の日本のロボット産業がセカイの最先端を行っているのは「鉄腕アトム」というマンガがあったからと断言してもいいと思う。

ホンダがASIMOの開発のとき「鉄腕アトムをつくってみたいか？」という話から始まったという逸話まである。実際のロボットを研究、開発、製造している人達が、みな「アトム」とアトムを生み出した手塚治虫と言う存在に敬愛を抱いているはずだ。

日本人は世界の中でも特にロボットに違和感をあまり抱かない人が多いと言われている。本来、機械部品のカタマリであるはずのロボットは「アトム」によって、日本人の、そして人類のよき友達として受け入れられたのだ。

さて、そのアトムを映画化するとすると、やはりもう一度、手塚治虫が何を目指していたのか？という根本的な問いかけまで、戻って考えた方がいいと思う。

よい先例として浦沢直樹の「PLUTO」がある。

ロボットは人間にとってどんな存在なのか？ロボットそのものに感情は芽生えるのか？ロボットと人間はどのように関わっていくのか？その様な根本的な問いかけが、見事に表現されているのである。

日本のマンガはすでに浦沢マンガと言う極めてクオリティの高い、芸術の域を目指している表現媒体を獲得してしまった。当然そのファンは目が肥えている。そこにあえてハリウッドからアトムが逆輸入でやってきたのである。

そういう状況を了解した上で本作を鑑賞した。

正直中途半端な感じは否めなかった。子供受けを狙ったということが悪いことではない。コドモにきちんと理解されるのはとても重要なことだ。ただ、子供達に21世紀ではなく「22世紀」を夢見させるだけの志のある作品になったか？ということである。

どんな未来になっても人の心には普遍的な感情がある。喜怒哀楽、憎しみや偏見、そして争い。浦沢作品にはどの時代にも共通する人間の根本的な問題がきちんと取り上げられている

。「PLUTO」はそのいい例なのだ。

そのクオリティの高い作品がすでに発表されてしまった後のハリウッド製アトムはやはり分が悪かったとしか言いようがなかった。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 デヴィッド・パワーズ

主演 フレディ・ハイモア、ニコラス・ケイジ、ビル・ナイ

製作 2009年 香港／アメリカ

上映時間 95分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=rNou7In0bE8>

マイケル・ジャクソン THIS IS IT

2014年1月5日鑑賞

まぎれもなく「愛」だった

エンドロールで不覚にも目頭が熱くなった。

マイケル・ジャクソンと言う、ひとり人間が残したメッセージにしかすぎないのに。
なぜ胸が熱くなるのだろう。

実はこの映画を観る前、かなり斜に構えていた。

僕はマイケル・ジャクソンのファンでもない。

彼の曲もほとんど知らない。

なぜ観に行ったのか？

ヤフー映画レビュー、及び興行成績、共にダントツのトップ。

「ほんまかいな？」というのが、そもそもの動機なのだ。

どうせコマーシャルリズムの固まりにすぎないと思っていたのだ。

だが、僕の予想はいい意味で大きく裏切られた。

これはマイケルのロンドン公演「THIS IS IT」のいわゆるメイキングフィルムである。

ポップスの世界においてマイケル・ジャクソンは、自分の帝国とも言えるものを作り上げた。

彼は自分がその帝国の王座に座ることについて、どんな思いでいたのだろうか？

また、その王座を誰かが常に狙っていることに、恐れはなかったのだろうか？

マイケル亡き後、それは永遠に謎のままだ。

僕の兄がその昔、エルビス・プレスリーの映画「エルビス・オン・ステージ」を観て夢中になっていたのをふと思い出した。

プレスリーも一時代をつくった人である。

しかし、彼はステージをリタイアしてから、その体はドーナッツの食べ過ぎでぶくぶくと太り、プールサイドには何台もTVを並べ、気に入らないアーティストがそのTVに出ていると、ライフルでTVごと吹っ飛ばした。

マイケル・ジャクソンはどうなのだろう？

彼の遺作とも言えるこの映画を観ていると、彼の歌唱力、ダンス、すべてのパフォーマンスが、最高の状態を維持しているのが分かる。

あの鋭い体の動きを要求されるダンスを、50歳という年齢で行うことは容易ではない。プレスリーのように太れる暇がないぐらい、激しいフィジカルトレーニングを自分に課しているのだ。

なお、音楽面ではマイケルファンではない、49歳の中年オヤジの僕の感想としては、ミドルテンポや、スローバラードなどがとてもよかった。

マイケルというと8ビートで”タテのり”の連続という先入観があったのだが、決してそんなこと

はない。シンガーとしてのマイケルは、しっとりと、心に染み入るように聴かせる歌も、実にいいのだ。

すでに天文学的な富と名声を手に行っているのに、彼はなぜここまでクオリティーの高いパフォーマンスを求め続けたのだろうか？

自分のプライドのため？

それとも、やはりキング・オブ・ポップスの地位を守りたかったから？

この映画にはその答えのヒントが垣間見える。

リハーサルの様子が記録されている。

スタッフの誰もがマイケルに敬意を払っている。そしてマイケルと仕事ができることに、限らない誇りと喜びを感じている。さらにはマイケル自身も実にやさしく、しかも謙虚に、スタッフ達と意見を交わすのである。

それはロンドン公演で観客を「未知の領域」に連れて行こう、という共通の目標をもっているからなのだ。

このロンドン公演のためにダンサーのオーディションが行われた。

驚くべき競争を勝ち抜いて選ばれたダンサー達だ。

皆、マイケルと踊れることに最高の喜びを感じている。彼らの身体能力の高さ、パフォーマンスには素直に驚く。

彼らのダンスシーンもこの映画の大きな魅力である。

映画の終盤、環境問題にまで踏み込んだマイケルの発言、そして曲が披露される。

彼は彼のファンだけでなく、ちょっと大げさに言えば、宇宙の領域から、地球という星すべてを愛していたのである。

彼のこの星への愛が感じられる。メッセージと楽曲である。

今は亡き彼の愛を、マイケルファンでない人たちも、この映画でしっかりと受け止めるだろう

そこにあるのはマイケル・ジャクソンという一個の人間ではなく
存在そのものが「愛」であるということ。

なお、エンドロールを最後までごらんになった方には、マイケルから素敵なメッセージがおくられます。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ケニー・オルテガ

主演 マイケル・ジャクソン

製作 2009年 アメリカ

上映時間 111分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=O4Z3jHx3leo>

Disney's クリスマス・キャロル

Disney,s クリスマス・キャロル

予告編映像はこちら

https://www.youtube.com/watch?v=dbnu28_d7QI

2009年11月26日鑑賞

温かい心で迎える、クリスマス

ディケンズの古典を現代の3D技術で映像化した作品である。

よきクリスチャンであろうとする人々にとっては、受け入れやすい題材であるだろう。

ただ、やはりお金イコール「ユダヤ」という古い図式で観た時に、今更この題材を映像化することに、ユダヤ系の人々は反感を感じるのでは？ と、ちょっと疑問に思った。

物語の舞台は雪の舞うクリスマス・イブ。

主人公の商事会社の店主は、世の中全て、金で考える様な人物である。

街の人々はクリスマスを祝う気分になられている

道ゆく人はクリスマスおめでとうと声を掛け合い、街角にはクリスマスの聖歌を唄う人々。

街はお祝い気分一色だ。

しかし主人公だけは雪の降る、暗く、鬱陶しい空と同じぐらい不機嫌なのである。

部下にクリスマス休暇を与えることすら、この店主は、気に入らないのだ。

また、クリスマスにやってくる募金活動家にも悪態をつく。

飢えた人々は飢えさせて死ねばいい。そうすれば人口が減って住みやすくなるまで考える人である。

そんな彼がイブの夜、恐ろしいまぼろしを見た。

彼は恐怖のあまり、自分のこれまでの行いを、まぼろしの中の精霊達に悔い改めることを誓う。

この作品を映像化するにあたって、監督はリアルに役者を使って映像化してもよかったのだろう。

。

だがそれでは精霊が出てくる部分での幻想的なイメージが膨らまない。

さらに、精霊達が主人公に教え諭すために与える、恐怖感も表現できないと考えたのだろう。

その意図を表現できるテクニック、それが実際に役者が演じ、それを3Dモデルにデジタル処理する、モーション・キャプチャーというテクニックだった。

その意図は、この物語が持つ幻想的なイメージを実現するのに、ベストではなく、ベターな選択だったと言えらと思った。

というのも、映像を見ていて、やはりちょっと引っかかるところがあるからだ。

たしかに映像は文句の付けようがないくらい見事である。

3D用のメガネをかけて鑑賞したが、精霊達と主人公の幻想的なシーンは迫力満点。一見の価値はある。

ただ、こういったアトラクション的な部分ではなく、人物同士が静かに会話をしているシーン

でも、あまりにもキャラクター達の動きが人間臭くてリアルすぎる。

例えば、首から肩にかけての微妙な動きなど、今までのCGを使ったアニメーションでは到底表現不可能だ。

そんなにリアルなら、なにもわざわざアニメにしなくてもいいではないか、という疑問まで出てくるのである。

映像技術がある部分行き着くところまで行き着いた結果、こういう現象が起こってきた、とも言えるのである。

全体としては、古典らしくキリスト教的な博愛主義が、物語の根底に流れている。

クリスマスは弱き人々にも暖かく迎えられるように、との作者の願い。

その辺りは素直に受け止めても言いだろうと思う。

自分の生き方をクリスマスをきっかけに大きく変えた主人公、

甥っ子にまねかれて暖かな家族と共に過ごす夕食の席。

何とも暖かな雰囲気、観客としても、ほっと救われる気分になった。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ロバート・ゼメキス

主演 ジム・キャリー、ゲイリー・オールドマン

製作 2009年 アメリカ

上映時間 97分

イングロリアス・バスターズ

イングロリアス・バスターズ

2009年11月28日鑑賞

オブラートで包まない殺戮

はっきり言ってしまうえば、あまり品のよくない映画である。

結構残酷なシーンもあり、余り心臓の弱い方にはお勧めしかねる部分もある。

タランティーノ監督作品をみるのは初めてである。

予告編を観る限りでは、結構コミカルで、何かぶっ飛んだギャグ満載の戦争映画のように見える

しかし内容はかなりシリアスで、しかも史実には基づかない全くのフィクションである。

いや、フィクションなどというオブラートで包んだコトバは不適切だ。

この映画でタランティーノ監督がたくらんだのは、まさにオブラートに包まれない、非常なまでのエグイ殺戮表現である。

それが救われているのは、これがフィクションなどという心地よい響きのコトバではなく、単なる「作り話」であるからだ。

そして役者の魅力である。

ナチ親衛隊将校役の俳優クリストフ・ヴァルツが主役のブラッド・ピットを食ってしまっている

。3カ国語を縦横無尽に使い切り、他の俳優達を振り回す、その怪演ぶりは、一見の価値ありである。

ブラッド・ピットはいわゆる、単なる「客寄せパンダ」である。

実際に画面で登場する時間も、この将校役クリストフ・ヴァルツの方が多いくらいだ

以前僕はB級映画の監督は、エキストラをバンバンぶっ殺すと書いたことがある

例えばウディ・アレン監督などは、とても映画の作法が上品なので、エキストラ、あるいは、脇役の人生にも陰影を付けて美しく描く。

しかしタランティーノ監督の癖なのだろうか。とても割り切っているのである。

それこそエキストラもバサバサ！！グサッ！！、バババババーン！！と殺しまくり、まだ殺したりないので、準主役まで「もうお前の演技は終わった！！」と不要になれば、容赦なく派手にぶっ殺す。

そしてスクリーンから消し去ってしまう。

このあたりの監督の割り切り方が、たまらなく好き、という熱狂的なファンもいるのだろう。

僕の好みとしてはバンバンぶっ殺されるエキストラにも、それぞれ今まで背負ってきた人生があり、映像に映るのは一瞬かもしれないけど、その一瞬までにどんな紆余曲折があって、ここまでたどり着いたのだろうか？ というところまで描いてくれる監督さんが好きである。

きっと僕は、ストレートにこの種の映画を楽しめない人種なのだろう。だからテレビゲームなど

での格闘技戦なども好きではない。すすんでやったこともない。

これが品のいい冗談で笑える、戦争コメディだったらよかったのに……と古い感覚しかない僕のような映画ファンには、なんとも後味の悪い映画だった。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 クエンティン・タランティーノ

主演 ブラッド・ピット、メラニー・ロラン

製作 2009年 アメリカ

上映時間 152分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=6ckc9r3ySyo>

カールじいさんの空飛ぶ家

カールじいさんの空飛ぶ家

2009年12月8日鑑賞

愛情ストーリーは風船のように飛び立つか？

予告編と、TVCMを観る限り、妻を愛し続けたひとりの老人のハートウォーミングなお話、とばかり思っていました。

前半はいいですねえ。妻との出会い、結婚、出産の失敗、歳を重ねるごとに円熟していく二人のよきパートナーとしての友情。

それらがゆったりした音楽だけ、セリフなしの映像で語られていきます。

これって、要するにサイレント映画の手法なんですね。

この演出は実に心憎いです。僕はニンマリ。

これはいい映画だぞと期待が膨らみます。

そして妻が亡くなった。

自分はたったひとりこの家に残された。

自分に残っているのは妻との思い出の日々。そして妻と過ごしたこの家だけ。

だけど現実は厳しいですね。

なんとカールじいさんの周りは再開発がすすんでる。彼の家だけが開発の喧噪の中でポツンと建っているのです。

このあたりのリアリズム。これはひねりが利いてる。いい映画だぞ、といやが上にも期待は高まります。僕はこんな人生の悲哀に満ちた表現が大好き。大人の鑑賞に耐えますからね。

でもストーリーが進行していくと、あれ、ちょっとまった。

なんでこんなに簡単に家が飛んでしまうの？

その辺りのリアリティは何にも触れられず。（若干伏線は張られていますが）

これだけの風船を一気に膨らませるのには相当な労力が必要だったでしょうに。

その老人の苦労も語られず。いきなり家はあつという間に空に浮かび上がる。

家を浮かび上がらせるまでの悪戦苦闘があつて初めて空に浮かんだ時の感動があると思うのです。

その辺りを「はしょって」いるのはちょっと疑問でした。

それになに？この少年の登場は？おまけに犬やキジまで出てくるし。

これじゃ、あと猿がいれば、日本昔話の桃太郎の鬼退治みたいなもんじゃない？

おまけにちゃんと後半で鬼の存在も設定されてます。

要するに物語の後半はカールじいさんと少年の冒険物語なんですね。

このあたりのストーリーはやや脱線気味。

いつの間にか、愛した妻への思いもあまり感じられない演出になってます。狙いは後半のアクションドタバタ劇でありまして、このあたりの展開の方針変更がちょっと残念な感じです。

まてよ……偏屈で頑固な老人と、少年の話???どっかで聞いたなあ～。

そうです。あの巨匠クリント・イーストウッド監督の傑作と名高い「グラントリノ」のそっくり生き写しではないですか!!あれまあ～、ピクサー、ここまでパクっちゃったか、と正直痛快でしたが、、、

3D映像は申し分ないですし、自然の描写もとてもうつくしいです。

ただ、あくまで僕の趣味として、もっと奥さんとの愛情ストーリーをふくらませて、あの風船のようにストーリーを飛び立たせたかったなあ～。

その辺りをもっと描いてくれれば物語の奥行きも出て、大人達がこの作品に足を運ぶと思いますよ。

きっとこの映画を観る大人達はその部分に期待してるでしょうから。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ピート・ドクター

主演 エドワーズ・アズナー、ジョーダン・ナガイ

製作 2009年 アメリカ

上映時間 103分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=hUuM5IGWgoE>

2009年12月15日 DVDにて鑑賞

ゴミの星から愛を込めて

いろいろと考えさせられる映画だった。この作品を観ている最中から「う～ん」とうなってしまった。とにかく抜群にうまい映画作りなのだ。それはテクニックの問題ではない。この作品の扱うテーマ、その「こころざし」の高さ、この作品の方向付けが見事なのだとも思う。

まずは主人公ウォーリーをみていこう。

外見は実にへんてこである。足はキャタピラだし、胴体は何の変哲もない四角形。頭はなく、代わりに双眼鏡の出来そこないの様な二つの目を持っている。決して美しくはない。可愛くもない。

さて、このカタチでどう感情表現を現すのか？

監督をはじめとするスタッフ達の見事な仕事で、この無機質なロボットは実に愛おしく切ない演技をするのである。

あえてぜんぜん魅力的ではない、不格好なキャラクターを設定しておいて、それを「表情豊かに表現する」と言うことに挑戦したのだ。この仕事はほんとに素晴らしいの一言に尽きる。そうなのだ。この作品が素晴らしいのはあらゆる設定がもう見事というしかないのである。ウォーリーの恋人役のロボット「イブ」もそうだ。「彼女」はウォーリーよりも更に無機質で、何の面白みもない流線型のボディをしている。

彼女は時には恐ろしい破壊力を持ったロボットでもあるし、機能不全に陥ったウォーリーを助けようとする、やさしい心遣いもするロボットなのである。そこにはすでに愛情表現とさえ言えるものを感じさせる。そういう多様な表現をシンプルな流線型のロボットが表情豊かにやってのけるのだ。

地球から逃げ出した人間達の設定も絶妙で、描き方も実に的を得ている。進化の過程からみれば、たった何百年という時間の間に、人間の肉体は大きく変化して描かれている。足は弱り、体は醜く肥満し、シート型の移動装置がなければ何も出来ない生き物になってしまっている。

笑いたくなるような、情けない姿だ。

だが、笑えない。

というのも、今の我々は移動には車がないと何も出来ないと思っているし、ネットの情報に依存し、食事はファーストフードという有様である。人間は自ら作り出した加工物に囲まれていなければ、生きていけない生物に、すでに「進化」しているのだ。

映画の冒頭、ウォーリーはいつもの通り、廃棄されたゴミを処理する。これは彼を作った人間達から、何百年も前にプログラムされた通りに動いているに過ぎない。

何せ地球はすでにゴミの星となり、人間はすでにこの星を見捨てたのである。残されたロボットのウォーリーは、黙々とゴミをプレスしてブロックにし、それを綺麗に並べていく。

ロボットの彼に感情はない。

だからこの仕事に意義があるとか、やりがいの有る無しとか、無駄だとか、辛いとは思わないのである。そんな彼の仕事ぶりは、観客の目で見ると、コミカルな動きもあって愛嬌たっぷりだ。しかし、なんとむなしく、悲しい作業なのだろう。

命令を下した人間はすでに彼を見捨てたのだ。

だが、ゴミをスクラップにして並べろ、とプログラムされた命令は何百年も「無責任に」生き続けているのである。

これはロボットのウォーリーにとって悲劇以外の何物でもない。

僕の大好きなチャップリンはかつてこう言った。

「私は悲劇を愛する。そこには何か真理があると思うから。」

今、人類が悲劇的状況の未来へ向けて歩んでいるのは、大変皮肉なことだが、喜劇の材料なのかもしれない。

けなげにはたらくウォーリーの姿は、その人類に静かに警告を発しているかのようである。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 アンドリュー・スタントン

主演 ベン・バート、エリッサ・ナイト

製作 2008年 アメリカ

上映時間 103分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=Y-9NvrOkCBc>

ジュリー&ジュリア

ジュリー&ジュリア

2009年12月17日鑑賞

もう少し濃いめの味付けでもいいかな

監督のノーラ・エフロンは、女性監督として最も成功している一人だろうと思う。

彼女のすごいところってなんだろう。

この映画を見て少し考えてみた。

キーワードとして、「共感」とか「等身大」という言葉がぼんやり僕の頭に浮かんだ。

彼女の作る作品は、やはり女性にとって、とても共感できるものであろう。

彼女の作品に登場する人物は、どの人も身近にいる、という感じがする。

また登場人物の抱えている問題もとても共感を覚えるのだ。

「私もおんなじことで悩んでるのよ」といいたくなる。

それを題材にして映画を描く。

だから決してドラマチックすぎることはない。

俳優たちも普段着の演技でいい感じだ。きっと演技していて楽しいのではないかと思う。

実際、今回の主役の一人、メリル・ストリープの演技は見ているこちらまでハッピーな感じになる。

役者が面白がってやっている感じが伝わって来るのだ。

同じ監督のコメディタッチのラブストーリー「ユーガットメール」が僕は大好きだ。

この作品はラブコメの王道であり、いまや定番とも言える。

あの物語も決して大げさではないし、ドラマチックなものでもない。

だが、今までメールだけでやり取りしていた二人がいざ、会おうということになるあたりの、ドキドキ、ワクワク感、その演出が実にうまいのだ。

この二人どうなっちゃうんだろう、うまくいくといいんだけどと、要らぬおせっかいを焼きたくなるぐらい、登場人物に感情移入してしまうのだ。

本作はどうだろう。

ジュリーとジュリアの物語が交互に描かれていく手法だ。

いまどきのサスペンス映画にありがちな、時間軸がぼんぼん飛んでしまうような編集ではない。

あくまで観客が見やすく理解しやすいように編集されていて

僕はとても好感の持てる編集だった。

ジュリーのほうはとても平凡な主婦である。

仕事をもち、旦那とは共働き。

友人たちとの食事の席がおもしろい。

友人2人はバリバリのキャリアウーマンなのだ。

電話一本で何億円という商談をまとめたりする。

「住む世界が違うのよね」とがっかりもするし、自分だって少しは注目されてみたいと思う。

そこで彼女はブログをはじめるのである。

ジュリア・チャイルドのレシピを全部作ると宣言してしまう。

ロブスターと格闘したり、かもの骨抜きにも挑戦したりする。

悪戦苦闘しているうちに、やがて彼女は注目され始めた。

ブログの読者が増え、やがて新聞までもが彼女を取材するまでになる。

このあたりの爽快感はいいねえ。

作品全体としては実話という事もあって、脚色しにくいのかもかもしれない。

欲を言うともう少しひねりを効かせてほしかったところだ。

料理で言うところちょっと塩味とスパイスが足りない気がする。

あくまで僕の好みだけど、もう少し濃い目の味付けでもよかったんじゃないかな？

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ノーラ・エフロン

主演 メリル・ストリープ、エイミー・アダムス

製作 2009年 アメリカ

上映時間 123分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=ONQJiGhtXew>

アバター

アバター

2009年12月24日鑑賞

3D映画は第二世代に入った

あくまで僕の個人的な感想なんだけど、とても空しい気分になる映画なのです。

これは要するに、よその星の資源を人類が略奪しよう、という映画です。

未来の地球はすでに資源もなくなり、人類にはとても住みにくい星になっている。

そこでよその星に行って、その資源を人間のものにしようとする訳です。

ところがです。その星には知的で、人類に似たその星の「先住民」がいるのですね。

彼らにはテクノロジーはありません。

彼らは星の中心的存在である、大きな木を心のよりどころにしている。

それは原始宗教でもある訳です。

そこへ、人類が作った人造人間「アバター」を使って人間達が乗り込んでいく。

略奪の限りを尽くしていく。

これって今地球で起こっている問題、そのままの縮図でもあるんですね。

アメリカ国民はかつて先住民である、アメリカインディアンを駆逐しました。

また、9・11に象徴されるイスラム勢力とキリスト教勢力との反発がある。

一神教と一神教との出会いというものは往々にして、とても不幸な道筋をたどっていく訳です。

本作品では「森」や「木」や「空飛ぶ竜」、それにまたがって飛ぶ先住民の姿などに、宮崎アニメの影響が色濃く感じられます。

とくに「千と千尋の神隠し」に出てくる様なキャラクターとか、「となりのトトロ」に出てくる森の大木ですね。

ただ、宮崎アニメは、やはり日本の多神教をベースにしているのです。

何しろ日本には「八百万（やおよろず）の神」と言って、いたるところに神様が宿るという世界観を持っているのです。

それがいい、悪いとかではないと思いますし、正しい、正しくないという判断を下すのもおかしいでしょう。

要するに日本の場合、自然には人間は謙虚であるべきだ。そしてそこに神様が宿っているなら、そっとしておこうという雰囲気があります。何より、神様が数々存在するように、善悪も多様な解釈をしてきているともいえるのです。

今まで日本人はそう言うメンタリティーでやってきたと思うのです。

ところが欧米の場合、善は「絶対的に善」であり、それと正対するものが「完全な悪」であるということになります。

それは実は鏡に映した左右逆転した自分。それこそ、まさにアバターなのではないでしょうか？ 鏡の向こうに映る姿を悪であるとし、こちら側の自分を善として正当化する。

それから何が生まれるというのでしょうか？

鏡の向こうの姿を傷つけ攻撃したけれど、結局一番傷ついたのは自分自身なのかもしれません。そういう意味で「アバター」というタイトルは大変象徴的だと感じます。

なんだかとても哲学的な話になってしまって申し訳ないですね。

こういうことを考えたりすること自体が僕の趣味なんでね。

さて、映画としてみた場合、本作での3D。その圧倒的な奥行き感は未体験ゾーンです。アトラクションとしてのおもしろさも抜群な作品であると思います。

おそらくこの作品を境にして3D映画は新たな「第2世代」に入ったのではないかと予感させる、素晴らしい完成度の作品であることは間違いありません。

これが本当に遊園地で遊べる様な、「あ～楽しかった」と言える、ただの楽しいアトラクションであれば、それにこしたことはないんだけど。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ジェームズ・キャメロン

主演 サム・ワーシントン、ゾーイ・サルダナ

製作 2009年 アメリカ

上映時間 162分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=qYe-ncx3rVE>

戦場でワルツを

戦場でワルツを

2009年12月27日鑑賞

整然と描かれるカオス

アリ・フォアマン監督自身の体験を基にした、ドキュメンタリーでありながら、アニメーションという手法をとる映画である。

この映画を観賞するには、ある程度予習しておいたほうがいいと思った。僕は全く予備知識なしに見たのだが、やはりレバノン内戦や、イスラエル軍がどのようにかかわったのか？ そしてそこで起こった虐殺事件なども一応押さえておいたほうがいいと、鑑賞した後になってから気づいた。

レバノン内戦に従軍したアリ・フォルマン監督は、当時19歳の若者だった。

だが、あの時のことをほとんど覚えていない、ということが気になった監督は、戦友たちのもとを訪ねてゆく。あのとき、戦場で何が起こっていたのか、もう一度、確認しようと思いついたのである。

激しい戦闘、もう思い出したくない状況をなぜ、あえて思い出そうとしたのか？ 封印できるものであれば、そのまま封印してもよかったのではないだろうか？

普通の人間ならばそうしただろう。

ましてや戦争という状況である。

自分自身も人を殺しているかもしれないのだ。

しかし監督はそこに目をそらさなかった。

それは自分自身が何者であるのか？ また、自分はどのような立場にいる人間なのか？ そういった「アイデンティティ」の確認作業なのだろう。

そうしなければ自分の人生にけじめがつけられなかったのかもしれない。

表現行為を行う人間というのは、時にこういうまわりくどいことを、あえてやるものなのだ。

かっこつけているかもしれないが、僕もそういう回りくどい人間だ。

今年職場で僕と共に働いていた若い男が自殺した。

仕事に行き詰っていた感じが、はたから見ても分かった。

僕は食事に誘ったが、彼の都合がつかずそのままになっていた。

「誘ってくれてありがとうございました」と

彼は僕に自分の名刺を一枚くれた。

その数日後、彼は命を絶った。

何もしてやれなかった自分自身をふがいなく思い、僕は自分を責めた。その思はいまだに消えずにいるのだ。

何かの形で昇華していかないと、こういう心の傷はいつまでも癒えない。

僕は幸い文章を書くという行為が好きなので、こうして映画レビューの中で、自分なりの精神の

マスターベーションによって、自分自身を癒し、自己治癒しようとしているらしい。
だが、この映画を作ったアリ・フォルマン監督は、決してマスターベーションに終わっていない。
この作品を世に問うことで、体験を一般の人にも分かる形で提示した。
一見稚拙とも思えるアニメーションであるが、よく見ると、まるで影のあるフランスのギャング映画のような雰囲気さえ漂わせている。
暗闇の中で照明弾が放たれる。明と暗、生と死
あっけなく兵士たちが死んでいく。
自分たちは何の作戦に従事しているのか
何のために戦うのか？
そんなものはさっぱりわからなかった。
上官でさえ、命令系統は気分次第で変えられているような雰囲気があり、現場は混乱ばかりしている。
その中で兵士は”ワルツを踊るかのように”機関銃を乱射する。まるでバレエのピルエットのようにくるくる回転しながら。
そのような混沌としたカオスの状況を、かつての戦友にインタビューする形式でこの作品は整然と物語をかたっていく。今まで、見た事の無い、そのアニメーションは、その表現の可能性をさらに押し広げた。強い印象と余韻を残す作品である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆
配役 ☆☆☆☆
演出 ☆☆☆☆☆
美術 ☆☆☆☆☆
音楽 ☆☆☆☆
総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 アリ・フォルマン
主演 アリ・フォルマン
製作 2008年 イスラエル／フランス／ドイツ／アメリカ
上映時間 90分
予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=jek5Wo7nNPo>

2008年2月5日鑑賞

人生の天気図、今日のあなたは?

「いい映画観たよなあ〜」映画館を出た後も、じ〜んとした余韻が残った。

なかなか出会えない映画を観た気分である。

3つのグループのストーリーが同時進行する人情劇である。映画というのはいいい脚本、それに合わせた的確なキャスティング、これがうまく行けばおおよそ8割ぐらい成功したも同じだ。この映画はそのセオリーを見事に証明した。

第1のグループは、かつてお笑い芸人だった母の相方を捜す若い女（宮崎あおい）とパチンコ依存症のバス運転手（岡田准一）である。

宮崎あおいは言わずと知れた、既に大女優である。

彼女を使いきれぬ監督を僕はまだ観た事がない。

監督が一体、彼女のどの部分を選択したらいいのか？

迷ってしまうぐらい、ルックス、演技力、アイドル性、カリスマ性、とてつもない才能に恵まれている女優なのだ。

それをほとんど無名に近い監督が見事に使いきった事に、驚愕した。

それも彼女の出るカットは、3グループを描くので、当然約3分の1しかない。

ところがだ。

宮崎あおいという女優の魅力を、この監督は知り尽くしているかのようだ。

彼女の最も”おいしい”部分を観客に提供してくれるのである。

岡田君に関しては中年男の偏見か、単なるイケメン俳優としか見ていなかった。ところが.....

こんな表情できる俳優なんだねえ。感心しました。

第2のグループ。

このキャスティングがまた絶妙なんだよね。

ホームレス仲間から慕われているカリスマホームレスを、西田敏行が演じている。更に、会社で中間管理職にありながら、人生に疑問を感じ、カリスマホームレスを人生の師匠と仰ぎ、なぜか休暇中にホームレス仲間になってしまう男を三浦友和が演じている。

西田敏行さんに関しては、ここで語る事はもったいないぐらい名演技を披露してくれている。ぜひ本編でじっくりごらんいただきたい。

さて、三浦友和である。

このひと、「ALWAYS・三丁目の夕日」以来、この年齢でまだまだ進化し続ける俳優となった。

20年前なら、単に山口百恵さんのダンナ、と言う一言で片付けられていた人だ。

今は違う。

団塊の世代となった三浦友和は、人生の方向に迷う、中高年を演じさせたら、もう彼の独壇場と言える。

先日観たオダギリ・ジョーとの共演「転々」もすばらしい演技だった。

第3のグループは秋葉系アイドルを、追いかける若者3人である。

後に第1のグループと第2のグループは、実に奇妙な縁で複雑にかかわり合っていく事になる。
ところがこの第3のグループだけが、他の2つのグループと関わりを持たない。

このあたりも今の若者の、人と人との関わりを代弁しているようで興味深い設定である。

人生晴れるときもあれば、どしゃ降りときもある。

あるときはまったりと花火を見上げる夜空もある。

本作はカメラワークや、編集も見事であり、それを最終的に決定するのは監督である。

その力量は非凡である。

今後の作品が楽しみな監督が、

また一人増えた事になる。

—追記—

これだけの作品の原作となった「劇団ひとり」の文才もまた非凡である事は言うまでもない。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

作品データ

監督 平川雄一郎

主演 岡田准一、宮崎あおい、伊藤淳史

製作 2008年

上映時間 129分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=bIWYFKyCqYk>

2008年2月10日鑑賞

蒼井優、おまえはいったいだれなんだ！？

(この作品はDVDで鑑賞)

はっきり言って空恐ろしいマンガである。

蒼井優のダークサイドを聞いたからである。

彼女はこの映画でシロと言う役柄の声優を演じる。

声だけの出演だからここまでの表現が出来たのか？

いや、それとも本質的に、いともたやすくこのような、声だけの演技が出来る”アクター”であったのか？

岩井俊二監督が「自分の物差しで測れない女優」と位置づけた蒼井優。

彼女の共演者達は貴重な体験をした事になる。

なぜなら、彼女が、人間としての蒼井優、その本性を剥き出しにした瞬間をまのあたりに出来たのだから。

観客には残念ながら、シロという仮の姿でしか、うかがい知ることができない。

この物語は、「宝町」と言う架空の場所（昭和30年代と現代と韓国や上海のような都市をこった混ぜにしている。）を舞台に、シロとクロと言う兄弟と、宝町を支配しようとする、ヤクザ達との戦いを通して人間性を獲得する、と言う物語である。

シロは知恵おくれの子供であるが、飛び抜けた直感力と、大胆な行動力を持つ。

時には、対立するヤクザを平然と焼き殺す、残虐性すらもっている。

それは憎しみと言うよりも、自己と兄であるクロを守ろうとする

動物としての人間の本能的な作用である。

クロを演じるのは二宮和也である。彼の声だけの演技は、本作前半部分ではそれほどのものを感じない。しかし終盤になって、彼にキャスティングした事が正解だとおもえる。

他にすぐわかったのが、ヤクザの「ネズミ」を演じる田中泯さんである。

「メゾン・ド・ヒミコ」以来すっかりこの人のファンになったが、声だけでも圧倒的な存在感である。

精神科に現在も受診している身から言えば、これは有名な精神科医、斉藤先生言うところの「セカイ系」の典型とあっていい。

混沌としたカオスのエネルギー溢れるアジアの一地域である日本。

さらにその一部分である東京の宝町、このドブの匂いが漂うような腐敗した街に住むシロとクロ。

時にそのストーリーはいきなり宇宙空間に飛ぶことさえある。

だが、自己と向き合うとき、それはありえる話である。

個人的な話で申し訳ないが、たったひとりの部屋で、嘔吐しまくった事がある。

頭はガンガンしている。床の上にぶっ倒れた。

もう胃の中には吐くものがない。

それでもなお吐き続けた。

自分の頭の中で何か重大な異常が起きている。

そう認識した。

自分の嘔吐物にまみれながら、床上1メートルの高さにある電話の子機を見上げた。アレがとれれば119番できる。

救急車が呼べる。たかが床上1メートルが何キロ先にも見えた。

そのとき僕は”たったひとりのアポロ13”だった。

地球で待っていているはずのNASAは誰ひとり待機していない。

そして僕はたったひとりのアパートという宇宙空間で、アポロ13の爆発事故を体験してしまった。

ハッチのような部屋のドアを閉め、外のセカイと途絶すれば、もうそこはいつ、どんな状況でも、たとえ家族が住む家であっても

”たったひとりのアポロ13”になり得る。

幸いにも僕は、何とか自力で救急車を呼び、適切な治療を受け、たったひとりで地球に帰って来れた。

なぜ自分ひとりで地球に帰ってこられたのかは今だに分からない。

なぜ、自分が今だに生かされ続けているのかも分からない。

今まで何度も死線をさまようような体験をしてきた。

それでも神の意志と言うしかないような、ぶざまな生き返り方をしてきている。

蒼井優の声には、僕のそのような体験を告白させるだけの力がある。

最後に彼女に質問したい。

「おまえはいったいだれなんだ!？」

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 マイケル・アリアス

声優 二宮和也、蒼井優、伊勢谷友介

製作 2006年

上映時間 111分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=y4ZPnPbSb2Q>

百万円と苦虫女

2008年7月18日鑑賞

それより、あの弟は心配だよ

はじめて蒼井優が、映画の「オイシイ部分」を共演者に持っていかれた作品である。

もちろん、それは森山未来君である。

バイト先で初めて出会うシーンから、やがて恋愛感情が芽生えるまで.....

そしてさりげなく手をつなぐ瞬間の映像。

これはほんとにすばらしかった。

正直この作品にかなり期待していた。

何せ脚本監督タナダユキ、蒼井優の組み合わせである。

しかしながらだ.....

いくら蒼井優が名演技を見せるといっても、さすがにしんどかった。

というのも、主人公の女性は、アルバイトで100万円が貯まるたびに、転居を繰り返す女性である。

海の家バイトも、桃農家でのバイトも、それぞれのエピソードは結局ぶつ切りであり、それ以後の彼女の心情や、行動に何かの変化を与えるということがない。

また、その後のストーリー展開の伏線ということもない。

要するに必然性がないのだ。

むしろ気になるのは主人公の弟である。

彼は学校でいじめに会っている。

その様子は徐々にエスカレートしているようだ。

弟は姉に対して「自分は負けない、いじめと立ち向かう」と決意表明のような手紙を送るのだが、実はその後がとても気になるのだ。

かなり悲劇的な結末を迎えてもおかしくない状況まで行ってしまっていると感じたからだ。

姉と弟との関係をもっと密に描いてくれていれば、また違った展開と、強力な説得力を持つ映画になったはずであり、

本作はその点が、なんとも残念。

やや散漫な男と女のラブストーリーなど、タナダユキなら書かないと思っていたのだから。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 タナダユキ

主演 蒼井優、森山未来、ピエール瀧

製作 2008年

上映時間 121分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

崖の上のポニョ

2008年7月22日鑑賞

これで最後じゃないでしょう？ 宮崎監督！

「もう長編はこれが最後でしょう。」

と宮崎監督は昨年テレビの取材で言っていた。

しかし、もしそれが本当なら、

僕はこの作品で最後というのは寂しくて仕方がなかった。

かつての宮崎アニメにはあふれるような多様な解釈ができた。

いわゆる世界観の豊かさだ。

それがこの作品では物足りない。

やや先細りの感じがしたのだ。

まさか、これがいわゆるアイデアの枯渇！？

それで「ジ・エンド」なんて、そんなこといわないでよ。

ファンの一人としてほんとに悲しいのだ。

確かにポニョのキャラクターとしてのかわいさは抜群だ。

パステルのような背景画もいい。

「千と千尋の神隠し」に代表される、極限とも言える緻密さから、あえて稚拙とも思えるような、単純な線描へシフトしたのも魅力的だ。

それなのに、これらの題材を動かしうる「根っこの部分」「宮崎映画の哲学」とでもいえるものが、圧倒的に不足しているように感じたのだ。

「となりのトトロ」や、「千と千尋の神隠し」にしても、

本来人間が触れてはいけない部分であるとか、世界の中での自分のちっぽけさとか、人間の心の成長とか、あらゆるテーマを「これでもか！！」と盛り込んで、なおかつ見事なストーリーの統合を見せていた。

また、宮崎監督自らの趣味を前面に押し出した「紅の豚」のダンディズムには酔いしれた。個人的にジブリで最も好きな作品だ。

さて、「崖の上のポニョ」は、夏休みお子様向け映画としては間違いなく成功するだろう。

しかし、かつてのコアな大人ファンを巻き込むことまで、果たして期待していいものなのか？

その疑問を解決するためにも、ぜひあなたの目でお確かめいただきたいと思う。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 宮崎駿

主演 山口智子、長嶋一茂、天海祐希

製作 2008年

上映時間 101分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=OxkNy9IfuWY>

闇の子供たち

2008年8月25日鑑賞

地図上20センチ向こうの命

公園のネコに、ご飯をあげていたときの事、蚊に手を刺されたので、バシッと蚊を叩き殺した。ずいぶん僕の血を吸っていたので

赤い血が僕の手の甲ににじむ。蚊の死骸と一緒に。

その血塗られた手から、カリカリを食べる公園ネコ。

僕はそれをかわいいと感じる。しかし、目の前のカリカリを無心に食べているネコもひとつの命。せっかく、まんまと僕の血を吸えたのに、叩き殺されてしまった一匹の蚊。これもまたひとつの命。

思考実験をしてみよう。

蟻一匹と、蚊一匹の命はどちらが重いか？

野良猫一匹の命と、家族として飼われている愛玩ネコ一匹の命はどちらが重いか？

さらには、ホームレスの命と国家元首の命はどちらが重いか？

公園ネコの保護ボランティアを始めた僕。

それ以来、命の重さという事をずっと考えている。

そのかわいいネコ達が食べている、カリカリでさえ、かつては、魚という一つの命であった訳だ。

人間の貪欲とも言える経済活動の発展と、地球の維持は、決して両立しない、という事は最近、誰もが感じている事だろう。

地球を一つの生命体と見たとき、人間などという生物種は、いつ絶滅しても、地球は何にも困らないのだ。

むしろ地球にとって喜ばしいのかもしれない。

これは事実だ。

ミクロの視点、マクロの視点。

ミクロの命、マクロの命。

だが、もう一つ種類分けをしてみよう。

地域の命だ。

この映画「闇の子供達」で描かれるのは、タイという地域での、子供達の悲惨な日常である。幼児売春や生体での臓器移植。

「地図で言えば東京から20センチさ。」

という主人公の新聞記者。

その20センチの地域差に、思いを馳せる事が出来ないわれわれ。

だが、ぼくはおもう。この映画を見たからと言って、それが免罪符になるとは思わない。

他の人より、子供達を救おうという気持ちがあるなんて、口が裂けても言えない。

ただ、映画人である阪本監督は、この映画を作った。

そしてボクたち、映画好きにできる事は、映画館に足を運び、実際に自分の眼で、映画を見る事である。

免罪符なんか求めなくてもいい。自分に言い訳なんかしなくてもいい。

自分の惨めな欲望は、持っていて当たり前だ。

それをスクリーンで再確認するのだ。

子供の心と体を傷つけ、商品、「モノ」としてあつかう人間がいる事を。

本作のような映画を見るという行為は、大なり小なり、本来人間は罪深い存在であるという事を自覚する作業でもあるのだ。

実に小さな関わりなのかもしれないが、地球に住む「人間一匹」を自覚する作業なのだと、僕は思う。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 阪本順治

主演 江口洋介、宮崎あおい、妻夫木聡

製作 2008年

上映時間 138分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=ETXTNKYtFiA>

グーグーだって猫である

2008年9月6日鑑賞

犬童目線の「グーグー」である

大島弓子さん原作の「グーグーだってネコである」が映画になるというので、ネコ好き、大島弓子ファンの僕としては、見逃せない作品でした。

早速劇場にて映画を観て参りました。今回、犬童一心監督自らが脚本も手がけてます。言ってみれば、犬童監督がフルモデルチェンジさせた「グーグー」なんですね。

逆説的かもしれませんが、犬童監督の目線のいいところは、グーグーと言う「ネコ」にウエイトを置いていない事です。映画の主題からみれば意外かもしれません。しかし、動物というのはその存在自体が、人間の役者などと比べてあまりにも強烈で、人間の想像以上の予想外な動きをするので、ある意味、素人が撮っても絵になる訳です。

犬童監督はそれに甘えませんでした。

原作ファンにはちょっと残念かもしれませんが、グーグーよりも、主人公である天才漫画家、麻子さんや、好青年、青白くんだりアシスタント達との人間関係に、ストーリーのウエイトが置かれているのです。

本作を見て、犬童監督は想像以上に上野樹里という女優を評価している、大切な存在と感ぜるよう感じましたね。

彼女の役柄は主人公の漫画家、麻子さんのアシスタント役。

原作ではこのアシスタント、大島さんの病気に密接に関わって、いらぬお節介を焼いたりします。また、大島さん入院中にグーグーがアシスタントの彼女にやたらとなつてしまい、大島さんは嫉妬心さえ覚えたりする場面もあります。

このあたりは結構面白い部分なので、原作に忠実に作ってもよかったですのでは、と思うところですよ。

しかしながら他のジャンルで原作がある映画作品というのは、原作とは全く別物として評価してあげるべきでしょう。

かたや、マンガであり、それをもとに映画化した訳ですから、表現方法そのものが違います。音楽面では大御所、細野晴臣さん起用ですが、残念ながら厳しい採点をしなければならないでしょう。

また、映像面でも、ほとんどプロモーションビデオの延長とでも言うべき映像ですし、作中に出てくるアコースティックデュオも、ほとんど新鮮味もなく、やたらウザッタイ感じが残りました。

「メゾン・ド・ヒミコ」での極めて完成度の高い映像と、細野さんのみずみずしい感性の音楽。あの感動の再来はいつになるのか？

次回作に期待したいと思います。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 犬童一心

主演 小泉今日子、上野樹里、加瀬亮

製作 2008年

上映時間 116分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=iRIBIQrLtTc>

おくりびと

2008年9月24日鑑賞

エンドロールまで居心地良かった

なぜだろう、とても居心地がいい、佇まいがいい映画だ、と感じた。音楽もいいなあ〜と思ったら、久石譲氏だった。

この作品、コミカルなシーンと、亡くなった人を見送る、人間の死に向きあう、という荘厳さを、絶妙のバランスで見せてくれる作品である。

これはベテラン、山崎努の円熟した演技が、画面全体にある種の緊張感を与えている事も大きいと思う。

それに何気ない事だけど、僕はこの映画で使われた主人公の実家、そして納棺師の事務所。これらのセットの雰囲気、僕のツボに見事にはまった。

昭和30年から40年頃に建てられたであろう建物の雰囲気が、

その壁から古くさいホコリの臭いまでするようなのだ。

こんな雰囲気のあるセットは早々出来るもんじゃないと思う。

実際にある建物なのだろうか？

これら、美術面でのスタッフの頑張りが、この作品の佇まいの良さを生み出しているのだ。

葬儀というのはあらゆる作法や儀式を材料とした、ごった煮みたいなものだ。

本作はその中の「死者を棺に納める」という一点だけに集点を絞った映画だ。

あの世への旅路のお手伝いするのが納棺師である。

死者に死化粧を施し、体を清め、衣装を身に着けさせ、棺へ納める。

その所作には、何か、茶道や、生け花と言ったものに共通する美しさがある。

その所作の美しさにハッとさせられる。

死んだ人間を手厚く葬るというのは、実は人間しか出来ないのだ。死んだ人を大切に扱うこと。

それは本来人間が持っている、最も美しい美徳の一つなのかもしれない。

生きている自分たちは、日々、殺伐とした日常を送っている。

だけど、時にはこういう映画を観て、この世を去ってゆく人に思いを寄せ、静かに厳かに見送る

。

なぜか不思議な程、心が落ち着いている自分に気がつくのだ。

それはある意味、今日を生きる自分を大切にすることなのかもしれない。

なお、木本氏の美しい所作が演じられるエンドロールは最後までお見送りください。

今のところ今年一番の秀作映画。おすすめです。

合掌。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 滝田洋二郎

主演 本木雅弘、広末涼子、山崎努

製作 2008年

上映時間 130分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=MOar08f-OnI>

パコと魔法の絵本

2008年10月2日鑑賞

パコはガマ王子をわすれない

カラフルな映像がとても印象的だったですね。

それになんと言っても役所さんの「クソじじい」が、とてもよかった。

映画を観ながらおもいだしていたのは、黒澤監督の「乱」での仲代達矢さん。

今回のクソじじいと実はそっくり。

多分、中島監督も敬意を表して意識的に似せたのでしょう。

金も地位も権力も手に入れたけど病院に入ってしまった、傲慢なクソじじい役を、役所さんがとてもペーソス溢れる人物に演じ上げていました。

それにパコちゃんはこの子しかいない、というぐらいキャスティングがハマってましたね。

中島監督と相性がいいのでしょうか、「下妻物語」のときもそうだったけど、土屋アンナのキャラクターが見事に光ってました。

決して子供向けという訳でなく、むしろ大人のためのファンタジーという味付けの物語です。

1日しか記憶が持たない少女に、記念の一日をプレゼントしたいと言いだしたクソじじい。

彼の心を揺さぶるほど少女の存在感は説得力がありました。

クソじじいは、彼女と出会って、初めて人間らしい感情を持ちました。

そして明日も自分の事を覚えておいてほしい、と願いました。

たとえ富と権力を持っていても、少女の記憶の中に残る事は出来なかったのです。

劇中劇でガマ王子役を演じるクソじじい。

ラストは意外な結末となります。

とてもハートに響く物語となりました。

僕は前作、「嫌われ松子」よりも圧倒的にこっちの方が好きだなあ～。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 中島哲也

主演 役所広司、アヤカ・ウィルソン、妻夫木聡

製作 2008年

上映時間 105分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<https://www.youtube.com/watch?v=6G0gPxXvNBw>

ハッピーフライト

2008年11月14日鑑賞

矢口マジックで、良い空の旅を

いまだにあのでかい鉄の塊が、何で空を飛ぶのか？ 不思議でしょうがない。

それが毎日、何の事故も起こさず”いともやすやすと”飛んでいるように見える。

実はその”いともやすやすと”思わせるために、多くの専門スタッフが働いているのである。

矢口監督の前作「スウィングガールズ」では、ど素人の高校生たちがジャズバンドを組む話。

そして最新作「ハッピーフライト」はなんの話？

なんでもない。

ただ、飛行機が「離陸して」「着陸する話」である。

なあ～んだ、たったそれだけなの？と思うなかれ。

それはネタばれになるから書かないが、その着陸するだけが、いかに難しいことなのか。

103分の間、ハラハラドキドキのしっぱなしなのだ。

実はこの映画、コメディーだけではなく、航空パニック映画としても実によくできている。

しかもそれが、いつ起こってもおかしくない状況であることも、映画を見た後、ハッと気がつくのである。

そんな具合で、実によくできた映画である。

実際にANAの機体を借りて撮影されたそうだが、さすが、ジャンボ機の迫力はすごい。

機体の美しいフォルムや、内部のメカニズム等、航空おたくファンにはたまらないだろう、というシーンがいくつもある。

僕は矢口監督のスウィングガールズで、無理やり映画ファンにさせられてしまった人間だ。

ウォーターボーイズもスウィングガールズも、出演者はほとんど無名に近かった。

それをオーディションで矢口監督は決定した。

結果はご覧のとおりである。

妻夫木聡、玉木宏、上野樹里、貫地谷しほり、などが大ブレイクを果たした。

キャラクター発掘の天才ともいえる矢口監督が、次回作ではどんな新人を大ブレイクさせるのか？

それが大きな楽しみだった。ところが……なんと……。

その期待はいい意味で大きく裏切られた。

今回の作品だけは、実績のあるプロの俳優たちを使ったのである。

しかもそれもオーディションであるそうだ。

今回の「ハッピーフライト」という作品の秘密はそこにある。

映画で描かれる人たちは、旅客機を飛ばすためのプロフェッショナルたちなのだ。

それを表現するのに、何の実績もない、アマチュアに毛の生えた役者をつかう必要はない、と矢口監督は決断した。

前2作の成功法則を自らかなぐり捨てた。

矢口監督をご存知の方は多いと思うが、風貌は、メガネをかけたややオタク系の気の弱そうな感じの万年青年に見える。

ところがである。

いざ、映画を作るとなると、この人はプロ意識をむき出しにするのだ。

映画に対して外見とは真逆の熱血漢であり、その熱意は時に暴走さえするときもある。

スウィングガールズでは、そのプロが作ったとあえて思わせない「さりげなさ」が魅力のひとつだった。

たとえ冒頭で使われる曲が5拍子という、変拍子でもそれに気がつく観客はあまりいない。

坂道を縦に回転しながら転げ落ちる自転車や、廊下をゆっくり転がるレコード盤を撮影することが、どれほど困難なのかは、メイキングを見ないとわからないことだ。

音楽面はど素人の役者たちは、涙を流しながら3カ月の楽器の特訓に耐えた。

軸のぶれた並の監督ならば「映画を作る仲間たちは、こんな大変な体験をして映画を作ったんですよ」ということを”作品中”で表現してしまうだろう。

矢口監督はそれをしない。

一切軸がぶれないのだ。

スウィングガールズは、おバカテイスト、B級テイスト溢れる、愛すべきエンターテイメント映画であり、汗と涙のど根性映画ではないのである。

「ハッピーフライト」をずばり言ってしまう。

これは「汗と涙のプロフェッショナル物語」なのである。笑いはほんのスパイス程度に入っているだけだ。

なぜなら鳥一匹、スパナ一本がエンジンに紛れ込んだだけで飛行機は墜落する危険がある。

墜落させないために必要なのはプロフェッショナルなのだ。

そして旅客機は今日も空を飛ぶ。”いともやすやすと”だ。

映画「ハッピーフライト」も、いともやすやすと作られたかのように見える。

それが矢口マジックであり、矢口監督がプロフェッショナルであるからに他ならない。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 矢口史靖

主演 田辺誠一、時任三郎、綾瀬はるか

製作 2008年

上映時間 103分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=tNrAJ2UCGUg>

ブタがいた教室

2008年11月18日鑑賞

Pちゃんに出会えてよかった

今年（2008年）一番の問題作と言っていいと思う。

ブタのPちゃんにやられてしまった。

こんなにかわいいなんて。

ブタをクラスのみんなで育てて最後に食べよう、と言う教師の提案。

とんでもない提案だと子供でも思う。

うんちやおしっこ世話もしなければ行けない。

そんなの触れるわけないじゃん、と誰もが思った。

転校生がひとり、このクラスに混じっている。

考えてみればPちゃんだって、このクラスの転校生なのだ。

ただ、人に食べられる運命のブタに、たまたま産まれたというだけの話。

でも、転校生はPちゃんを抱いてみた。毛がごわごわしてる。心臓がドキドキしてる。

Pちゃんと散歩した。トマトが大好物だと分かる。

夏は花火をPちゃんと見た。

台風のとときは、Pちゃんの小屋が壊されないように、みんな必死に守った。

いつのまにかPちゃんは、皆のクラスメートになっていた。

でも、最初の先生からの提案は、どうしよう。

「大きく育ててみんなで最後に食べよう！！」

できるわけないじゃん、だってPちゃんは、クラスメートなんだよ！

議論を始める子供達の真剣な目。

Pちゃんの命は自分たちの決断にかかっている、という現実を

子供達は突きつけられていく。

議論は平行線。子供達は悩みに悩む。

その間にもPちゃんは、どんどん大きく育っていく。

ちょうど食べごろのブタに育っていくのだ。

その残酷な現実。

この映画、久々に胸にグッと迫ってくる作品だ。

何より子供達の真剣な表情に、心うたれる。

たった一つの命を巡って子供達がどう悩んだのか？

その貴重なドキュメントでもある。

子供達は、まっすぐに命と向き合っている。

怒ったような真剣な目に涙がこぼれ落ちている。

一つの命を生きるという事、一つの命を育てると言うこと。

子供達と一緒に考えてしまう自分に気づかされる。

この映画と出会えて、よかった。

Pちゃんと出会えてよかった、と思える貴重な作品。

出来れば何年かかってもいいから、全国の小中学校でぜひ巡回してほしい作品である。

貴重な命の授業として。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 前田哲

主演 妻夫木聡、大杉蓮、田畑智子

製作 2008年

上映時間 109分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=C9BKVBBpQ74>

誰も守ってくれない

2009年1月25日鑑賞

見えない暴力、見える悲劇

とても痛い、心が痛い、
今の社会に住むという事自体が痛々しい。
そう言う映画だった。
教育熱心な父、優しそうな母。
そして兄妹の平凡な4人家族。
だが、兄は人を殺してしまった。悲劇の始まりだ。
警察の捜査と共にマスコミの取材合戦が始まる。
犯罪加害者の家族は当然、誹謗中傷の的である。
それから守るには、どこへ隠すか？
妹と、刑事の、理不尽とも言える逃避行が始まる。
まずは、自宅から一時避難先への移動。
マスコミの車が追いかける。
妹と刑事を乗せた車と、マスコミの車とのすさまじいカーチェイス。
こんな事を本当にやったからこそ、ダイアナ妃のあの悲劇が起きたのだろう。
犯罪被害者の家族、そして犯罪加害者の家族。
どちらも事件によって、その心に大きな傷を負う。
事件が起きた時に受ける心の傷。
それだけでもショックは、十分すぎるほど大きい。
これから生きていくには荷が重すぎると感じ、世を捨てる覚悟をする人もいるだろう。
ところが、その重い荷物を更に重くさせようとする力がある。
それが、世間である。
そして情報という化け物である。
ナイフや車が道具であるように、インターネットもやはり単なる道具である。ただし、使い方を誤ると、ナイフや車と同様にネットも人を傷つけ、時には命を奪う凶器になり得る。
ネット社会が、悪意に満ちた人達によって、もてあそばれるとき情報は暴走を始める。
人殺しの兄の実名や写真がネットにばらまかれる。
「さあ、つぎは妹だ、どこへ逃げやがった、情報クレ〜！！」
いったん始まった暴走は、ネット住人たちを熱狂させ、更なる暴走を産んでいく。
もっとやれ！！、もっといじめろ！！と。
もう、ネットは明日からやめようかと思った。
それぐらいネットによる弱者いじめの表現は痛かった。
見ているこちらが気分が悪くなるぐらい、卑劣で残忍な手法なのだ。

おそらくネットに誹謗中傷を書き込む連中とは、リアルなセカイでは何の達成感も得られていないのだろう。

自分自身も弱さを持っている人間なのだろう。

あるいは自分もいじめられたのだろう。

彼らは、強い者には絶対に立ち向かわない。

より弱いものを、もっと弱く、もっと弱くといじめようとする。

そういう世の中の病理を、このドラマはもう、しつこいというぐらい、これでもかと、たたみかけるように描く。

それは”情報”と言う、形の見えない暴力から「クリック一発で」形の見える悲劇へ変換される恐怖なのだ。

主演の刑事役、佐藤浩市と志田未来には脱帽するしかない。

更には松田龍平が、彼らしいキャラクターの刑事役を好演している。

出番は少ないが、イヤミな課長役の佐野史郎の演技も見逃せない。

なお、個人的には映画表現として、僕はこの作品をほとんど評価したくない。

これは僕の大嫌いな細切れ編集や、お決まりの”ぶれまくる”手持ちカメラ。クローズアップ映像の連続を、うんざりするぐらい見せられるからだ。

これらはよくテレビで使われる手法である。

テレビの画面を、ただスクリーンに大きく映せば映画になると、妙な勘違いをする人達を作ったとしか思えないのだ。

はっきり言ってしまおうが、スクリーンで観るには、これらの手法は「百害あって一利無し」なのだ。

そうしたければテレビで放送すればいいだけの話である。

すばらしいテレビ番組として評価されるだろうと思う。

かなり辛口の評価になったが、内容が大変いいだけによけい残念なのである。

制作する側には映画と、テレビの住み分けをもう少しキチンとやっていただきたいと思う。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 君塚良一

主演 佐藤浩市、志田未来、松田龍平

製作 2008年

上映時間 118分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=Aq3Qx6N1N-o>

K-20(TWENTY) 怪人二十面相・伝

2009年2月9日鑑賞

活動写真は良家の子女のたしなみですよ

怪人二十面相という、江戸川乱歩の原案を元にはしているだけあって、レトロな雰囲気がとてもいい。

その雰囲気づくりを担っているのが「ALWAYS三丁目の夕日」でのVFXを担当した山崎氏のグループである。

派手なアクションシーンはいまやCGの独壇場といえるが、その扱いは、ハリウッド映画のそれは、とても雑な感じがする。

山崎氏や、監督の佐藤氏が目指したのは、見たことのない斬新な映像やアクションよりも、日本人の、ノスタルジックな心情をくすぐる、情感に訴える映像なのだ。

ハリウッド系ならアクションシーンを、ワイドスクリーンにもかかわらず、かなりのクローズアップで撮ることはいまや、日常茶飯事である。

はっきり言って、観ているこちらはしんどい。

ところが、本作では、意外に引きの映像が多いことに気がつく。

ワイドスクリーンという額縁の中で紙芝居が演じられているようなそんな感覚なのだ。

本作は映画が本来持つ「動く写真である」ということの面白さをよく表現しているように思う。

なにより、怪人二十面相というレトロな題材を、21世紀の現代によみがえらせた、その狙いがとても面白い。

怪人二十面相というのは架空のキャラクターだ。

フィクションというのは、虚構の世界、嘘っぱちの世界だ。

その嘘っぱちをどう楽しく語れるのか？

どのように楽しく観客に見せることができるのか？

かつての紙芝居のおじさんや、活動写真の弁士達が浪々と名調子を披露したように、本作でもフィクションの楽しさを、佐藤監督と山崎氏たちスタッフが、21世紀のテクノロジーを駆使して巧みに演出している。

さらには俳優陣がとても魅力的だ。

特に國村隼さんの演技には注目。

また、ヒロインの良家の子女を演じるのが、松たか子。

彼女がとてもいい。

主役の金城武を食ってしまった感じがある。

「有頂天ホテル」で、彼女の変幻自在な演技に感心したことがある。

やはり歌舞伎役者の血脈みたいなものなのだろうか？

彼女自身、紛れもない良家の子女だと思うが、コメディタッチの演技をさせると、とても冴えた演技をする、良家のお嬢様なのであります。

以上、一巻の終わりであります。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 佐藤嗣麻子

主演 金城武、松たか子、國村隼

製作 2008年

上映時間 137分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=p-9K2t-e1eg>

少年メリケンサック

2009年2月14日鑑賞

篤姫様ご乱心

なんということでしょう。このような下賤な者達と姫様がお付き合いなされるとは！！

侍女の幾島といたしましては、姫をこのようにお育てした覚えはございません。

念のため、姫様ご出演の映画を拝見いたしました。

そのご乱心振りを、後からシカと戒めるためでございます。

宮藤官九郎と申す者、ゆるせませぬ。

姫様、某公共放送の大河ドラマご出陣中にもかかわらず、その貴重なご静養中に、このようなふらちな映画に出演せぬか？とたぶらかすとは。

さらには、映画の中で数々の変顔をさせ、

拳句の果てにはパンクバンドなる、訳の分からぬ曲者達のマネージャーとやらまでやらせるとは

。

もう、この幾島、口惜しゅうてなりませぬ。

なお、曲者のなかに、佐藤浩市なる者がおりますが、

映画に頻繁に出没する、名だたるクセ者中のクセ者。

本作でも毛を逆立て、あまりのパンクな振るまいに、

下々の民も見事にたぶらかされております。

お気をつけいただくことは他にもございます。

天下の將軍家に嫁がれた身でありながら、ほかの殿方とラブラブなシーンまで演じられるとは。

しかも公方様にも聞かせたことのない甘〜い声で……。

ああ、なんということございましょう。

今は亡き公方様も、草葉の陰で、さぞやお嘆きでございましょう。

何より口惜しいのは、無理を押して、篤姫様をご出演されたこの作品。にもかかわらず、わたくし

幾島が「松坂慶子」という、かりそめの名前で、出演いたしました「蒲田行進曲」での、は

じけっぴり、作品の完成度までには、残念ながら遠く及ばなかったことでございます。

ささ、姫様、早う、大奥の、みやびの世界にお戻りくださりませ。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 宮藤官九郎

主演 宮崎あおい、佐藤浩市、木村祐一

製作 2008年

上映時間 125分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=lml_Xgf2mX0

2009年3月21日鑑賞

報道は商品でいいのだろうか？

ポカポカと暖かい冬の日だった。空は澄み渡っていた。優しい日差しが降り注いでいる。

僕と友人は海岸沿いの国道二号線から海を見ていた。

美しいキラキラと輝く神戸の海。

あまりにもものどかで昼寝するにはもってこいだ。

僕はゆっくりと左を向き、国道2号線を見た。

国道の上には鉄筋コンクリートのビルが、

コロン、と

転がっていた。

この光景がいったい何なのか、にわかには受け入れられなかった。まるでダリのシュールリアリズムの絵画を見ているような光景。

阪神大震災から2週間後、中国縦貫道が1車線だけ開通した。

僕は救援物資を車のトランク、後部座席、助手席まで積み上げ、勤務先の名古屋から実家の神戸に向かった。

普通なら、休憩も入れながら4時間程度である。それが14時間かかった。

僕の勤めていた会社は本社が神戸の東灘に有った。

ちょうど、あの阪神高速道路がなぎ倒された、その北側付近である。その会社の名古屋工場の営業マンとして僕は勤務していた。名古屋工場の主要なスタッフ達は、ほとんどが関西の人たち、神戸出身者が多かった。名古屋工場新設の時、神戸本社からこちらへ赴任して来ていたのだ。親戚や、家族を神戸に残して。

震災当日も僕たちは工場へ出勤した。家族の安否さえ分からない状態だった。しかし待っていた事は、仕事をする事だった。

工場の2階が営業の事務所になっている。

入ると、工場長と、営業部長が深刻な表情で首をうなだれていた。長い沈黙の後、工場長が唸るように一言だけつぶやいた。

「部品の納期が……」

人の生死より部品の納期の方が大事なのか……。

結局、僕はこの会社を翌年退社した。

長い前置きを書いてしまって申し訳ない。

映画本編を見ていて、あまりにも僕個人の強烈な体験を思い出させてしまったのだ。

日航ジャンボ機墜落、御巣鷹山の悲劇と言われる、あの航空機事故は、いまでもはっきりとおぼえている。

奇跡的に救助された少女がいた。自衛隊員に抱えられた状態でヘリコプターに救助される様子は、当時、大変話題になった映像だった。

ショッキングな場面に出くわすと人は思考停止に陥る。

この映画でも、現地に取材に入った記者のひとりが、あまりの惨状に精神的ダメージを受けてしまう。

また余談になるが、当時の写真週刊誌を思い出す。

現場の救出活動に当たった隊員達が、腰掛けて弁当を食べようとしている写真だ。

だが、食べる気にならない。

あまりの遺体の損傷のひどさに吐き気を催しているのだ。

この写真を撮ったのも現場の記者達である。

墜落現場周辺に、所々、目印の紙が、険しい山の斜面に置かれている写真がある。

紙に書かれた文字が写真でも読めた。

「肉片」

このような状況の中で、報道するスタッフの心の葛藤は、どれほどその後の人生に影響を及ぼすのだろうか？

彼ら報道マンは自身へのダメージを恐れず、なぜ、このようなショッキングな情報を好んで取り上げるのか？

それは報道、それ自身がひとつの「商品」だからなのだ。

「商品」である報道は、結局売れなければ意味がない。

報道の現場から上がってくる情報。それが売れるためには、どの情報を載せ、どの情報を捨てるのか？ その経営サイドの判断。この作品はそういったことも教えてくれる。

映画作品として、かなりよく出来た作品である。特にキャスティングがいい。主演の堤真一はもちろん、何より、堺雅人が、こんな凄みのある、目線をもっていた役者さんだとは思わなかった。特筆すべきは、新聞社の過去の栄光を引きずる、局長や部長クラスの人達。その演技にぜひ注目してほしい。

日本アカデミー賞にノミネートされたのもうなづける秀作。

なお、日航ジャンボ機墜落事故に巻き込まれた方々、ご遺族の皆様に哀悼の意を表します。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 原田真人

主演 堤真一、堺雅人、尾野真千子

製作 2008年

上映時間 145分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=UJi9AvQL49g>

重力ピエロ

2009年5月27日鑑賞

重力ピエロと引力エンディング

さして感の鋭い人でなくてもストーリーの中盤で、連続放火犯が誰なのかはもう読めてしまう。そんなことはまあいい。

問題はストーリーの謎解きが分かった後に、どのような味わいがこの映画にあるか、なのだ。

例えば今まで観たことのない、うっとりするような映像美で思わず息をのんでしまうとか、あるいは俳優の新たな表情、魅力を引き出したとか。

更には、ストーリーの中で家族の会話の中にドキリとする、心に突き刺さるコトバがある、とか……。

本作は僕のその淡い期待にあまり答えてはくれなかったようだ。

淡々とストーリーのクライシスへと導かれ、エンディングに関しては玉虫色とでも言えるように、フワフワとソフトランディングしている。僕にとってはあまり深みを感じる作品ではなかったが、人の好みはそれぞれである。なので、加瀬亮のファンであればお勧めなのかもしれない。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 森淳一

主演 加瀬亮、岡田将生、小日向文世

製作 2009年

上映時間 119分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=5KZffS5qKrc>

60歳のラブレター

2009年6月20日

決めセリフが涙腺を直撃する！！

この映画、とてもすごい決めセリフが、たびたび出てくる映画である。時々こういう映画がある

もちろん人間ドラマの場合でも、映像にこだわる映画もあるし、アクションにこだわる映画もある。

この映画はコトバにとってもこだわった映画なのだと僕は思った。

3組の熟年夫婦が登場する。中でも、イッセー尾形さんと、綾戸智恵さん演じる夫婦の何とも味わいのある夫婦像がいい。この夫婦は家業の魚屋を継いだ夫婦である。ご主人は若い頃、バンド活動もしていて女の子達から結構モテたらしいが、今は、見るからに魚屋のおっさんである。当時の面影は全くない。そう言う雰囲気やイッセー尾形さんが好演している。

何より綾戸智恵さんが、まさかここまで演技が出来て、この役にぴたりハマってしまうとは、これぞキャスティングの妙というやつである。

仕事一筋で家庭を顧みなかった夫に、ひたすら尽くして来た奥さん役を演じるのが原田美枝子さん。映画序盤では、ほとんどスッピンに近いのでは？と思わせるが、後に知人に誘われて、華やかなパーティーに出席したりすることになる。このあたりの変身具合にも注目。

磨けばまだまだ自分は魅力的なんだと、その気になってしまう自分、

今までただ、夫のため、家庭のために我慢ばかりして来た自分、

自分の感情を表に出さなかった自分、

そう言う熟年女性の心の綾をうまく描き出している。

彼女をパーティーに引っ張り出す知人役が戸田恵子。この人の演技力には脱帽。

気ままな熟年独り住まいを満喫している感じの女性を演じる。

金銭的にも不安のないリッチで、気ままなシングル生活。

だけど、どうしよう、老後は？ふと不安になる自分。作家というステータスな職業を持ちながら、どこか満たされない心。

料理なんてまるで出来ないけど、主婦業とか、夫婦とか、家族というのもちよっといいなあ～と思ってしまう女性なのである。そこへ現れるのが、井上順演じる医師である。

彼は奥さんに先立たれ、ひとり娘と暮らしている。自分の興味は細菌の研究。女性と会話する時でも大腸菌の話などを持ち出してしまふ、ある意味、専門バカを自認している人物である。そう言う不器用なところが何とも憎めない人に感じられる。

この3組がストーリーが進むにつれ密接にかかわり合ってくる。その中でハッとするようなセリフがいくつもちりばめられているのだ。

劇場ではやはり熟年ご夫婦で鑑賞されている方が多かった。映画も中盤にさしかかると、そこかしこでハンカチを取り出して涙を拭う人も多かった。

ある年齢層以上にはその涙腺を直撃する映画なので、ハンカチのご用意はお忘れなく

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 深川栄洋

主演 中村雅俊、原田美枝子、井上順

製作 2009年

上映時間 129分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=px3OZ3YYLOY>

真夏のオリオン

2020年6月1日

潜水艦映画という高いハードル

もちろん潜水艦映画と言えばドイツ映画の「Uボート」

これは潜水艦映画の不滅の金字塔であり、戦争映画、人間ドラマとしても、きわめて優れた映画だ。

また、その後に作られた「U-571」とか、デンゼル・ワシントン、ジーン・ハックマン共演の緊迫したサスペンス劇「クリムゾン・タイド」もすばらしい。

多くの観客もすでにそれらを体験しているはずだ。だから、潜水艦映画を創るとなると、これは、相当高いハードルを飛び越えるのだ、ということスタッフは覚悟しなくては行けない。

いうまでもなく、すでに企画段階で中途半端なものは創れないのである。

本作品はその点ぎりぎりのラインで”滑り込みセーフ”

それが僕の正直な感想である。

艦長役が玉木宏君というのは、ちょっと若い気がしないでもないが、実際、第2次大戦下のUボート艦長も、日本海軍の潜水艦艦長も若かったそうである。また、この艦長には実在のモデルとなった人がいる。

つい先日、この映画公開を機に、TVで放映されたドキュメンタリー番組を見た。

作品中でも出てくるシーンなのだが、本作のモデルとなった実在の艦長は、何をおいても決まった時間には「飯にしよう！」と、とても食事時間を大切にしていたそうだ。それに艦長の部下だった方の証言でも、潜水艦と言う特殊な空間に閉じ込められた船の中では、艦長以下、全員が家族という雰囲気が強かったと言う。

だから、映画の中で部下達にそれほど威圧的な態度を取らないことも納得。しかし、これはドキュメンタリーを観ていない観客には、ちょっと違和感があるかもしれない。

また、艦長の言葉使いが、拍子抜けするほど丁寧であり、これも逆に映画に独特のリアリティを与えている。

俳優陣についても僕の好きな吹越満氏が出演していてうれしかった。

この人はもっとたくさんの映画に出てほしい役者さんである。以前TVドラマの「殴る女」のボクサー役がとてハマっていて、大好きになってしまったのだ。本作でも映画全体を引き締める存在感が出ていて好感が持てた。

また、今回映画初出演のケミストリーの堂珍氏。予想外に眼力のある演技で印象的だ。さらには炊飯係にお笑いの「ドラクドラゴン」の鈴木拓氏。これが何とも違和感がなく、モノの見事に役にハマっていて、キャスティングのひとつの成功例だと思う。

ストーリーそのものは、良くも悪くも福井晴敏タッチとでも言おうか。一部あり得ない設定を、とても巧みにストーリーの中にとけ込ませていく。

映画作品ではかなり酷評だった福井氏原作の「ローレライ」。原作では終盤で敵の激しい攻撃を受けながらも、皆でうたを唄いながら励ましあう場面がある。映画ではこのシーンがカットされていて、原作ファンは本当にかっかりしたという人も多かったに違いない。本作「真夏のオリオン」では、その戦争と音楽、一枚の楽譜、というものがストーリーの横糸としてからみあってくる。これが、まさにあり得ない素材を組み合わせる福井流なのだろう。

映画作品としては福井氏原作の「ローレライ」「亡国のイージス」に違和感がないという方であれば、問題なく、これらの作品以上にお勧めできるレベルだと思う。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 篠原哲雄

主演 玉木宏、北川景子

製作 2009年

上映時間 119分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=izr0vpE7CDs>

2009年6月27日

山の仲間、映画の仲間に拍手！

かつて黒澤映画のこだわりのひとつが、「本物を使う」ということだった。気に入る天気になるまで延々待つ。セットも撮影に写る面だけでなく、裏側まで作り込む。数百頭の馬を用意したが、まだ、90頭ばかり足りない、と言って撮影中止を宣言する。今どきこんな、時間と金と手間ひまがかかる映画作りをやる人がいるだろうか？と置いていたら、ひとりいたのである。本作の監督、木村大作氏である。

この映画で映されるシーンはすべて本物の山の姿だ。一体どうやってこのショットを撮ったのだろうか？と感心してしまうようなシーンがいくつもある。スクリーンに映る山々の神々しさに、胸打たれる。

それより更に印象的だったのは、山と人間との存在の大きさの違いだった。

大きな引きのショットがある。山全景が映っている。そこに何かアリののようなものが動いているのだ。よく観ると、アリのように見えたのは、険しい山を登る俳優達の姿だった。

山の前ではその人間のスケールの桁違いの小ささに胸打たれた。

監督の木村氏は本来カメラマンである。だから、最も心配したのは脚本だった。映像に偏った映画を作ってしまうのではないかと考えたのだ。

さすがに脚本はやや浅いと思われる部分もあるが、それは映像で十分にカバーできている。何より俳優陣がその存在感と演技で見事にカバーした感じである。

特に出番は少ししかないが、宮崎あおいを使ったのは秀逸なキャスティングである。主人公の測量技師の新婚の奥さん役である。

主人公を含めた測量隊は、どうしても劔岳に登れという厳命を受けた。何せ当時の陸軍からの命令である。前人未到の険しい山に登ることは命の危険にさらされることだ。だが、宮崎あおい演じる奥さんがいることで、必ずこの人の元へ生きて帰るのだ、という説得力が生まれた。

主演の浅野忠信氏はこの測量技師を淡々と演じている。大げさに身の危険、悲壮感をアピールすることもない。彼はただ、静かに黙々と一步一步山の頂上を目指す。その静かで確かな熱意をかんじる。何より彼の内面の熱情をカメラが捉えたのが秀逸。

助演賞をぜひ差し上げたいのが、やはりこの人、香川照之氏である。

地元の案内役として測量隊から命を託された人物を熱演した。道案内役は、当然山に精通している人物である。更には何回も山に登った経験があり、当然その肉体は強靱で、特に雪山を歩く姿がどうサマになっているか、が大事である。その点、香川氏の歩き方は、腰がぐっと落ちて踏ん張り、雪道をのっしのっしと、どこまでも歩いていけるような頼もしさを感じた。一体どこでこんな雰囲気をも身につけたのだろうか？やはり凄い役者さんだと感心してしまう。

最後に、この途方もない挑戦であり、労力のかかる映画を作り上げたスタッフの皆さんに敬意と拍手を送りたい。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 木村大作

主演 浅野忠信、香川照之、松田龍平、宮崎あおい

製作 2008年

上映時間 139分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=RCfIDeioFls>

2009年6月30日

「カントク、あんた、怖いオンナだッ」

「ゆれる」で、そのドロドロで頭の中真っ黒な脚本を書く監督、西川美和。

その新作「ディア・ドクター」には期待しないでは、いられなかった。まだ、若い新進気鋭の女性監督がどんな、人間の内面をえぐり出すのだろうか？人間の内面のドロドロさ加減をどのように描いてくれるのだろうか？ ちょっと胸躍る感じで西川美和監督の新作を公開初日、劇場に観に行った。

驚いた。いつもはまばらな観客しかいない映画館が、なんと本作では、立ち見まで出たのだ。どれほど観客がこの作品に注目しているかを思い知らされた。いよいよ、初回上映が始まる。

まずはファーストシーン。いい映画はファーストシーンがハナから違うのである。

暗い夜道。何も灯がない。どうやら自転車のもので、ライトだけが真っ暗な村の道を延々、トロトロと走る。観客に見えるのはその頼りないライトだけ。しかも遠景のショットで画面の端から灯は現れ、画面の端に消えていく。

うまい！！と思った。明らかに導入部の絵がうまくなっている。

ど素人の、いち観客である私が言うのは、失礼に当たるのだが、この映画で一番感じたのは、圧倒的に映画作りがうまくなっている、と感じたことだ。

絵の切り取り方、人物の配置、カメラ位置、そして編集。前作「ゆれる」に比べて圧倒的にうまくなっているのである。

例えば、新任の研修医がやってくる。ど田舎には不釣り合いな真っ赤なオープンカーに乗っている。遠景のショット。緑の一面稲作地帯。その中を走る真っ赤なオープンカー。

実は緑と赤という色彩はご承知の通り、反対色と言って、お互いがお互いの色を反発しながら引き立てあうような効果がある。それを理解した上で「緑」の稲作地帯で「赤」の車を使ったとしか思えない。心憎い演出だ。

主演に抜擢された笑福亭鶴瓶さん。この物語の主演はこの人以外考えられないだろう。この映画のテーマは嘘である。

鶴瓶師匠は、一見いいひとである。キャベツの葉っぱをむいていくように、幾重にもいい人の葉っぱでくるまれている人だ。だが、その芯までむいた時、どこかこの人、「毒」であるとか、いかがわしさだとか、悪意であるとか言うものを、隠し持っている感じがする。ちょっと怪しい人なのである。

また、看護師役の余貴美子さん。この人の演技がとても良かった。

医師である夫と離婚し、母子家庭で、ひとり息子を育てる看護師である。家庭を守らなければいけない。だから、鶴瓶さん演じる医師に怪しさを感じながらも、それを助け、診療所を陰で支えているのがこの人なのだ。セリフのひとつひとつに女の凶太さとか、母としての凄みを感じさせる名演技だった。

他にも八千草薫さんを始め、豪華な俳優陣が脇を固める。やはり「西川美和に映画を撮らせたい」そう思うスポンサーが増えたことで、可能になったキャスティングなのである。映画が売れることは、次の映画作りにとって、やはり最も重要なことなのだ、と感じてしまう。

八千草薫さんと、井川遥さんのツーショットもよかった。ガラス障子越しに2人が背中を向けているショットだ。左のガラス障子の枠の中に八千草さん。右のガラス障子の枠の中に井川さん。この絵の作り方はすごかった。まるで小津映画を見ているような様式美だ。親子ではあるが二人の距離感を感じてとても印象的な絵になっている。

脚本はさすが、西川美和だとおもわせる。ストーリーの4分の3ぐらいで、すでに種明かしをしてしまうのだが、その後、どうこの物語を着地させるのか？ 観ているこちらがハラハラしてしまう。おもわず、「うまく落してくれ！」と願ってしまった。

エンディングに関しては、ちょっとファンタジーさえ感じさせる落しどころだ、実にうまく処理していると思った。

西川美和監督ファンであれば、その成長ぶりが楽しめる作品であり、もちろんキャスティング

だけでも魅力的だ。さらには過疎、無医村と言う問題、それに村人達の間人間ドラマに、笑いまでちりばめられている。

「ゆれる」でその手腕が絶賛された西川美和監督。その後の作品作りはさぞ難しかった、苦しかったと思う。だけどこんな作品をやすやすと作り上げてくるとは。やっぱりカントク、アンタ、怖い女だわ.....。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

作品データ

監督 西川美和

主演 笑福亭鶴瓶、瑛太、余貴美子

製作 2009年

上映時間 127分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=nLWxyApxyQ>

南極料理人

2009年9月6日鑑賞

この映画は美味しく頂きました。

おやつで作ったドーナツも凍ってしまうほどの寒さ。これは半端な寒さじゃない。ドアの一枚外は細菌すら住めない極寒の世界なのだ。そんな極限の環境の中でむさ苦しい男達が観測作業にあたる。場所は日本から14000km離れた南極観測基地

主演の堺雅人、脇を固める、生瀬勝久、きたろう、豊原功補、これだけ一癖あるメンツをそろえると、この映画は何かありそうだと予感してしまう。

ドクター（豊原）は夜になるとバーテンダーに変身して、夜な夜な怪しげなカクテルを作っているし、大学院から派遣された隊員は、日本に置いて来た彼女と毎晩電話することだけが心の支えだし、妻に愛想を尽かされた雪氷学者（生瀬）は、離婚問題を抱えている。

そういった登場人物の背景が、観るものに親近感を抱かせる。

映画に登場する料理は「かもめ食堂」や「めがね」のフードコーディネータが担当しているとのこと。道理で美味そうな訳だ。それに映画に映る料理は、よそ行きではなく、家庭的でとても親しみやすいものばかり。そんなところも、この映画のマツタリ感につながっているのだろう。

ラーメンのエピソードのくだりが抜群にいい。メンバーがうまそうにラーメンをすすめる姿は、あの伊丹十三監督の名作「タンポポ」のシーンを彷彿とさせた。

最近の邦画、特にミニシアター系でかかる映画の傾向だろうか？ ワンシーン・ワンカットだとか、長廻しをしてみたりとか、その辺り、僕は個人的には好きなのだが、単なる流行で終わらないでほしいと思う。こういうワンカット毎をじっくり味わう、役者が持つ演技をあえて邪魔しない映画が合って当然いいのだ。

当然これらの手法を選択するのは監督である。今回が商業映画初監督と言う、若干31歳の新人監督が撮ったとは驚きだ。とても観客にとって観やすい作品作りだし、脚本、キャスティング、なんと言っても音楽の使い方のセンスがいい。

むさ苦しい男達を朝起こす音楽はなんと、モーツァルトの「フィガロの結婚序曲」だし、ほのぼのした風景の中に、突然ワーグナーの「ワルキューレ」を入れて画面に緊迫感を持たせるなど、とても巧みである。

今シーズンなかなか満足できる邦画がなかったけど、これは久々に満腹感一杯の一品

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 沖田修一

主演 堺雅人、生瀬勝久、きたろう

製作 2009年

上映時間 125分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=TzRvOKLd-kU>

20世紀少年＜最終章＞ぼくらの旗

2009年9月6日鑑賞

やっぱりマンガで決着つけたい

小説などの文字で伝えるジャンルは最も情報量が少ない。だから読者は作者が提示するストーリーの中で、自由自在にイメージを膨らませてよいのだ。

文章のセカイでは読者の数だけ主人公の顔が違い、声の違い、舞台背景も違う。言い換えれば文字媒体の作品では、読者は「途方もない、限りない自由」を獲得しているのである。もちろん、反論もあろう。

「途方もない限りのない自由裁量」は逆に読者を苦しめる事もある。読み手の想像力や、人生の経験値によって、文字表現の作品は価値の振れ幅がきわめて大きくなるのである。

その対極にあるのが映画というジャンルである。

実写、アニメに関わらず映画の場合、主人公の顔、声、人物の動きや舞台背景まで、そのイメージを特定する自由は「作り手側」が「独占」している。それを観る側として許せるかどうかは、作り手と受け取る側の信頼関係の問題であろうと思われる。

僕は思う。マンガというジャンルはこの文字表現と、動画表現の、ちょうど中間に位置するのだ。絵によってキャラクターや舞台設定のイメージは固定されるものの、人の動きや声色、背景に流れる音楽さえも読み手の自由だ。

あくまで僕の個人的意見だが、世界中で日本のマンガがここまで浸透したのは、じつはマンガと言う表現媒体が持つ固有で特筆すべき性質があるからだ。

勇気を持って言い切ってしまう。

マンガはいい意味で

「中途半端なジャンル」なのだ。

これこそ、マンガが全世界、グローバルに展開出来る極めて重要な特性なのだ。

なぜなら、マンガは文章表現と違い「限定されたイメージ」のなかで読者は遊ぶのである。

例えてみれば文章作品は読者に素材としての「木材」を渡しているにすぎない。

これで火を燃やそうが宇宙船を作ろうが読者の自由だ。

マンガは例えれば「プラモデル」なのである。あらかじめパーツはパッケージの中に綺麗におさめられ、設計図まで付いてくる。プラモデルを手にした者は、作る楽しみだけを純粋に味わう。さて、表現媒体のについてずいぶん語ってしまった。映画に戻ろう。

漫画界のかつての神様は「手塚治虫」という巨人だった。今は、浦沢直樹であり、かわぐちかいじ、あたりだろうとおもわれる。

本作の「20世紀少年」シリーズにおいては、原作のイメージを損ねることのないような配慮がなされていることは確かだ。だが、やはり違和感を覚えるのは、キャスティングにお笑い芸人を使ってしまったことである。

いつもバラエティ番組で見た顔が「20世紀少年」の登場人物のひとりとしてスクリーンに現れると、作品の持つ緊張感が緩んでしまうのだ。幾ら作り手側が、観客に20世紀少年の登場人

物のイメージとして押し付けようとしても、観客にとってはやはりお笑い芸人であり、この舞台裏では「まいう〜!!」などと喋っているかもしれないな、とってしまうのだ。

ただ、キャストिंगの中で、唯一カンナ役の平愛梨については違和感なく観ていられた。

原作と違うラストシーンということで、ずいぶん話題を振りまいている本作。映画を見てから再び原作漫画を読み返してみるのも、ファンとしての楽しみ方であると思う。

そこにはいい意味で「中途半端なジャンル」である漫画という、おいしい要素が一杯詰まっている。あなたのイメージでケンジや、オッチョや、カンナを自由に動かしてみてはいかがだろうか？

映画では”絶対に”成し得ない楽しみが、そこにあると思う。現代の漫画界の巨人のひとり、浦沢直樹のクオリティの高さを実感してみしてほしい。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 堤幸彦

主演 唐沢寿明、豊川悦司、常盤貴子、平愛梨

製作 2009年

上映時間 155分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=GRm8ruJgtgs>

空気人形

空気人形

2009年10月5日鑑賞

空気はどこにつながってゆくのか

空気人形はなぜか偶然にも心を持ってしまった。単なる性欲処理の「道具」として作られた「工業製品」のはずだったのに。心を持った空気人形は、すべてのものが、新鮮に感じられ、驚き、やがて喜びと悲しみを知る。

空気人形の彼女はレンタルビデオ屋でアルバイトを始めた。彼女は心を持っているので、そこで出会う店員の青年に恋をしてしまう。

ある時、仕事中に彼女の体の一部が破れ空気が抜けてしまった。青年はそれを見て驚くのだが、すぐにセロテープで破れた体を直し、彼女の体に息を吹き込むのである。

彼女の体はすこしづつ膨らみ、やがて、元の体に戻っていく。

だがそのとき空気人形であるはずの、彼女の体は単に元に戻っただけではなかったのだ。

青年の息が彼女の体に行き渡っている。青年の慈しみと愛情で彼女のカラッポな体が満たされている。

自分の体には人間の愛が一杯詰まっているのだ、と喜びを表す空気人形。

この作品中最も美しく印象的なシーンである。

彼女には本当の主人がいる。性欲を満たすために彼女を購入した男である。確かにこの男もさみしさを感じる人物である。

職場では必要とされず、上司から見下され、世の中からも疎外されているかのような人物だ。

この物語の中には、多くの疎外された人物が登場する。過食症の女性や、すべての犯罪は自分が犯したものと思込む女性。ベンチにたたずむ老人。また、レンタルビデオ屋の店長も、一人暮らしの中でいらだちを感じている人物だ。この人達はどこかにつながろうともがいてはいる。しかしどこにもつながらない人達に見える。一体の空気人形と、それを取り巻く人々。それらが、この作品ではとてもか弱い存在として描かれている。

是枝監督の作品は初めて見たのだが、主演のペ・ドゥナの演技と存在そのものが魅力的で、彼女でなければこの映画は話題性も、作品としての魅力も、ずいぶんしぼんでしまったことだろう、と思った。

ラストシーンでは空気人形が、愛する青年のために自分の空気を入れてあげようとする。とても残酷で切なくて、それでいて、愛おしいシーンとなった。

青年は彼女が空気人形であることを知ったときこう言った。

「人間と人形の違いは死んだとき燃えるゴミか、燃えないゴミか、それだけの違いだよ」と。最近ではペットなどの命さえゴミ捨て場に捨ててしまうご時世である。命というものが何ともフワフワと軽い時代になっている。

その様な時代の空気感を、映像として表現するのが是枝監督の感性のなせる技なのだろう。

元々はコミックとして数ページの作品だったそうだが、それを文学的な香りのする作品にまで高めた是枝監督の手腕。そしてペ・ドウナの存在感が”はかなさ”の余韻を残す作品である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 是枝裕和

主演 ペ・ドウナ、ARATA、板尾創路

製作 2009年

上映時間 116分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=W6guDSG-tzg>

2009年10月17日鑑賞

行間は映像に出来るのか？

太宰の文章はどうにも好きになれない。語り口があまり好みではないのだ。女々しさや人間としての弱さを、徹底的に計算して書いている気がするからだ。太宰にとって”女々しさ”は自分の文章を装飾し、販売するための”主力商品”なのである。

その奥には「女々しい、弱い、僕って、こんなにステキ！！」と、酔いしれている、ナルシストそのものの、太宰がいるような気がする。

このように僕の体そのものが拒絶反応を示す太宰の文章なのだが、その作品が映画になった。なぜか気になって観に行ってしまった。

浅野忠信の何ともとらえどころのない、腑抜けた主人公がいい。しっとりと情感を漂わせる松たか子の演技にも注目である。

だが、なぜだろう、どこか違う様な気がする。この作品はいろんな思いを描かせてくれる作品であることは確かだった。

まずは、イタリア映画の名作「道」をおもいだす。さらには「ベニスに死す」も思い起こさせる。「道」は、知恵おくれの天使の様な女性と、悪魔の様な大道芸人の男が共に旅を続けるお話である。そこには男と女の原型がある。最後に天使である女性を見殺しにしてしまい、さめざめと大道芸人は泣く。そこでストーリーは終わる。白黒作品ではあるが、その海辺で泣くシーンは、観る者の心に深く刻み込まれる。

さて「ベニスに死す」

取りたててストーリーがある訳でもない。ただ、避暑に来ていた作曲家が美貌の少年の存在と造形に、永遠の美しさを見だし虜になってしまうと言う物語だ。

彼は少年に何も手出しできない。ただただ鑑賞するのである。

その美しさにただ脱帽している。

これを映画にするのだからとても退屈なのだが、しかし絵としての映画はとても印象的なのだ。あまりの少年の美しさに確かに観客も納得せざるを得ないのである。

少年期という一瞬と、美の永遠性が見事に融合されている。

さて、本作「ヴィヨンの妻」はどうだろうか？

これが意外にもストーリーがしっかり作り込まれている。

かつて淀川長治さんは

「映画は頭で見たらおもしろくないね。もっと感覚で観てほしい」とおっしゃっていた。僕もそのように映画を観てみよう、と心がけているひとりである。

「ヴィヨンの妻」という作品は、どちらかと言うと頭で観る作品になってしまっているのだ。この作品なら感覚で見せることも充分可能ではないのか？とおもう。

主人公の大谷は確かにどうしようもない男だ。いつも酒ばかり飲んでいて、常に自殺願望があり、それでいて女性からの母性愛を常に求め甘えている男だ。その妻はそんな夫を常に受け入れ、しかも、なぜか許してしまっている。

そこに妻として、女としての悲しみの原型がある様な気がする。

個人的には、観ているこちらが泣きたくなるほど美しい映像を見たかった。更には切なくなるほどの男女の情愛を観たかった。映画にしか出来ない、「フレームの中の絵」で語ってほしかった。

この破滅的な男女の情愛を、もっと映像の行間で味わいたかった気がしている。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 根岸吉太郎

主演 松たか子、浅野忠信、室井滋

製作 2009年

上映時間 114分

予告編映像はこちら

<http://video.jp.msn.com/watch/video/%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%83%A8%E3%83%B3%E3%81%AE%E5%A6%BB-%E6%A1%9C%E6%A1%83%E3%81%A8%E3%82%BF%E3%83%B3%E3%83%9D%E3%83%9D-%E4%BA%88%E5%91%8A%E7%B7%A8/1ms6816i?fg=rss>

クヒオ大佐

クヒオ大佐

2009年10月23日鑑賞

映画は美味しくダマしてほしい

主人公である、希代の詐欺師、クヒオ大佐の生い立ちをもう少し詳しく描いてくれたらよかったなあと思った。

なぜ彼が詐欺師として生きていくことになったのか？ クヒオ大佐という人格が、どのような環境で出現したのか？ 僕が最も興味をそそられたのが、正にその部分だったからだ。それは物語の後半で少しばかり語られているだけである。

なお、このクヒオ大佐を名乗る詐欺師、及び彼がしでかした事件は実際に起こった事だ。なぜだかその事件を僕は覚えているのだ。

というのも、懐かしいバラエティ・ゴシップニュース番組の草分け「ウィークエンダー」で、この人物が取り上げられていたからだ。当時でも強烈な個性で、愉快的な詐欺師として大きな話題になったのだ。ラジカセでジェット機の騒音を流しながら、恋人に電話をかけ、異国の空の上から無線で電話をしているようにみせかけ

「アイラブユー！！」

を絶叫する。

何ともクサイ演出をキザに決めてみせたのは、見事なまでの詐欺師ぶりだった。子供だった私もこんな愉快的、ぶっ飛んだ詐欺師がいるんだなと思った。確か写真も公開されていたように思う。日本人離れした骨太な風貌で、それでいて、どこかダサイ田舎者の雰囲気を残していたように記憶している。

それにしても堺雅人の怪演ぶりがやはり見事だ。今だに私などは「篤姫」での徳川家定さんのイメージが消えない。だから本作でのラブシーンでも「篤姫さん、ダンナ、映画で、あ～んなことや、こお～んなこともヤッてるよ」などと思ってしまうぐらいである。

この映画のテーマは人をだますということである。

しかし、待てよ、と思う。

そもそも映画って言うのは虚構のセカイ。もともと嘘っぱちのセカイなのである。映画を作っている人々はある意味、合法的な詐欺師集団と言えなくもない。もちろん人々を楽しませてくれる、詐欺師集団ではある。

この映画のセリフだが

「私がダマしたのではない。相手が望んだことをしてあげただけだ」

このセリフは映画そのものにピッタリ当てはまってしまうのである。観客は映画館にわざわざ足を運び、お金まで払ってダマされに行くのである。しかも

「うう～む。この作品はなかなかいいダマし方をしてくれるなあ～」などと、したり顔でほざく、私の様な”レビュアー”という種族まで生み出すのだ。私たち観客が望む限り、映画界と言う詐欺

師集団は、私たち観客を楽しくダマしてくれることだろう。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 吉田大八

主演 堺雅人、松雪泰子、満島ひかり

製作 2009年

上映時間 112分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=6NCvrZpazWE>

沈まぬ太陽

沈まぬ太陽

2009年10月26日鑑賞

御巣鷹の空、アフリカの地平線

どれだけこの映画の公開を待ったことか。平日にも関わらず客席はほぼ満員。どれだけの人がこの映画を観たいと思ったか。それがよくわかった。

渡辺謙主演で「沈まぬ太陽」を撮る。それだけでも大きな話題を呼んだこの作品。観てよかった。待った甲斐があった。

私は原作をすでに読んでいます。私事で恐縮だが最近、全く小説を読まなかった。話題になった作家、例えば村上春樹などの作品も2、3ページパラパラめくるが全く頭に入ってこない。それがである。なぜか山崎豊子の「沈まぬ太陽」だけは違った。

ほぼ一気に読んだ。全5巻の大作である。それだけ山崎豊子の持つ文章の力強さ、そしてストーリーテラーとしての構成の確かさ。やはり、読ませてしまう作家なのである。

その大作を映画化するとすると、当然ハードルは極めて高くなる。しかも、聞けば原作者の山崎氏からの強い要望で、必ず1本の映画として撮ってほしいとのこと。はっきり言ってハナから不可能なのである。本作はそれにあえて挑戦した。

ゆえに、原作のあの部分を入れてほしかった、この部分を観たかった、などと言う細かな不満は言いたくない。ただ、ひとつだけどうしても不満な部分がある。

ジャンボ機墜落の過程をもう少し詳しく描いてほしかったのだ。おそらくご遺族の心情を思っ
てかなり割愛したのだと思う。

しかしだ。

乗客がどれだけの恐怖を味わったのか？ そして全く操縦不能に陥った（*後述）ジャンボ機を、それでも懸命に操縦しようとしたクルー達。その様子をもっと描いてほしかった。

クルー達も確かに航空会社の社員であり、加害者側のカテゴリーに入る人たちなのだが、少なくともクルー達は乗客とともに命を失っているのだ。

彼らと、乗客は必死に生きようとした。もがいた。だが、無情にも飛行機は墜落するのである

その無念さが観客に伝わってこないのだ。だから、遺族がどれだけ航空会社を憎んだのか？
いまいち迫力に欠ける。

また作品の後半で、航空会社の社員、役員達の腐敗ぶりが描かれるが、これだけの悲惨な事故を起こしておいて、その無責任ぶり。乗客を救おうとしたクルー達との鮮明な対比が、ここに生まれるはずであった。だが、やはり墜落状況の大幅な省略により、死体の上にあぐらをかき様な、卑劣な航空会社の幹部達の行動が、鮮明に描けていない。文句ばかり言って申し訳ない。

不満な部分が多少あるとしても、本作は近年の邦画の中でも際立って魅力的だ。主人公、恩地元の人物像は渡辺謙の好演によって確かな輪郭を得た。

特に僕が好きなのは、息子と牛丼をかき込みながら話し合うシーンだ。長い海外勤務、子供は日本、父親である恩地は僻地をたらい回しされていた。当然親子の心の交流は少ない。なぜ父親は理不尽な仕打ちをする会社を辞めて、家族と一緒に暮らさないのか？ 息子はそう思っている。そのわだかまりがじんわりと解け合う。素晴らしいシーンとなった。

原作を読んでいるとき、まだこの作品が映画になることは知らなかった。だが、読み進めていくと、どう考えても、この恩地元を演じられるのは、渡辺謙しかいないだろうとおもった。会社という巨大な組織に翻弄される人物、自分の生き方に迷いながらも力強く生きていく人物、アフリカのサバンナが似合う人物。

渡辺謙自身、ロケでアフリカに降り立った時、なぜ恩地元が、やがて再びアフリカの地に戻っていくのかが分かったと言う。

おそらくこの映画のラストシーンを観た観客は、私に限らず、渡辺謙と同じ思いをするだろう。そして恩地元という人物を理解するだろう。

御巢鷹山の空は青かった。その空は遠くアフリカにもつながっている。空に国境はないのだ。アフリカの地平線に静かに暮れ行く真っ赤な太陽を観たとき、つくづく、この作品に納得できた。観てよかった、と思えた。

なお、ジャンボ機の操縦不能の件については、事故の後、日本の事故調査関係者立ち会いのもと、ボーイング社のシュミレーターで、尾翼がなくなった状況を作り、それでも無事に着陸する様子が原作では描かれている。ただし、これはあくまでもシュミレーターであり、さらには事故後に危機感を持ったボーイング社が、シュミレーターで、パイロットに事故調査対策用の特別な訓練をさせたとも推測出来るのである。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

作品データ

監督 若松節郎

主演 渡辺謙、三浦友和、松雪泰子

製作 2009年

上映時間 202分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=dkk7pwZRGhE>

僕らのワンダフルデイズ

僕らのワンダフルデイズ

2009年11月21日鑑賞

思い出に終わらせないオヤジバンド達

私事で恐縮だが、昨年27年ぶりに人前でライブ演奏というのをやった。ギター抱えて弾き語りだ。

毎月一回オヤジ達のために唄う場所を作ろうじゃないか、という主催の方の熱い思いが伝わってくる様な会だった。持ち時間の制限はあるが誰でも参加自由。飛び入りも歓迎と言う集まりに参加したのだった。

会場はライブハウス。もちろんマイクもセッティングされ、スポットライトもある。僕はその中で唄ってみたのだ。自慢話に聞こえるかもしれないが、高校生の時はフォークデュオを組みコンテストに出て優勝した。一応、人前で披露できる腕はそこそこあると思う。

ステージに上がり、人前で賞賛の拍手を浴びる快感は、忘れられないものだ。中年オヤジになってもまだ、夢よもう一度、などと思っているのだから始末が悪い。

だが、27年ぶりの僕のステージは、全く不完全燃焼に終わってしまった。

自分で言うのもなんだが、演奏が悪かった訳ではない。ステージに上がって唄ったことで、あることに気がついたのだ。

自分は何のために唄っているのだろうか？

自分はこの後、何を指すのだろうか？

さっぱり訳が分からなくなってしまったのだ。コンクールに出たいのならそうすればいい。第三者の容赦ない判定で自分の音楽的なポジションが分かるはずだ。

僕は臆病者である。恐がりである。

コンクールに出ることで、何か自分の大切な美しい思い出が壊れてしまうのではないかと思ったのだ。

この映画に出てくるオヤジバンド。僕がうらやましいのは、彼らには強烈な動機があったことだ。

竹中直人さん演じる主人公は、ガンで余命あと半年。残された時間で自分は何をしたいんだろう？ 彼は考えた。やはり楽しかったのは青春時代だ。彼はバンドを組んでいた。

そうだ、もう一度バンドをやってみよう。

彼は決意する。高校生の頃の仲間を呼んで、もう一度バンドをやろう、もう一度俺たちの音楽をやろう、と。

この映画でうらやましいのは、主人公にはいくつになってもバカをやれる仲間がいたことだ。更にはもう一度音楽をやりたい！ という強い動機がうらやましい。

僕もこんなオヤジ達のように自分の気持ちに素直になりたい。俺はここで生きているんだぞ！ と誰かに伝えたい。

そう言えば高校時代の友人とちょっとした感情のもつれから、プツリと連絡を絶ったままに
しまっている。こんなことでいいのだろうかと思うこともある。人間死ぬときゃあ、どうせひと
りだ、などと強がってみたりする。だけどやはりたったひとりの人間は弱いものである。この映
画のように、夢を共有できる仲間がいるのは何とも心強いものだ。

ぼくは過去の美しい思い出を、記憶の中から時々取り出してくる。それをただ鑑賞する。それ
で満足してしまう。そういう感傷的で弱い人間である。かつての友人とのわだかまりが解けた
とき、誰かにこの思いをどうしても伝えたいという強烈な動機が出来たとき、僕は再び唄いだす
のだろう。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 星田良子

主演 竹中直人、宅麻伸、斉藤暁

製作 2009年

上映時間 112分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=lkrQA1w5qLc>

サイドウェイズ

サイドウェイズ

2009年11月21日鑑賞

それぞれの道、それぞれの味わい

以前観たオリジナル版は、はっきり言ってほとんど覚えていない。あまりに退屈で、ほとんど寝てしまった。

いくらアカデミーの各賞を受賞したからと言って僕の口には合うかどうか分からない。

映画ってそう言うもんだ。

ワインの味わいがそれぞれ違うように、いわゆるマツタリ系の映画でも、味わいはそれぞれ違う。

更にはオリジナルとリメイクでも全然違ってしまうのだ。

この映画を観たいと思ったきっかけは、TVでダイジェスト版をやっていて、小日向さんと鈴木京香さんのキスシーンをみてしまったから。

それがとてもステキなキスシーンだったのだ。

だいたい、小日向さんのキスシーンなんて、まずあり得ない。

オリジナル版では、全く知らない俳優達ばかりが、マツタリした話を展開していくので映画に入り込めなかった。

今回のリメイク版は、日本のおなじみの俳優さんたちが出てくる。

それだけでも何となくほっとする感じがある。映画に入り込みやすいのだ。

生瀬さんの役どころは、結婚直前の独身貴族。この人、アメリカでレストランの店長をやっているという設定だ。

アメリカにやってきた旧友の小日向さんを空港まで迎えに行く。そのハイテンションな立ち居振る舞いが、なんともおかしくて、最初、この役者だれだぁ〜？というかんじ。

よく見ると生瀬さんなのだ。

この人、こんなハイテンションな演技、いままでしなかったでしょ？ というぐらい今回は弾けた演技を見せている。

ところが、この演技がとてもこの映画に合っている。意外にもね。

映画全体に流れるのは、柔らかな風合いとでも言おうか。

それだけだと当然マツタリしてちょっと退屈な面もある。それをハイテンションな生瀬さんの演技でスパイスを利かせている。

なかなか売れないシナリオライター役の小日向さん、

かたくなにアメリカでワインの仕事を続けたいと思う鈴木京香さん。

奔放で、自由に自分の仕事や、生活のスタイルをエンジョイしていこうというスタンスの菊池凜子さん。

四人それぞれの思いを、ワイン巡りを軸にしてストーリーは展開していく。そのなかで、ほのか

な恋愛感情も「熟成」していく。

ワインはのめり込んだら、きりが無い。

人それぞれ好きな銘柄があるように、生き方もそれぞれ好きな道をあじわっていったらいいよね。

中年になって、ちょっとした寄り道をするのも悪くないな、と思わせる。本作の語り口は、まるですっきりと飲みやすいスパークリングワインの余韻を思わせる。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 チェリン・グラック

主演 小日向文世、生瀬勝久、菊池凜子、鈴木京香

製作 2009年

上映時間 123分

予告編映像はこちら

https://www.youtube.com/watch?v=O_go7aRl2s0

のだめカンタービレ 最終楽章 前編

2009年12月22日鑑賞

4月がたのしみだね。ベーベちゃん！！

今から22年前、マエストロ・カラヤンはウィーンフィル・ニューイヤーコンサートに華々しく登場した。

僕はその音の美しさと、あまりに美しい指揮ぶりに圧倒された。

彼の弟子である、小澤征爾氏は言う。

「カラヤンのタクトは魔法の杖だった」と。

音楽の世界では、師匠と弟子というのは、マエストロ・シュトレゼマンと千秋真一のように、実際、密接な関係のようである。

シャルル・ミュンシュのタバコに火をつける、当時の弟子であった小澤征爾氏の写真が残っている

その小澤氏も後にウィーンフィル・ニューイヤーコンサートに登場することになる。

日本人指揮者初という快挙だった。

僕は今でも忘れない。ウィーンフィルでのカラヤンの美しい魔法の指揮ぶりを。そして小澤征爾氏の感動的なステージを。

その楽友協会ゴールデンホールの指揮台で、ついに千秋真一がタクトを振るのである。

まさか、日本の「いち学園コメディ作品」が、音楽の世界の頂点とも言える「聖地」にまで足を踏み入れたのはまさに奇跡に近い。

実際に金箔で張り巡らされた豪華絢爛たるこのホールで、玉木宏演じる千秋真一の指揮は、ビジュアル的に実に美しい。まさに音楽ファン、のだめファン、鳥肌ものである。

本作でのハイライトは、やはりチャイコフスキーの「序曲1812年」だろう。

千秋真一役の玉木君の指揮ぶりは、まさに「黒王子」のオーラがある。音楽素人の僕でも、のだめTV版から、玉木君の指揮ぶりが更に進化しているのが分かる。

今回の「のだめ前編」は、のだめ本人よりも千秋真一とマルレオケとの関係を中心にストーリーが展開していく。

特におもしろいのはマルレオケの初期の段階である。

これが相当なダメオケぶりで、そのめちゃくちゃなダメっぷりがハンパではないのが笑えてしまう。

そういえば、あのカラヤンも若い頃、とんでもないダメオケを指揮したことがあったそう。

彼はまさに当時、千秋を地でゆく「オレ様指揮者」だったので相当オケと衝突したそうである。（ちなみに怒ったコンサートマスターが、カラヤンを撃ち殺そうと練習中にピストルを隠し持っていたのを発見され、取り押さえられたと言う逸話がある）

元祖オレ様指揮者の千秋が、どのようにこのオケを立て直していくか、とても見ごたえあるも

のになっている。

ところで、コメディというのはとても作りが難しいといわれる。

笑える部分というのは、実はしっかりした役者の演技やテクニック、熟練したスタッフの仕事、作品の骨格と言えるストーリーがしっかりしていないと笑えないものである。

表面的な笑いになってしまい、観客は作品をなめてかかってしまうからだ。

更に、のだめの場合はクラシック音楽という、非常にレベルの高い芸術性さえも求められている。

作品の核、ベーシックな音楽の部分、それは絶対におろそかにしない。というスタッフの覚悟が観客に伝わってきて清々しい感じさえある。

そしてキャストの勝利。

いうまでもないだろう。

野田恵を演じられるのは天性のコメディエンヌ、上野樹里以外にありえないのである。

原作の二宮知子氏が、上野樹里でないとこの作品はTV化も映画化も許可しない、と宣言したぐらい、まさに当り役なのだ。

今回の前編でも彼女の天然キャラは、いい意味で暴走しているし、のだめ人形の多用によって、より、コメディらしさがよく出ていると思う。

のだめファンなら間違いなく楽しめる作品に仕上がった。

「のだめカンタービレ」は、音楽コメディとして、まさに空前絶後の成功を収めたといえる。

さて、後編が待ち遠しい。2010年4月になればどんな展開が待ち受けるのか？

のだめファン、クラシックファンのみならず、気になるところだ。「のだめ」にはまだまだ目が離せない。

オクレール先生風に言えば

「来年4月がたのしみだね。ベーベちゃん！！」なのだ。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 武内英樹

主演 上野樹里、玉木宏、竹中直人

製作 2009年

上映時間 121分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=5qjaxuh-lo8>

2008~2009映画マイベスト10

2008年から2009年にかけて、僕が観た映画の中で、これは！！と思う作品ベスト10を発表したいと思います。

選考基準です。

- ①スクリーンでもう一度観たい映画であること。
- ②DVDをコレクションしたくなる映画であること。
- ③上記二点を両方満たす事。

なお、期間につきましては、2008年の1月から2009年12月までとさせていただきます。
まずは洋画部門から発表です。

洋画部門ベスト10

2008~2009年洋画ベスト10

第一位 レスラー

(予告編) https://www.youtube.com/watch?v=TD7hq_PpgtM

第二位 マイケル・ジャクソン THIS IS IT

<https://www.youtube.com/watch?v=O4Z3jHx3leo>

第三位 アメリカン・ギャングスター

<http://www.youtube.com/watch?v=bTWuHoy3JMQ>

第四位 ライフ・イズ・ビューティフル

<http://www.youtube.com/watch?v=lh44dl5YHdo>

第五位 アバター

<https://www.youtube.com/watch?v=qYe-ncx3rVE>

第六位 グラン・トリノ

http://www.youtube.com/watch?v=p_LtBoOBLDk

第七位 幸せはシャンソニア劇場から

https://www.youtube.com/watch?v=sD_cS-9U41c

第八位 スラムドッグ\$ミリオネア

<http://www.youtube.com/watch?v=-KBxb9sl6al>

第九位 再会の街で

https://www.youtube.com/watch?v=sRiqz_WnYxc

第十位 ヴェラ・ドレイク

http://www.youtube.com/watch?v=_5L3hGxHumY

同十位 スタンドアップ

<http://www.youtube.com/watch?v=jXkVQm0QPyY>

邦画部門ベスト10

2008~2009年邦画ベスト10

第一位 沈まぬ太陽

<https://www.youtube.com/watch?v=dkk7pwZRGhE>

第二位 ディア・ドクター

<https://www.youtube.com/watch?v=nLWxyApxyQ>

第三位 のだめカンタービレ最終楽章 前編

<https://www.youtube.com/watch?v=5qjaxuh-lo8>

第四位 おくりびと

<http://www.youtube.com/watch?v=MOar08f-OnI>

第五位 陰日向に咲く

<http://www.youtube.com/watch?v=bIWyFKyCqYk>

第六位 空気人形

<https://www.youtube.com/watch?v=W6guDSG-tzg>

第七位 南極料理人

<https://www.youtube.com/watch?v=TzRvOKLd-kU>

第八位 パコと魔法の絵本

<https://www.youtube.com/watch?v=6G0gPxXvNBw>

第九位 ハッピーフライト

<http://www.youtube.com/watch?v=tNrAJ2UCGUg>

第十位 剣岳・点の記

<https://www.youtube.com/watch?v=RCfIDeioFls>

次点 ブタがいた教室

<http://www.youtube.com/watch?v=C9BKVBBpQ74>

選考を終えて 2008~2009映画ベスト10講評
洋画部門

洋画部門から参りましょう。この二年間、映画館で鑑賞した作品の中でもっとも印象に残っているのがダーレン・アロノフスキー監督の「レスラー」なんですね。

過去の栄光を忘れられない、中年レスラー。その悩める生き様は、私自身の過去の出来事、思い出とミックスされ、実に深い味わいのある作品となりました。総菜売り場でアルバイトしながら「週末は乱闘するんだろ」と店長に蔑まれるように言われ、それでも暮らして行かねばならない。自分が一番自分らしくいられる場所、スポットライトと熱狂した観客が待つ、あのリングに立ち続けたい。その不器用な生き様を描ききった監督の手腕に拍手を送りたいです。

第二位は、「マイケル・ジャクソン THIS IS IT」を選んでみました。

僕のように映画を何百本も映画館で観ていると、あるとき「奇跡の瞬間」に出会う事があります。それはまさに観客とスクリーンが一体となった、感動的な瞬間です。映画館で映画を観ると言う行為は、実は紛れもなく「ライブ」であり「一期一会」なのです。

本作ではそれが起こりました。

エンドロールが終わり、スクリーンに再びマイケルが現れます。お別れの挨拶のような軽いステップ。決めのポージング。

映画は終わりました。次の瞬間です。

劇場のあちこちから拍手が。感激のあまり涙する女性ファン達。興奮冷めやらぬ中、ほぼ満員の劇場から出口へ。その時、僕の後ろの男性が「こんなの観たら、他のなんか……」と感嘆しておりました。

さて、三位は僕の大好きなデンゼル・ワシントン主演「アメリカン・ギャングスター」を選んでみました。

監督はリドリー・スコット氏。

僕は、はっきり言って、この監督大嫌いなんです。とにかく歴史物の超大作を作りたがる。それが全部なんとも「大味」な作品ばっか。もう、いい加減引退したらどう？ なんて思ってたところへ、本作が現れました。凄いです。派手なアクションは、ほとんどありません。でもこれだけの迫力ある作品になる。それは、やはりデンゼル・ワシントンという希代の、黒人知性派俳優の演技力に頼るところが大きいです。

アメリカに実在した、麻薬王を演じます。彼は実に自分の「ビジネス」に誠実なのです。まじめです。ただ、扱っている商品が違法な「麻薬」であるだけなのです。彼はより品質のいいものを、「顧客」の求めに応じて、出来る限り安く提供する。

「いいものをより安く」という、商売の基本に忠実な人です。毎日規則正しい生活をし、家族の

絆を大切にし、母親には「真っ白な真っ白な」大豪邸をプレゼント。

だけどこの家は「真っ黒な真っ黒な」汚いお金で買ったもの。

この麻薬王が持つ人間の「業」というようなものを感じさせてくれる絶品の映画でした。

さて、ベストテンには出来るだけ劇場で鑑賞した映画を選ぶようにしましたが、それでも、どうしてもこの作品はランクインさせたいと言う映画がありました。それがロベルト・ベニーニ監督主演の「ライフ・イズ・ビューティフル」そして「ヴェラ・ドレイク」と「スタンドアップ」です。

通常、劇場で作品を見る場合、僕の経験から言うと、並の出来映えの作品であっても、DVDで鑑賞するより50%増しの感動が味わえます。しかし、この3作品はDVDで鑑賞しても深く胸に突き刺さるものがありました。もし機会があれば、スクリーンで是非鑑賞したい作品です。

2008~2009映画ベスト10

邦画部門

続いて邦画部門です。

邦画部門に関しては全て劇場で鑑賞した作品となりました。

その中で一位は「沈まぬ太陽」を選びました。山崎豊子さん原作のこの作品、僕としては珍しく原作も読んでおりました。人気作家や、高名な純文学の作品などでも、だいたい二三ページ読んでだけで放り出す僕なのですが、本作は違いました。文庫本にして、全5巻の超大作をほぼ一気に読み終えてしまいました。これぞ作家の筆力のなせる技です。

それを映画化する。

しかも、この作品で扱っている題材は、実際に起こったジャンボ機墜落事故。及び、事故を起こした航空会社の、泥沼のような社内体制を暴くものです。

政府関連の巨大企業の内幕を描く、実話ベースだけあって「映画化は不可能」とまで言われていたそうです。それを乗り越え、映画化にこぎ着けた製作者たち、そして渡辺謙をはじめとする、役者達の執念を感じる作品です。

なにせ原作自体が超大作。それを原作者、山崎豊子さんの意向もあって、一本の映画として成立させなければならない。

そのため本作は、邦画としては久々の途中休憩を挟む、202分の超大作となりました。

原作を読んだ者としては、やはり、ダイジェスト版にならざるをえないのかなあ〜、と言う部分はあるものの、作品としての構成は無駄がありません。しかも主人公、恩地元や彼の家族、そして墜落事故に巻き込まれた乗客とその家族が、丁寧に描かれております。

第二位は「ディア・ドクター」を選びました。

監督は今、最も注目を浴びている女流監督、西川美和監督です。

僕は劇場に観に行きましたが、上映しているその劇場では、今まであり得なかった「立ち見」まで現れる盛況ぶりでした。

笑福亭鶴瓶というキャラクターをこれほどうまく演出した、生かしきった監督はいないでしょう。山田洋次監督も、たびたび笑福亭鶴瓶さんを起用していますが、ここまでうまくハンドリング出来ていないように感じます。

実は笑福亭鶴瓶という人物は、やはり、どこかに「怪しさ」を内在させている人物なのです。その「怪しさ」をさりげなく、テレビで見かける親しみやすい「つるべさん」のオブラートを被せ、主人公が持つ人間としての陰影をを描き上げた、西川監督の手腕が光るのです。

三位は「のだめカンタービレ最終楽章前編」を選びました。

テレビ局が作ったドラマの延長作品なんて、とコアな映画マニアからは、ひんしゆくを買いそうなものですが、やはり本作は楽しい映画です。なによりクラシック音楽の敷居を低くし、しかもその質は落とさない事にこだわった映画です。僕は劇場で鑑賞しましたが、DVDで済ませた方は、この作品のほんとうの「美味しさ」を味わっていないと思うのです。

劇場の大スクリーン、そしてよい音響で味わう、フルオーケストラの演奏。しかもそれが「ウィーン楽友教会ゴールデンホール」での演奏。ちなみに、ここの指揮台に立ったのは、日本人では、あの世界的指揮者、小澤征爾氏。そして千秋真一役を演じた玉木宏君、このたった二人だけなのです。

世界でも超一流と認められなければ、立つ事が許されないウィーン・フィルの指揮台。そこに日本の音楽コメディ映画の俳優が、立つ事を許されたと言うのは、まさに「奇跡」です。そういう意味でも本作は本当に贅沢な映画なのです。

さて他にも印象に残った作品としては「空気人形」「パコと魔法の絵本」次点としました「ブタのいた教室」などがあります。どの作品も監督の個性が光る秀作でありました。

映画に宛てたラブレター 2008～09年版

<http://p.booklog.jp/book/75230>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75230>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75230>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ